

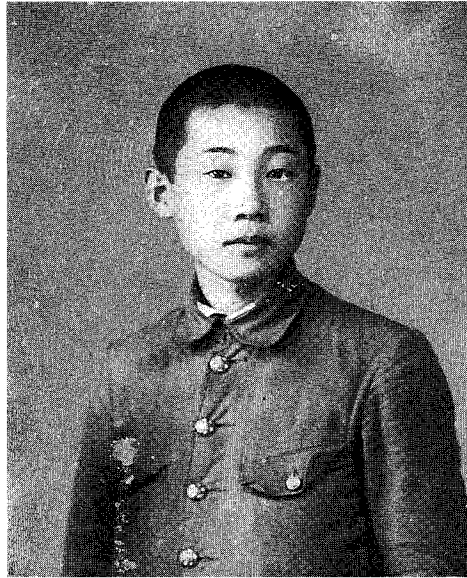
長崎・原子爆弾

18日間の記憶

小崎 登明



1945年・昭和20年 8月9日から、8月26日までの 出来事



15歳頃の筆者

表紙は、原爆で焼けた浦上天主堂の聖母マリア像

撮影は筆者。1975年の夏、浦上天主堂に於いて写す。この聖像は、天主堂の内部、正面祭壇の上部に掲げられていたフランス製の色付きマリア像であった。終戦直後、復員した野口嘉右エ門神父が、廃墟と化した天主堂跡で見つけ、北海道のトラピスト修道院へ持ち帰った。30年が経過して、野口神父は浦上天主堂へ持参し、返却した。その際、筆者が野口神父に会い、撮影した。

私は、長崎・原爆の直後、

爆心地へと向かって歩いた。

放射能のことは、全く知らず、

十八日間、原爆の丘で生活した。

原爆は、

こういう爆弾で、沢山の人が、

こういう傷を受け、

こういう死に方をした。

こういうことが有っていいものか。

核爆弾、放射能の恐ろしさ、

あの惨事は、歳老いても忘れない。

人類の滅亡、許してなるものか、

核兵器廃絶なくして、平和は来ない。

目次

はしがき	3
原爆の語り部（修学旅行生への講話） 家も母も燃えた、悲しい日の体験	5
原爆の日に、何を見たか？	21
講話の原本となった記録（昭和三十年に書いた）	22
浦上天主堂に於いて、平和の祈りを捧げていた母	23
私の家の周辺（原爆以前）	24
原爆の語り部となって、核兵器の恐ろしさを伝える	25
原爆前の自宅の周辺	27
沖縄で、現物の、魚雷を、見た	36
私が当時、記録した『原爆体験日誌』 （一九四五年八月）	38
原爆当日、爆心地へ向かって歩いた！ （当日の行動ルート）	47
翌日、八月十日	54
放射能の丘で、生活する （八月十日から、二十六日まで）	61
父の故郷、外海・黒崎村で、静養する	67
アウシュビッツと原爆の違い	71
私の体験に就いての原爆資料 赤迫トンネル兵器工場の証言	72
私の、その後の放射能障害・原爆症は？	78
原爆語り部の反響・平和の願いを次の世代に託す	79
あとがき	80
小崎登明・略歴	80

【はしがき】

長崎・原爆、五十四年目の夏が来る。

あの日、私は、十七歳。

父は小学一年のときに病死し、私に兄弟はなく、寂しく、母と二人だけで生活していた少年に、あの日、何があったのか。

これまで、私自身、幾つかの思い出の文を書いたり、また、原爆に就いては沢山のこと
が書かれ、語られている。

しかし、そうした中で、もう一度、私がいかに、見、聞き、体験した原爆の出来事を、
整理し、記録し、後世の人に、書き残しておこう、そう思い立った。

私なりの、事実を記しておきたい、それが私の気持ちである。

昭和二十年八月九日。朝、自宅を出た私は、三菱トンネル工場で被爆し、一時間後、ト
ンネルを出て、自宅へ戻った。全焼した自宅に帰ったのは、午後五時頃であつたらう。

その夜は、赤迫あかさこのトンネルへ引き返して、眠れぬままに、次の朝を迎えた。

八月十日。もう一度、自宅を確認しに行く。母の遺体は、何処にも、無かつた。

十日から、八月の二十六日まで、城山の原爆の丘で生活する。汗まみれになつて、働き、
水を飲み、体も洗わず、疲れた体、心で野宿した。

私は、丹念に、日誌を書いた。その日誌は今貴重な資料となつている。

原爆とは、どんな爆弾だつたのか。

原爆は、どんな被害をもたらしたのか。

そして原爆は、人の心に、どのような傷痕を残したのか。

私が今、書ける事柄を、率直に、記しておこうと思う。

あの日から、五十四年が経過した。私は、何事もなく人生を送り、早、七十一歳となつ
た。あと何年、生きるのか。

いずれにしても、私の人生の原点は、長崎の原子爆弾だつた。原爆を避けて、私は通れ
ない。論じられない。それ程、大きな痕跡を、私に与えている。

最近、私が避難した城山の明確な住所もわかつた。世話になつた、そのお宅の家族の墓
参りも果たした。これも、私の心を整理したい一駒であつた。

私は、母の五十回忌、つまり一九九四年八月から、公立の小・中・高校生のために、原
爆の語り部を始めた。今年の夏で、まる五年になる。

その間、語つた回数は、一〇一回となつた。私の話を聞いた児童から、感想文と共に、「小
崎さんの話を全校集会で発表した」とか、「授業参観で取り上げた」など、効果ある便りが
寄せられている。

元気なうちは、語り部は続けたい。原爆の話は、最近は何枚の大型・絵を見せるように
なつて、語りの迷いも溶けて、楽に、話せるようになった。自信もついた。

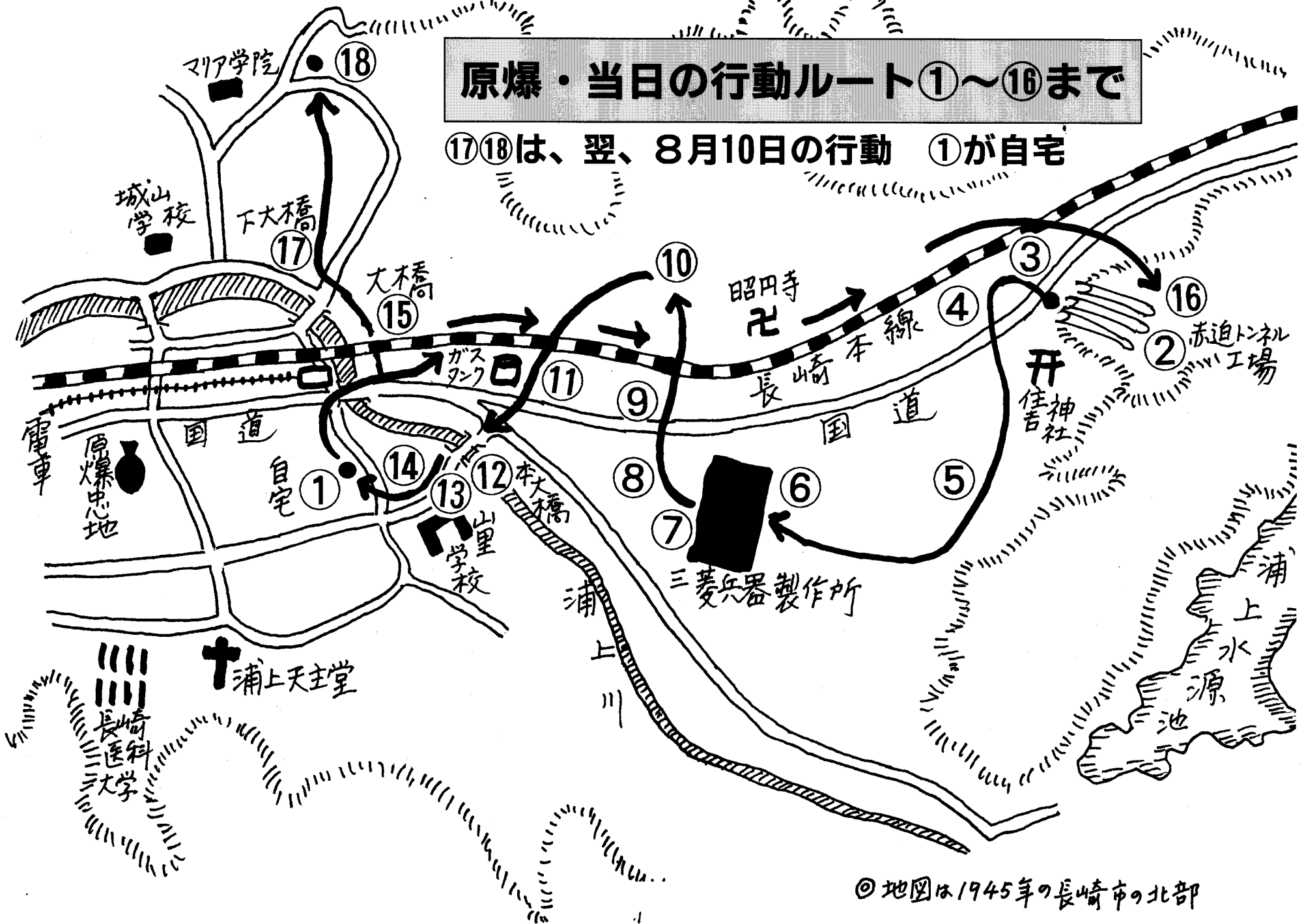
最後のメの言葉は、「平和の原点は、人間の痛みを分かる心を持つこと」である。遠い人
の痛みじゃない。「君の、隣りの、人の、痛みである」

一九九九年八月九日

小崎 登 明

原爆・当日の行動ルート①～⑬まで

⑬⑭は、翌、8月10日の行動 ①が自宅



◎地図は1945年の長崎市の北部

家も母も燃えた、悲しい日の体験

私は、原爆で即死した母親の五十回忌を期に、一九九四年八月九日から、原爆体験の『語り部（かたりべ）』になった。春と秋、長崎へ修学旅行に来て、平和学習をおこなう公立の小学生、中学生、高校生たちに、原爆資料館で、話を聞かせている。

話は、約一時間。話の内容は、進み具合によって、一部を省略したり、内容の順序を変えたりしている。私の原爆体験講話は、五年間に、一〇一回に達した。

【原爆の日は忘れない】

私は小学一年生の時に、父が病気で亡くなりました。

それから十年たって、今度は母親が、長崎の原子爆弾で亡くなりました。

この世の中には、辛いこと、悲しいことが沢山ありますが、お父さん、お母さんと死に別れることは最も辛いです。特に、子供の頃、別れるのは、辛い。

お父さんが亡くなったのは小学一年生の時ですから、もう、昔むかしのことです。小さい時ですから、（今でも背が小さいですが）、お父さんの顔も、死んだ日も、もう覚えていません。

しかし、お母さんが死んだ日は、いつになっても忘れません。それは『一九四五年八月九日、午前十一時二分』、これが、その日です。長崎に、原子爆弾が落ちた日、落ちた時間が、命日です。

長崎に居りますと、毎年、この時間になりますと、長崎中に、『ウーン』と、サイレンが鳴り渡ります。すると、平和祈念像の前に沢山の人が集まって冥福をお祈りし、また道を歩いていたら人も立ち止まって、両手を合わせて冥福をお祈りします。ですから、長崎に居る間は、決して、この日を忘れることはありません。

【母ちゃん、行くよ】（地図の①の場所）

原爆の朝、私は、お母さんと差し向かいで、最後の食事を取りました。

その頃は、お米が不足で、大豆カスや、僅かな玄米について、食べていました。

朝の食事が終わると、『母ちゃん、行くよ』と言って、家を出ようと思いました。

しかし母は、私の声が聞こえなかったのか、返事をしてくれませんでした。それで玄関を出て、もう一度、振り返って、『母ちゃん、行ってくるからね』と声をかけますと、ちょうど夏でしたから、窓が開いていて、母の顔が、その窓の真ん中に見えたのです。母は台所で、朝の食器の洗い物をしていました。

その時です、私の目と、母の目がぴたり合って、母は、私の方を見て、にっこり笑ってくれたのが、最後です。それが、この世の別れになりました。

私は、夏の朝の、爽やかな空気をいっぱい吸って、母ちゃんと呼んで出かける、その

朝までは、本当に幸せだったのです。

玄関を出て、石段を降りました。長崎は、坂や、石段が多い町です。その時、私が履いていた物は、何んだったでしょう？

【下駄を履いていた】

皆さんが今、履いているような『靴』は有りませんでしたよ。靴は『ゴムの木』から来ています。ゴムの木は日本に一本も有りません。南方に有るのです。大事な物ですから、兵隊さんと、偉い人だけが履いていました。私たちは皆、下駄でした。

しかも、下駄屋さんも戦争に行つて、店は閉まっていました。

長崎は山が多いです。山には木が沢山あります。その木を自分で切ってきて、自分で作った、恰好の悪い下駄を履いていました。

私の家は、原爆が落ちた時、爆心地から、(爆心地というのは、原爆が落ちた中心地のことです)五〇〇メートルの所にありました。

五〇〇メートルといたら、すぐ、そこですよ。歩いて、五、六分の所です。ですから原爆が落ちた時、それは、ひどいものでした。家も、母も、吹き飛んでしまつて、私が帰つた時、何もありませんでした。母親の骨さえ、拾うことは出来なかつたのです。

私は何故助かつたかといいますが、十七歳でしたが、学校へ行かないで、爆弾を作る工場で働いていました。

工場といつても、もし、このような平地にあつたら、死んでしまいますよ。私が働いていた工場は、トンネルの中にあつたのです。

山をくり抜いたトンネルです。私の家から歩いて三十分ぐらいの、山手にありました。三菱兵器トンネル工場といえます。

【トンネル工場で、爆弾を造っていた】(地図の②の場所)

山をくり抜いたトンネル工場で、海軍の特攻機に乗せる爆弾を造っていました。魚雷という爆弾です。

魚雷というのは、長さが、三、四メートルほどで、ソーセージのような形をした長い爆弾で、敵の軍艦めがけて、飛行機から落とします。

魚雷が海の中に落ちた時、あまり深く入ると、底に沈んでしまう。あまり浅いと、敵の砲撃を受けて、やられてしまう。ですから、海の中で、ある一定の深さを保ち、安定させながら走らせるのです。

私が作っていたのは、その安定させる『安定器』の部品でした。大切な役目の部品で、魚雷を安定させ、一定の推進を保ちながら、敵艦を攻撃し、撃沈させるのです。

【五十年ぶりに、トンネルを訪ねる】

この間、私は、五十年ぶりに、このトンネルを訪ねてみました。今でも、そのままの形で残っています。

トンネルに入つてみて、驚いたのは、余りにも小さなトンネルだったことです。

トンネルといえば、バスやトラックが通る、大きな普通のトンネルを、皆さんは思い出すでしょう。しかし、私が働いていたトンネルは、何と、高さが二メートル五十センチぐ

らい、横も四メートルと少しで、とても狭いのです。

こんな場所で、爆弾を作っていたのかと思うと、へんな気持ちになりました。

このように小さなトンネルでしたが、しかし、長さだけは長かったです。三本のトンネルがあつて、一本の長さが、三〇〇メートルありました。隣りも、三〇〇メートル。その次も、三〇〇メートル。ですから合わせると、九〇〇メートルです。

九〇〇メートルといったら、長いですよ。

海軍の秘密の工場ですから、トンネルの中で、どれだけの数の工員が働いていたか、分かりません。私は、二番目のトンネルの入口付近で、四尺旋盤の精密機械を使って、懸命に働いていました。十七歳でした。

【午前十一時二分、時がきた】

突然、耳をつんざくような大きな音がして、入口から大きな風が、ふあっと吹いてきて、思わず横倒しにされてしまいました。凄い爆風でした。そして、パツ、パツ、パツと、電気が消えてしまったのです。このような蛍光灯はありませんよ。電球です。

電気が消えて、真っ暗になったので、作業が出来ません。仕方がないので、私は機械の傍に座って、隣りの少年工員に、(同じ年頃の仲間でした)、「オイ、一体、どうしたんだ」「何が有ったのか」「外で、トンネル工事のために、ダイナマイトを爆発させたのかも知れないな」など、話し合っていました。

【髪の毛が燃えた女子学生】

しばらくすると、トンネルの入口から、フラ、フラと、誰かが入って来るではありませんか。その人は泣きながら、入ってくるのです。

私は、立って、近寄ると、女学生でした。

トンネルの暗闇の中で、私は石油ランプを彼女の顔に近づけました。すると、何と、その女子学生の髪の毛が燃えてしまっているのです。そして皮膚も火傷をしていました。

ちようど、私と、同じ年頃の女学生でした。当時は、女子学生たちも、もう学校へ行かないで、学徒動員で、軍需工場のお手伝いをしていました。その頃の男女は、今と違って、今はお互い仲良く話しますが、当時は敬遠して、話さなかつたのです。

それでも私は心配して、「どうしたの?」と、聞きました。

すると、十一時二分ですから、お昼前ですよ。トンネル工場で働く工員たちは、秘密ですから何人居るかわかりません。三百人ですか、五百人ですか。その人たちは皆、お昼はお弁当でした。お弁当はトラックに積んで運んで来ました。その女子学生は、弁当を運ぶ係だったので。それでトンネルの外の庭で待っていたそうです。

「すると、長崎の町の方が、ピカリと、太陽のような光が走って、気がついてみたら、こんな姿になって……」と、泣くのです。

女の子が、髪の毛が燃えて、皮膚が焼けたら、可哀相ですよ。泣くのは当然です。

ところが、その女子学生の後から、今度は次から次へと、怪我人が避難して来たのです。見ると、赤い血に染まった人や、足を引きづっている人、シャツの破れた人、女学生どころでは、ありません。トンネルの中は、叫び声や悲鳴で、騒然となりました。

負傷者が増えてきたので、私たち少年工員たちは恐ろしくなって、暗い機械の傍に隠れ

ていました。

【怖い海軍の警戒隊】

トンネル兵器工場は、海軍の所属でしたから、何時も海軍の兵隊さんが武装して守っていました。長い鉄砲を持って、鉄砲の先に剣を付けて、お腹のバンドには弾入れを付けて、白いゲートルを付け、軍靴を履いて、「誰か、怪しい者は居ないか、スパイは居ないか、まじめに働いているか、事故はないか」と、厳重に守っていました。

その海軍の警戒隊兵士が、私たちを見つけると、私たちに剣を突きつけてくるのです。私たちは日本人だよ。兵隊も日本の兵隊だよ。同じ日本人なのに、それは脅かしかも知れないが、恐ろしいですよ。戦争とは、そういう雰囲気でした。警戒隊の兵隊は叫びました。

「お前たちは、今から、この工場内に於いて、負傷者の収容に務めよ」

私は警戒隊兵士が恐ろしいので、負傷者の所へ行ってみると、血だらけの者、手の無い者、腹ワタの出た者、それらを見て私は、これはたまらん、と闇に隠れてしまいました。すると今度は、別の警戒隊兵士が来て、「ユラ！お前たち、元気な者は、皆、外に出ろ！ここは、負傷者たちの、治療所になる」と、剣と、鉄砲を突きつけてくるのです。

恐ろしくなって、私は、仲間の少年工員たち、三、四人と、一緒に、初めてトンネルを出ました。

原爆が落ちて、一時間ほどが経っていたと思います。

【世の中が、廃墟と化す】

仲間の少年工員と一緒に、赤迫トンネル工場を出ますと、国道を歩いて、まず、親工場であった大橋工場へ行こうと、相談がまとまりました。

トンネルを出て、私が最初に感じたのは、廃墟と化した世の中です。今朝、トンネルに入る時に見た風景と、まるきり違うじゃないですか。

朝、トンネルへ入る時には、緑の山や、木々がありましたよ。その緑の、山や、木々は、何処へ行ってしまったのか。家も、人も、無いじゃないか。何処へ行ったのか？

山は焼けて、木々は枯れ、家は燃えて、人影は全く無い。

これは一体どういうことだ。何が起こったのか。

何処に、爆弾が落ちたのか。余りにも世の中の変わりように、呆然としました。

【家が、盛んに燃える】（地図の③の場所）

そして何よりも、びっくりしたことは、トンネルの近くに、二階建ての立派な屋敷がありました。何時も、その屋敷を見ながら、トンネルへ入っていたのです。

ところが、その家が猛烈に燃えている。家が燃えているのに、誰も消さないのです。

今までは、どんな小さな火でも、厳しい訓練、訓練で、火を消す練習を繰り返していました。バケツで火を消していましたが、水の掛け方があったのです。バケツの水を、上から掛けるのは、ナニナニ法、下から上へ掛けるのは、ナニナニ法と、掛け方にも、名前が付いていました。

今こそ、あの家を消すべき時なのに、誰も、消さない。消火に当たる人がいない。

なぜ消さないんだ？一体、どうなっているのだ？不思議に、思いました。

火を、消さなくても、よくなったのか。人間の考え方が変わってしまったのか、と私は思いました。

浦島太郎という話があるでしょう。助けた亀に連れられて、龍宮城で楽しい日々を過ごしたが、帰って見たら世の中が、すっかり変わっていた。あれ、ですよ。

その通りですよ。トンネルに入っていた間に、世の中が、すっかり変わってしまった。まるで『へんてこな国』に入り込んだような、不思議な錯覚に捕らわれたのを、はっきり覚えています。

実は、家を消す人が、居なかったのです。人間はすべて、死んでいるか、怪我しているかの、どっちかです。これは、偉い大変なことになったな。

【反転タクシーと運転手】（地図の④の場所）

「オイ、あれを見ろよ」。友達の少年工員が言いました。

黒塗りのタクシーが、道路から畑へ、二十メートル余りも吹き飛ばされて、自動車の腹部を空に向けて、ひっくり返っているのです。

運転手は、かろうじて車から出て、車の脇で、白いシャツは破れ、汚れ、皮膚は丸焼けになって、座ったまま、畑にうずくまっています。

爆風で、車が、あんなふうには投げ飛ばされるなんて！

二・一キロメートルの地点だったと思います。私たちは、その車を眺めただけで、その車の所までは、行きませんでした。

見て、ため息をつくばかりです。その後、運転手は、どうなったか。おそらく死んだでしょう。

【自転車の男】（地図の④の場所）

また、畑には、別に、自転車もろとも吹き飛ばされて、土まみれになって（土まみれが印象的でした）、あえいでいた男性も居ました。

可哀相に、見ていた私たちにも、どうしようも無いのです。同じく、二・一キロメートルの地点でした。場所は、自動車も、自転車も、国道から、岩屋山寄りでした。

この爆弾は、何処に落ちたか、わからないが、凄まじい破壊力です。めっちゃ、くちゃで、道がない。全て、ホコリだけです。私たちは、ただ呆然となるだけでした。おろ、おろ、しながら、あてどもなく歩いた感じでした。

【丘の上から、町を見た】（地図の⑤の場所）

住吉神社付近を通過したのは、覚えていない。

私たちは、煙と火の手のため、国道を真っ直ぐ進めなくなったので、左へ折れて、小高い丘へ登りました。今の家野町の丘です。

その風景は、今でも覚えています。畑が広がって、なだらかな丘があつて、家が、遠い所に、ポツン、ポツンと、点在している感じでした。丘に登ると、広く長崎市内、特に浦上一帯が、迫って見えました。

煙が、燃々と、立ちのぼり、火の手が至る所から、上がっています。空を焼いているの

です。

「こりゃ、ひどい。エライこと、なりおったバイ」。恐怖感に、捕らわれました。私の足が、わな、わなと、震えます。夏だというのに、寒けさえ、してきました。しばらく無言のまま、その場へ、たたずんでいました。

【原爆とは——爆風、高熱、放射能】

普通、爆弾といえば、大砲から飛んで、地面に落ちて爆発します。或いは、飛行機から落として、地上に落ちて爆発します。

原子爆弾は、空中で爆発するのです。

飛行機から落下傘で落とした後、しばらくして、強烈なエネルギーで、真つ赤な火の玉になって爆発します。落下傘が見えたから、落下傘爆弾と噂してしました。

太陽のような光が破裂して、キノコ雲が上がります。そして、しばらくすると、黒い雨が、所によつては降ります。

火の玉は、直径が一五〇メートルもあり、温度は、二万度から、三万度といわれます。想像もつかない高温です。

原子爆弾からは、爆風と、高熱と、放射能が出てきます。

爆風——私を、トンネルの中で吹き飛ばし、押し倒した。タクシーや、自転車、撥ね飛ばされた。

高熱——女子学生の髪の毛も、皮膚も、焼けてしまう。

放射能——そして、恐ろしいのが、これです。しかし、原爆が落ちた当時は、情報が全く無く、まだ放射能の恐ろしさ、恐怖は全く知らなかった。

【立ったまま死んだ人】（地図の⑩の場所——下大橋の直ぐそば、城山寄りのところ）

一発の原子爆弾で、その年の間に、七万三千八百八十四人の人が亡くなりました。

また、負傷者は、七万四千九百九人でした。

沢山の人が一辺に死んだ。原爆の丘をさまよった私は、それこそ沢山の、いろいろな死体を見ました。人間が一度に、こんな沢山、死んで、よいものか、とも思いました。

その沢山、死んだ人を見た中で、一つだけ、忘れられない死体があります。

それは、人間が、立ったまま、死んでいるのです。

人間というのは、死ぬときは、横になって死ぬんですよ。立って死ぬことなんか、あるもんですか！

しかも、その人は、真つ黒です。強烈な原爆のエネルギーのために、一瞬の内に、シミになってしまったのです。シミ？わかりますか。木炭です。

両方の目の玉、眼球は飛び出し、舌を思い切り出して、舌も真つ黒です、真つ黒コゲになって、立ったまま死んでいる。

あれは本当だったのか。五十年経った今でも、信じる事が出来ません。何か、後ろの方に、寄り掛かるものがあって、それで立っていたのかなアと思いました。

すると、昨年の夏休みでした。私は広島に行きました。原子爆弾は広島にも落ちたのです。長崎の原爆のことは、よく知っていますから、広島はどうだったのかなアと、原爆資料館を見学して、売店の所で、写真集を見ていました。

すると、広島にも、有ったじゃないですか。

それは、広島のお母さんでした。私のお母さんじゃないよ。その人も真っ黒です。なぜ、お母さんと、分かったかと言いますと、赤ちゃんを抱いて、立ったまま、真っ黒になっているのです。赤ちゃんも真っ黒です。それでお母さんと分かりました。

しかも、そのお母さんは、片足で立っていたのです。

このお母さんが、赤ちゃんを抱いたまま、原爆の閃光を見て、「あッ！怖い、逃げよう」と、片方の足を上げた瞬間に、スミになってしまったのです。

その写真を見て、（ああ、私が見た、立って死んでいた人は本当だった）と、確信しました。

【兵器の大橋工場へ入る】（地図の⑥の場所）

私は、以前、働いていた三菱兵器製作所の大橋工場へ、自然に、足が向かいました。

トンネル工場へ通う前に働いていた工場です。

その時、仲間の少年工員たちは、もう一緒には居なかったように思います。私は一人になつて居ました。

かつて私が働いていた場所に行つてみました。勝手は、わかっていました。

工場は完全に破壊されてしまいました。まだ燃えてはいなかったが、鉄骨はへし折れ、屋根は吹き飛ばされて、完全に倒壊されていました。ここに居たら、私も死んでいたかも知れません。私は生きていることを、つくづく感じました。

爆破された兵器工場に、人影は無かった。死体が散乱し、すでに、ムシロがかぶせてあつたように思います。

私が原爆直後の浦上を歩いて、一番、不思議に思ったことは、立って歩いている、元気な人が居なかったことです。まるで自分一人が歩いているような、奇妙な、錯覚に捕らわれました。自分が何か、エリートになった気持ちでした。

あちこちに、死体のみが、散乱している。死体が、泥にまみれている。『泥にまみれた死体』それが印象です。

【負傷した女子学生】

工場に入つても、どうしていいのか迷っていた時、「オーイ、来てくれ」と、初めて男の声で呼ばれました。元気な人が居たのです。

声の方へ行つて見ると、三、四人の男の工員が、女子学生を助けようとしていました。

女子学生は、工場の大きな材木の下敷きになり、足を挟まれています。顔は蒼白。苦しみ、あえいでいます。

「大丈夫だ、しっかりするんだぞ」と男が慰め、励ましていたものの、既に体じゅうが腫れ上がっていました。かつて母親から「人は死ぬ時には、体が腫れ上がってしまうのよ」と聞いたことを思い出して、（ああ、この女子学生はもうダメだな）と思いました。

【女子学生を、助ける】（地図の⑦の場所）

それでも私たちは頑張つて、大きな木を材木の下に入れて、テコを使って、ウンと、持ち上げると、隙間が出来る。「よいしょ」と、何とか女子学生を引きずり出して、「タンカを持って来い」。女子学生を担架に乗せると、私にも「運べ」と言うのです。

私は運びたくない。「お母さんが、どうなっているか、わかりませんか、行きます」「イヤ、ダメだ」。仕方なく、私もタンカを持ちました。

私は後方の右側の棒をにぎりました。

四人で、棒を取って、その時、私が聞いたのです。家も、病院も、全滅です。医者も居ないし、看護婦さんも居ない。この女子学生を、「何処まで、運べば、ヨカとですか」すると、大人の工員は、ちゃんと知っていました。

「あそこに、鉄道の線路が見えるだろう。線路まで、運べ。すると救援列車が助けに来る」「ハイ、わかりました」

それで、線路を目掛けて走り出したのです。

周りの家々は、破壊されているから、線路が見えます。夏ですよ。八月です。長崎の夏は暑いです。汗まみれになって、女子学生を運びました。

【立派な屋敷の主人】(地図の⑧の場所)

ある屋敷の前を通りました。私は何時もそこを通って工場へ通っていました。何時も、(立派な屋敷だな)(庭だな)と憧れていた家です。

ところが、その家のご主人でしょうか、庭に上がる石段の上にうずくまって、膝を立てて、座っていました。髪の毛は焼け、シャツは破れて、皮膚もべっとり火傷を受けていました。哀れな姿に変わっていました。

その時は、まだ生きていましたが、私が二、三日して通ると、主人はそのままの形で、死んでいました。

そして誰も死体をかたつける人も無く、夏の太陽に照らされて、肉体は醜く腐れていました。あの姿は、今も鮮烈で忘れません。

お金があっても、立派な家が有っても、何になるか。人間はこんなにも弱い。もろい。営々として築いた総ての物も、あつけない破壊、滅亡していく。それが人間の世界だ。物に信頼して生きて何になろう、そんな強烈な考えに捕らわれました。

【担架をほって、逃げた】(地図の⑨の場所)

タンカを取って、本通りに出ます。また脇道へ入り、小川を渡って、線路の見える所まで来ました。

その時です、「おや？」と、一人が耳を空に向けますと、皆も、空を見上げました。

「爆音だ」「敵機だ」「また、やられるぞ」「こわい」「逃げよう」

後で、わかったのですが、その飛行機は、カメラを積んだ偵察機だったのです。原爆の被害状況を写す飛行機で、低空で、飛んで来ました。午後一時過ぎ頃でした。

しかし、下で、タンカを運ぶ私たちには、カメラを積んだ飛行機か、爆弾を積んだ飛行機か、分かりません。

(ああ、また、爆弾を落として、今度は私が、死んだら、怪我したら、どうしよう)

(それならば、この女子学生は、どうしよう)

可哀相なのは、タンカの女子学生です。

だが、タンカを持っていた一人が、目で合図しました。手を一、二度、上から下へおろしたように思います。すると、待っていましたとばかり、四人はタンカをその場に置くと、

一目散に、走って逃げたのです。

皆は、散りじり、ばらばらになった。私は、鉄道線路の方向へ逃げたのです。

これが人間の本来の姿です。自分だけ助かれればよい。他人はどうでもよい。人間は誰しも、その考えで生きています。私は原爆の丘で、すべてを失ったけれど、失って初めて、自分の心の中に、大きな弱さがあるのを知ったのです。

原爆とは、国と国との戦争でした。

しかし小さな私の心にも、十七歳だったけれども、小さな戦いがあったのです。

そしてその戦いは、今でも続いているのです。

原爆の丘で、私がどのように生きたか、それが問題なのです。

【仇なる仲間を許せない】（地図の⑩の場所）

私は一人、線路を越えて、林の中に入りました。

そこは、家は有りませんでした。林があつて、背後は小高い山になっている感じの所でした。林の中へ入ると、そこには沢山の怪我人たちが、かたまつて、唸り声を上げていました。

（なんーだ、人間はここに居たのか）

多くの負傷者が倒れて、横に伏しています。木と木の間には、負傷した人が群れをなしています。血まみれで、泣く者、わめく者、火傷で苦しむ者、それは誠に悲惨な状態でした。この悲惨さを、私は見るに見かねて、脇の方から、もつと奥へと逃げ込んだ。

その時、私の目の前に、偶然に横たわっている者、それは工場の仲間でした。

しかも、仲の悪い仲間でした。

彼との間に、こんな出来事があつたのです。トンネル工場に移転する前に、ある晩、彼は私を呼び出して、人の居ない工場の隅で、私を思い切り殴りました。私は背が低く、体が弱かつたので、ナメられていたのです。彼の拳骨が、私の頬に炸裂した。それでも私は耐えた。私は黙って我慢した。抵抗出来なかつた。彼は、私よりも、二、三歳、年上でした。でも私には、叩かれる理由は無かつたのです。

その後で、私が彼から叩かれたことを知つた、私の仲間の鹿谷君が、同情して、「よし、ナマイキな奴だ。彼を、やつつけよう」と、彼に喧嘩を申込みました。その後も、いざこざが続いていたのです。

そして決闘は、その週の土曜日、つまり、後、二、三日すると、工員仲間が二手に別れて、決着がおこなわれる手筈になつていたのでした。

その仇なる彼が、今、お腹に重傷を受けて、腸が飛び出して、苦しみ、喘ぎ、唸っているではありませんか。

彼は、その日は夜勤で、寮に寝ていたらしいのです。そこを、やられた。もしも私が夜勤だったら、私も彼のようになつていたでしょう。

私は彼と同じ週の勤めでしたが、ある時、私が Dengue 熱（高熱が出る熱病の一種で、戦争中、流行した）に罹つて、一週間ほど休みました。出勤した時、選んだ週が、彼と反対の週だったので、幸い、私は昼間の勤めとなり、助かりました。（私が助かつたのも、或いは、彼から叩かれたからかも、知れませんが）

人間の出会いとは、不思議ですね。

もし、その時、その場所で、彼に出会わなかったら、五十年経った今は、もう、すっかり、忘れていたでしょう。しかし、出会ったばかりに、今も私の心に、彼は生きているのです。心の痛みとして、残されているのです。

私は、言いましたよ。「ざまア、見ろ」と。

敵なる相手は、腹部に重傷を受けて、横たわって、苦しんでいる。私は、上から、彼を見下している。

私は、あなどって、言ったのです。「いい気味だ、くたばったのか」

彼は、「ウーム、畜生」と、呻いて、うなだれた。私が「ざまア、見ろ」と言ったばかりに、今も心の痛みとして残り続けているのです。

私は、あざ笑って歩き出した。これが私の本当の姿だったのだ。

おそらく彼は死んだでしょう。やはり可哀相でならない。あの林の中での思い出は、何時までも残っているのです。

【母親が心配だ】（地図の⑪の場所）

仇なる彼の傍を離れて、林の奥の防空壕に入りました。見知らぬ男性と、それに何処かの見知らぬ女性と、三人で、無言のまま、壕の中で、時間を過ごしました。

言い知れぬ孤独感、静けさ、ひんやりする空気、重い雰囲気の中で、飛行機の爆音が遠ざかるのを待ちました。私は、うつむいて目を閉じていた時、心が段々と沈んで浮かび上がったのは、母の姿でした。

（僕は何を、しているのだろう。早く家に帰ろう）

爆音が聞こえなくなると、壕を出ました。もう一度、爆音がないのを確認して、林を出ました。午後三時頃だったと思います。

それから、線路を越えて、ガスタンクの横を通りました。

巨大なガスタンクが、もみくちゃに、なって、つぶれている。周りに、死体が散乱していました。ガスでやられたのかも知れないと思った。馬の死体も転がっている。

私の心は、もう何も、感じなくなっていました。人間の死体を見ても、無感情です。死体は泥まみれで、土人形のような感じになっています。

とにかく死に倒れている人が多い。動く者はいない。自分ひとり、生きている感じでした。生きた、健康な人間に会えないような気がしていたのです。

【川の中、小学六年の男の子】（地図の⑫の場所）

私の家に行くためには、浦上川の橋を渡らなければ行けない。私は下駄の音を鳴らしながら、川の傍まで来ました。

浦上川にかかっているのが、『本大橋』です。

しかし、橋が折れて、川に落ちていっているのです。爆風で、やられたのです。

これでは渡れません。（どうしよう？）。辺りを見回しながら、川の中へ降りることにしました。

近くの石段を下りて、川洲にとどいた。草が生えていて、土があって、それから川の水が流れています。川の流れに降りて来て、びっくりしました。沢山の死体が浮かんでいるのです。負傷者も、あえいでいました。

原子爆弾を受けた者は、高熱のため、ノドが乾くのです。

それで、「水を下さい」「水が飲みたい」と、水を求めて川に入り、水を飲みました。その水も綺麗な水ではありません。爆風のため、土も埃も舞い上がって、川の水は木切れが浮かび、土で汚れていました。それでも皆は飲んだのです。飲んだ人は皆、死んだ。死体が川に幾つも転がっていて、髪の毛が水の流れに揺らいで、それは不気味でした。

私は早足で、川幅の狭い、流れの静かな所を選んで、そこを通り過ぎようと思いました。川を渡ろうと下駄を脱いだ、その時でした。

「お願いです、助けて下さい」と、私に声をかけた者がいる。少年です。私は、二、三歩、引き返して、「君、だれ？」と、尋ねました。

「ぼく、小学六年生です」「泣くなよ、どうしたんだい？」

「ぼく、稲佐の者なんです。夏休みで、浦上のおじさんの家に遊びに来ていたんです。したら大きな爆弾が落ちて、家も、おじさんも、やられて、ぼくは、ここまで逃げて来ました。足をやられて、もう動けません。痛くて歩けません。お願いです、何処へでもいいですから、ぼくを、連れて行って下さい。ぼくを助けて下さい」

助けるって言ったって、病院もなければ、お医者さんもない、どうしようもないのです。原子爆弾とは、すべてが、やられてしまっ、助けることが出来ない爆弾です。だから恐ろしいのです。私は言いました。

「助けると言っても、浦上も、稲佐も、長崎全体が、全滅なんだよ。お医者さんも、病院も、全部、やられているのだよ。だから、ここへ、じっとして、居りなさい。すると、後で、警察のおじさんと、警防団のおじさんが来て、助けてくれるよ」

「いやだ。いやだ。ここに居たら、死んじゃうよ。何処でもいいから、連れて行ってよ、お願いだよ」。少年は、あてがはずれたのか、必死になって叫んだ。

「ぼくもネ、お母さんが、どうなって居るか、わからないから、もう行かなくてはいけません。助けてくれないの、お兄さん」。私のことを、お兄さんとまで言った。

だが、私はそこを素通りして行く。その少年に背を向けて去って行く。

私の背中で、「お兄イーサン！」と言う、悲しい叫びが届いていました。私は振り返らなかつた。川の石段が上がって、道に出ました。

【女子と母親の髪】(地図の⑬の場所)

浦上川を渡って、道に上がりました。ベアトス様の墓あたり、家はまだ完全に燃えていなかった。ただ、倒壊していました。

倒れた家々を、乗り越えて行く。木切れの上を、跨いで行く。この場所で覚えているのは、死んで投げ出された子供の死体が、泥人形そっくりに転がっていたことです。

崩れた家の側に、小学校の一、二年生ぐらいの小さい女の子が一人で泣いていました。少女は、怪我はしていない。私を見て、「助けて」と、言いました。

「どうしたの?」「お母さんが家の下敷きになったの」

家は、燃えてはいなかったが、めっちゃ、くちやに、壊れていました。

屋根が落ちています。私は頭を、かがめて奥を見ると、落ちた屋根の下から、髪の毛のようなものが見えました。確かに、あれが、お母さんだろう。だが、どうしようもない。私一人では、到底、助けられない。崩れた家の大きな材木を、どうして一人で取り除くこと

が出来ようか。(無理だよ。そんなの)。諦めました。

私はそのまま、その場所を立ち去った。

やがて間もなく、その場所に火の手があがって、崩れた家は燃えてしまった。母も、子も、どうなったか、わかりません。

逃げた！

助けられない！

それが、私の原爆の日だった。十七歳の、悲しい体験でした。

【家は燃え、母は居ない】(地図の⑭の場所)

私の家が見える所まで来た時、視野が開けた時、私は嘩然と立ちすくんだ。

一体どういふことなんだ。一軒の家も、まともに、残っていないじゃないか。

私は瓦礫の中を、家に近づいて行った。後で分かったことですが、家は爆心地から僅かに五〇〇メートルの所にありました。この距離では、大変です。

家は完全に燃えて、消滅している。家は、簡単な造りだったからか、案外、易々と燃え尽きたのでしよう。母親は何処だ？何も動くものは無い。

「お母アーさん」

「母アーチャン」。叫んでも、答えは、無かった。

辺りを見回しても、母親らしい死体を見つけることができなかった。

母親には、私が工場内で職して、指輪を作って、はめさせていました。指輪を付けた死体は、無かった。私は魂が抜けたかのように、呆然と佇んでいた。

母はどこに行ったのだ。何をしていたのだ。涙は出てこなかった。泣けなかった。

家の有った場所に、入ることは出来ない。燃えて、火が残っていたから危険だと、判断した。ダメだと、あきらめた。午後四時三十分頃であつたらう。

【線路を伝って、トンネルへ】(地図の⑮の場所)

私は歩くのが精いっぱいでした。力も無く、今夜は、トンネル工場へ戻ろうと思い、大橋へ出ました。この橋は、大丈夫でした。大橋から鉄道線路を伝わって、赤迫へ歩きました。この辺りのことは、よく覚えていません。

午後五時過ぎか、或いは、もっと時間が経過していたのかも知れません。やっと、トンネル工場へ戻りました。

トンネル内は、前にも増して混雑していました。それで中へは入らず、並びの山で夜を迎えました。もちろん、昼も、夜も、食事は何も食べていません。食べるどころの有り様ではないのです。

【その夜の長崎の空】(地図の⑯の場所)

赤い夕日が、稲佐の山に傾いて行きます。

(ああ、今日は何という日だったのか)。考える力は、十七歳の少年にはもう有りませんでした。

その夜は、長崎全体が炎と煙に包まれていました。私は、仲間の工員と、恐怖を語り合いながら、一夜を過ごしました。

ただ、火と、煙。後は、虚しい。生涯、忘れることの出来ない大火の夜を、見た。

私は草の上にアグラをかき、左手を膝の上に乗せて、頭を抱えて、燃え上がる火の手を何時までも見ていました。

私は何時しか、疲れたのか、浅い眠りに落ちました。

夢か、幻か、母親の姿を見て、思わず叫んだ。

「母ちゃん、どこにいるの?」。母は答えず、微笑み残して消えました。もう、この世の人でない、と私には感じられたのです。

【母が語った小さなカエルの話】

昔々ある所に、小さな子供のカエルがおりました。このカエルは我がままなカエルで、お母さんの言うことは一つも聞きませんでした。

「山に行きなさい」と言えば、川に行く。

「川に行きなさい」と言えば、山に行く。

「お手伝いしてね」と言えば、遊びに行く。

「勉強しなさい」と言えば、眠ってしまう。困ったカエルでした。

やがてお母さんは病気になるって、死ぬ日が近づきました。

お母さんは、死んだ後は、体を安全な所に埋めてほしいと思い、(山の方が安全だ)と思って、子供のカエルに、「私が死んだら、川に埋めてね」と言い残しました。川と言えば、山に埋めてくれると考えたのです。子カエルは何時も反対ばかりしているからでした。お母さんは、「川に埋めて」と言い残して死にました。

お母さんが死んで、初めて子供のカエルは目が覚めました。

「ごめんなさい、お母さん、ぼくが、悪かったよ」

そして本当にお母さんを川の近くに埋めてしまったのです。

すると大雨が降って、大洪水が起こって、お母さんの体が流されそうになりました。子供のカエルは「お母さんが流される」と言って、雨が降る度に泣いたのです。だから雨が降るとカエルが泣くのよ。

この話を聞かせた母親は、原爆の火に焼かれて死にました。大水でなく、大きな火に包まれて、ぼくのお母さんは、家もろとも焼けて、遺体も残さなかったのです。

「母ちゃん、カエルのお母さんは体を残したのに、あなたの遺体はどこにあるの」。私は涙を流して心から泣きました。

【家の焼け跡に、ただ呆然】(地図の①の場所)

私はトンネル工場で一夜を明かしてから、翌朝、早く、もう一度、自分の家へ行ってみました。どうなっているか、確認したかったのです。母親の生存も心配でした。

しかし、家は完全に燃え尽きてしまって、何もありませんでした。

普通、火事になると、柱や家財道具は黒こげになって残るじゃないですか。

皆さんもテレビで、火事になった場面を見たことがあるでしょう。家の部分は、黒こげになって、残るのです。しかし原爆は違います。

原爆は、爆風、高熱ですから、家も柱も家財道具も吹き飛ばしてしまって、何も残らないのです。自宅は既に燃え尽きていて、家の場所にも入れませんでした。

火も納まっています。しかし何も残っていないのです。家の建っていた場所が、余りにも狭いのは、意外でした。家が建っていた時は広かったのに、サラ地になると、案外と狭いのです。

母の遺体は、ありませんでした。無情に寂しくなりました。

【死んだと思えない母親】

朝、「かあちゃん、行って来るからね」と言ってお出かけたきり、それが別れになりました。ですから、今でも母が死んだとは、思えないのです。

人間が死ぬ時、周りに皆んなが集まって、「おじいちゃん、しっかりしてね」「おばあちゃん、しっかりしてね」と、叫びながら、死を見取るのが、普通です。死が、はっきり、わかります。

しかし、私の場合、「行って、来るけんネ」。それで、お終い。死んだとは思いませんよ。何処か、そこらへんから、私の名前を呼びながら、若い母親が、姿を現すような気持ちで、この五十年間を生きて来ました。

【家が無い、町が無い】

皆さん、今日、修学旅行へ出かける時、家の人に、「行って来ます」と、元氣よく挨拶して、バスに乗ったでしょう。

しかし旅行が終わって、家に帰ってみたら、お父さん、お母さん、家族が居なかった。いや、家がなかった。学校も、町も全滅だった、としたら、どう、思いますか。

「そんなバカなことが、あるもんか」「マジかよ」と言うかも知れない。

しかし、私の身の上には、実際に起こったのです。実際に有ったのです。

それは何故——？戦争だったからです。

戦争をしては、いけない、と言うことは、そう言うことなんです。二度と、戦争は有っては、ならないのです。

【隣りの家族は、十一人】

私の隣りの家は、山口さんといって、親戚でした。

山口さんの家は十一人家族でした。その内、十人が原爆で亡くなりました。ただ一人だけが生き残ったのです。

隣りに、『るみこ』『くみこ』『れいこ』の、三人の小さい姉妹がおりました。

『るみこ』は、幼稚園の園児ぐらい。

『くみこ』は、小学一、二年生。

『れいこ』は、小学三、四年生。皆、可愛い子供でした。

私の家は、山口さんの家を借りていたのです。

私の家と、山口さんの家の間に、畑と、庭があって、花が咲いていました。

『るみこ』は、可愛くて、よく、私に、花を持ってきてくれました。

『くみこ』は、ちよっと、お茶目な女の子でした。

『れいこ』は、お母さんのお手伝いをしたり、味噌汁を作ったり、お掃除をしたり、しっかり者の、優しい女の子でした。

私が家に戻った時、隣りの家の近くに、毛布が広げてあって、ムクムク、盛り上がり過ぎていました。毛布を開けて見ると、三人の女の子が居たのです。三人は、何処も、怪我や、火傷をしていませんでした。ああ、よかったね！

【三人の女の子を助ける】(地図の⑩の場所)

でも、原爆には、恐ろしい放射能があります。

助かったのは、その女の子たちのお父さんでしたが、そのお父さんと私は、女の子たちを、助けることにしました。お父さんと私は、三人を連れて、原爆の丘の、山手の方へ避難して、そこに野宿をしました。

三人の女の子たちは、何処も傷を受けていなかったのに、放射能のために、『るみこ』の髪の毛が抜け、齒から血が出て、高熱が出て、亡くなりました。亡くなくても、棺桶がありません。私は原爆の丘を探し回って、タンスの引出しを持ってきて、『るみこ』を入れました。

次に、『くみこ』も髪の毛が抜けて、高熱が出て、死にました。また、タンスの引出しを探しに行きました。もう『れいこ』の分も探しました。『れいこ』も死ぬとわかっていました。『くみこ』を、タンスの引出しに入れて、『るみこ』を重ねて置きました。そして、いっしょに寝ました。

やがて同じ症状が、『れいこ』にも出て、苦しんだあげく、『れいこ』も死にました。『れいこ』のタンスを、三段重ねにして置きました。そして、いっしょに寝ました。

【三人の遺体を焼いた】

三人とも死んだところで、三人の遺体を、私が一人で焼きました。

朝早くから、畳の切れ端や、本や、紙や、木切れを集めて、重ねて、その上に、遺体の入った三つのタンスの引出しを置いて、火をつけて、燃やしました。

私は今年、七十一歳になります。この年になって、人間を焼いたのは、自分一人で燃やしたのは、これが一回切りです。私は、(何で、こんな可愛い、幼い子供が、戦争で苦しんで、死ななければ、ならないのか。戦争は、もう、止めてくれ)と、心の中で叫びながら、火を燃やし続けました。

私は手に、竹のサオを持っていました。頭や、手、足などは、よく燃えて、きれいな骨になるのですが、お腹は、ジュル、ジュルと、汁が出て、中々燃えないのです。それで、竹の棒で、お腹の部分を広げて、燃やしました。

こうして、夜までかかって、やっと骨にしました。でも、骨壺がないのです。骨を、バケツに入れました。そしてお父さんといっしょに、山口家の墓に収めました。

【タンカの女子学生に再会した】

十年経って、私は、タンカを捨てて逃げた、あの女子学生に再会したのです。

私と、ちょうど、同じ年ぐらいでしたから、二十七、八歳の立派なお嬢さんになっていました。

長崎の町は、狭いですね。再会するには、ちよつと、事情が有ったのですが、会った時、『ごめんなさい』じゃア、すまないですよ。捨てて、逃げたのですから。

それでも、「助かって、よかったね」と、言いました。そして「どうして助かったのですか」と聞きました。

すると、助けられた時、材木の下から助け出された時、よく覚えていると言いました。タンカに乗せられて、足の傷が痛かったけど、嬉し涙が出てきました、と言いました。すると、「ブーン」と、飛行機が飛んできた。よく覚えていると言いました。

そうしたら、タンカを置いて、皆、逃げちゃった。よく、覚えていると言いました。その後は、もう誰も通りません。八月九日の話ですよ。

だんだんと、夜になってきました。辺りが、暗くなってきました。誰も通りません。周りの家は、ちよろ、ちよろと、燃えています。「ああ、ここで死ぬのかなア」と思うと、今までの喜びの涙が、悲しみの涙に変わりましたと言いましたよ。

そしたら、ちよろど、一人のおじいさんが、通りかかって、「ああ、可哀相に、この子は」と言つて、抱き起こして——誰も見ていないから、おじいさんは通り過ぎて行ってもいいんだよ、それを、「大丈夫？」と言つて、立たせて、「ああ、足を怪我しているね」と言つて、「さア、私の背中にかがりなさい」と、女子学生を背中に背負いました。

女子学生は、今で言えば高校二年生ぐらいだから重たいですよ。

おじいさんは、女子学生を抱えて、一生懸命に、鉄道線路まで運んで、そこに置いて、何処ともなく立ち去って行ったそうです。

そして、その日の、最後の列車で、(救援列車は四回来たのですが)、最後の列車に乗せられて、(周りの町の、病院も、学校も、怪我人で、満席です)、それで大村という町のお寺の本堂に寝せられて、半年間、原爆病で苦しみました(薬がありませんから)、それでも若い力が残っていたのか、「元気になりました」と言つて、私に足の傷を見せてくれたのです。

【平和の原点は、人間に痛みがわかる心を持つこと】

皆さん、私たちは、「平和を、平和を」と、叫びます。

しかし、皆さん、これが大事です、これを、皆さんのメモ帳に、書いて下さい。

『平和の原点は、人間の痛みがわかる心を持つこと』

原点というのは、『シン』です。

タマネギの皮を一枚、一枚、むいたら、中に、シンが有るでしょう。平和のシンは、人間の痛みが、わかる心を持つことです。

人間の痛みというのは、遠い人の痛みじゃないのだよ。

隣りの人の、痛み。君たちが、座っている、隣りの人の、痛み。

クラスの人の痛み。家族の人の痛み。近い人の痛みです。

皆さんも、おじいさんのような、やさしい人に、なって下さい。私も、なりたいです。

おじいさんのように、「ああ、この人は可哀相だな。助けて上げよう」と、友達を、助けてあげたり、友達を、励ましてあげたり、許してあげることです。これが無かったら、平和は来ませんよ。

『平和の原点は人の痛みが分かる心を持つこと』です。

私の話は、これで、お終いです。

最後まで、熱心に聞いて下さつて、どうも有り難う。

・原爆の日に  何を見たか？

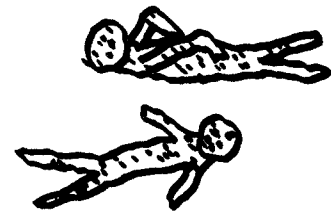
地図①



母のサ

地図⑥ ⑦

死体は
土人形



工場
内部の毛髪

地図②



女子学生助ける

タンカ置いて
逃げる

地図⑭

立ったまま
死んでいる人



まっくら
スミとなる

地図③ 家の火事



地図⑩

見ろ！

地図⑪ かがスララ

地図④

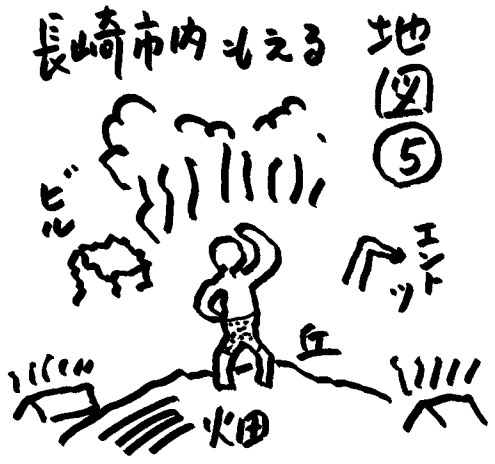


地図⑫

川で助けた



地図⑤



エッセ

煙

金持ち主人
哀れ

地図⑧



橋折れる

地図⑬

山里学校の
下

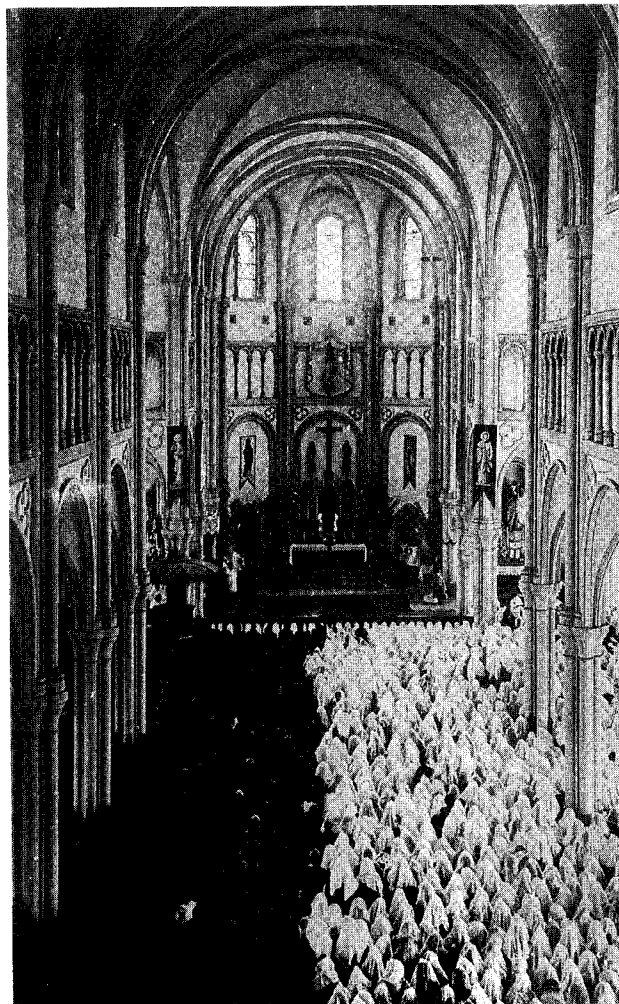


小男
加子

浦上天主堂に於いて平和の祈りを捧げていた母



長崎・原爆以前の浦上天主堂

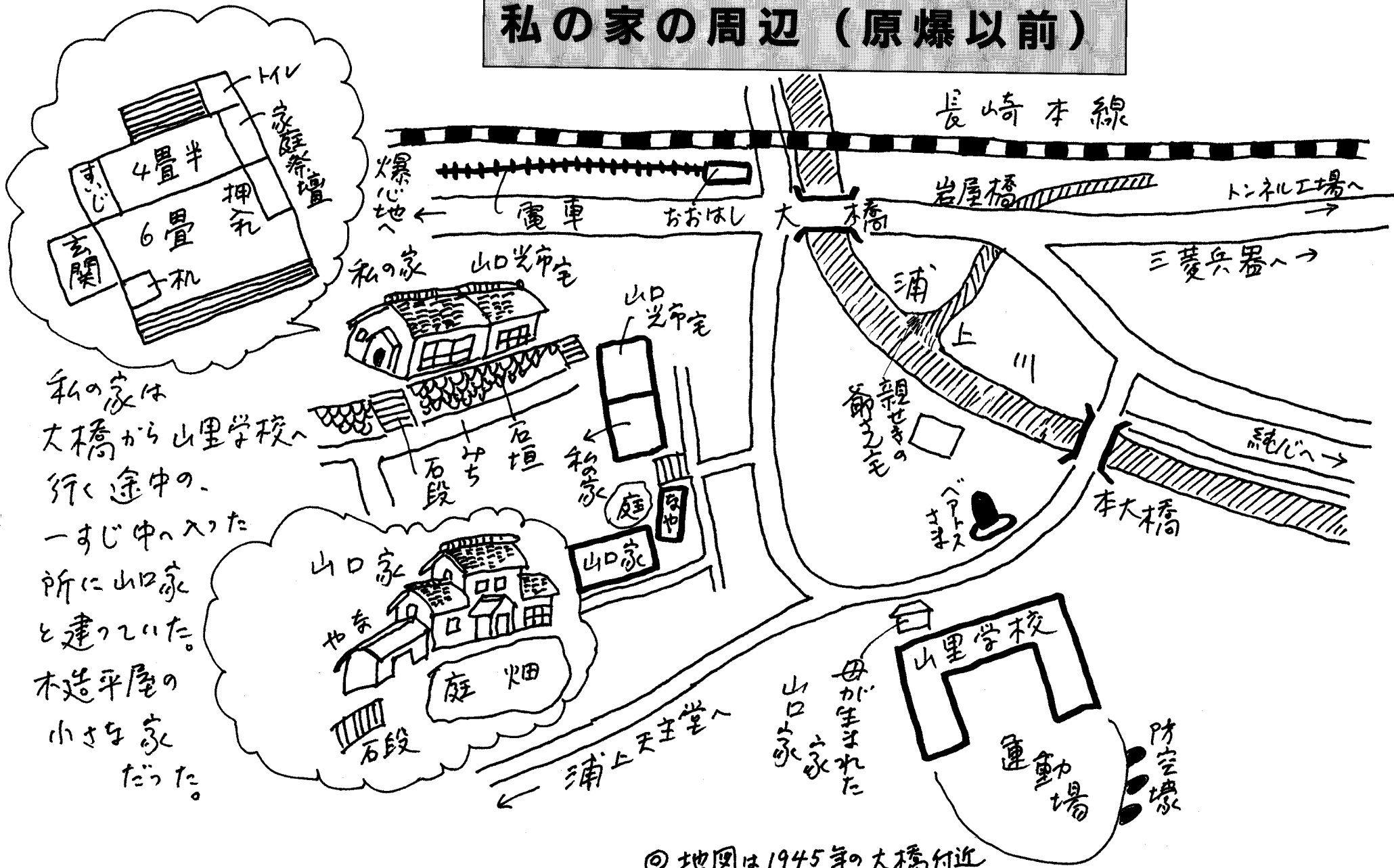


浦上天主堂の内部 日々参詣し平和を祈っていた



母、田川ワサと小学生の頃の筆者

私の家の周辺（原爆以前）



私の家は
大橋から山里学校へ
行く途中の
一すじの中に入った
所に山口家
と建っていた。
木造平屋の
小さな家
だった。

◎ 地図は1945年の大橋付近

原爆の語り部となって

核兵器の恐ろしさを伝える

【母の五十回忌に当たり原爆語り部となり、五年間で一〇一回語った】

一九九四年、平成六年の長崎・原爆の日、その日は母の五十回忌に当たっていた。この日を期して私は原爆体験の『語り部』としてデビューした。そして一九九九年八月、満五年が経って、語り部は、一〇一回に及んだ。



修道士の小崎さん
"心の旅路"に
ピリオド打ち

小崎さんは長崎の聖母の騎士修道院に入り、アウシュビッツ強制収容所で、他の収容者の身代わりになり殺されたゴルベ神父の存在を知った。ポーランドの収容所を訪ね、ゴルベ神父に助けられた方ヨビニチェックさん、ミミポーランド在住と出会い、「原爆とアウシュビッツを繰り返させない」体験を伝えていくと誓い合った。

1994年(平成6年)8月9日 火曜日

原爆の修羅場の中、すがりつく負傷者を振り切り、迫る火に泣き叫ぶ声を聞きながら逃れた四十九年前。心の痛みから修道士となった長崎市本河内町の小崎登明さんへ、心の旅路にピリオドを打ち、長崎原爆の日の九日、藤早市の小学校で初めて語り部として思いを語る。

小崎さんは爆心地から二キロ離れた長崎市北部の三菱兵器トネル工場、微用工として航空魚雷の部品製造中に被爆した。地獄図が広がる。三菱兵器大橋工場で材木の下敷きになった若い娘を救

出た。しかし、担架で線路まで運ぶ途中、飛行機の音が迫り、担架を置いて逃げた。浦上川を渡ろうとした。足を負傷した男の子が「助けて。死んでしまつと足にすがりつく。しかし、先を

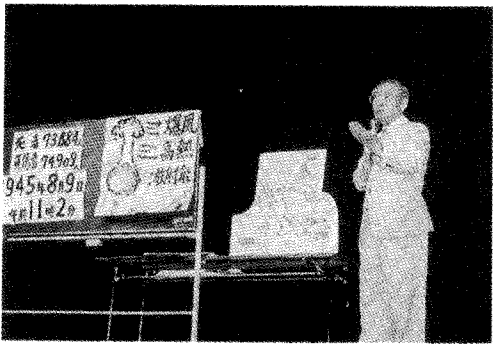
急ぐからと振り切った。大橋近くの自宅付近。女の人が崩れた家の下敷きになり泣いていた。頭だけ見えたが、助けられずじまい。たどり着いた自宅は燃え、母親の姿はなかった。

前と同じ状況に遭遇したら、助けられるかどうか分からないが、とどまらず声は掛けてあげられると思ふ。核兵器の恐ろしさを目の前に体験した者として絶えず世界に平和を求めていくのを、語り部としての思いをかみしめる。

きょう語り部デビュー

四十九年前と同じ状況に遭遇したら、助けられるかどうか分からないが、とどまらず声は掛けてあげられると思ふ。核兵器の恐ろしさを目の前に体験した者として絶えず世界に平和を求めていくのを、語り部としての思いをかみしめる。

1999年(平成11年)8月2日 月曜日



17歳当時、長崎での原爆被爆の体験を生々しく語るカトリック修道士の小崎登明さん
＝鎌倉中央公民館

小崎さんは原爆投下の日の出来事を絵にして説明。母子の二人暮らしで、自らは兵器のトネル工場内で工員勤務をしていたため助かった。自宅は爆心地から

五百メートル。工場からの掃路立ったまま真っ黒焦げになった人がいたこと、自宅近くの無数の死体が浮かぶ川で、お願い。助けてとすがる少年を助けられなかった

ことなど、生々しい内容。自宅にたどり着いたのは後四時半。爆風で自宅は崩壊。母も、母親の死体を見つめることはできなかった。隣家の三人姉妹の少女は

生き残り、一緒に爆心地から八百メートルの原野まで避難したが、姉妹は毛が抜け、体に斑点(はんでん)が出て高熱となる同じ症状で次々に死んだ。当時十七

歳の少年は一人で、三人を火葬した。小崎さんは「母ちゃんが死んだ実感がない。どこかで私の名を呼んでくれるんじゃないかと。長崎原爆資料館に保管された被災時の現物資料約百点を紹介した「戦争・原爆被災展」は「二日後五時ま

54年前の夏、生々しく

カトリック修道士長崎被爆体験語る

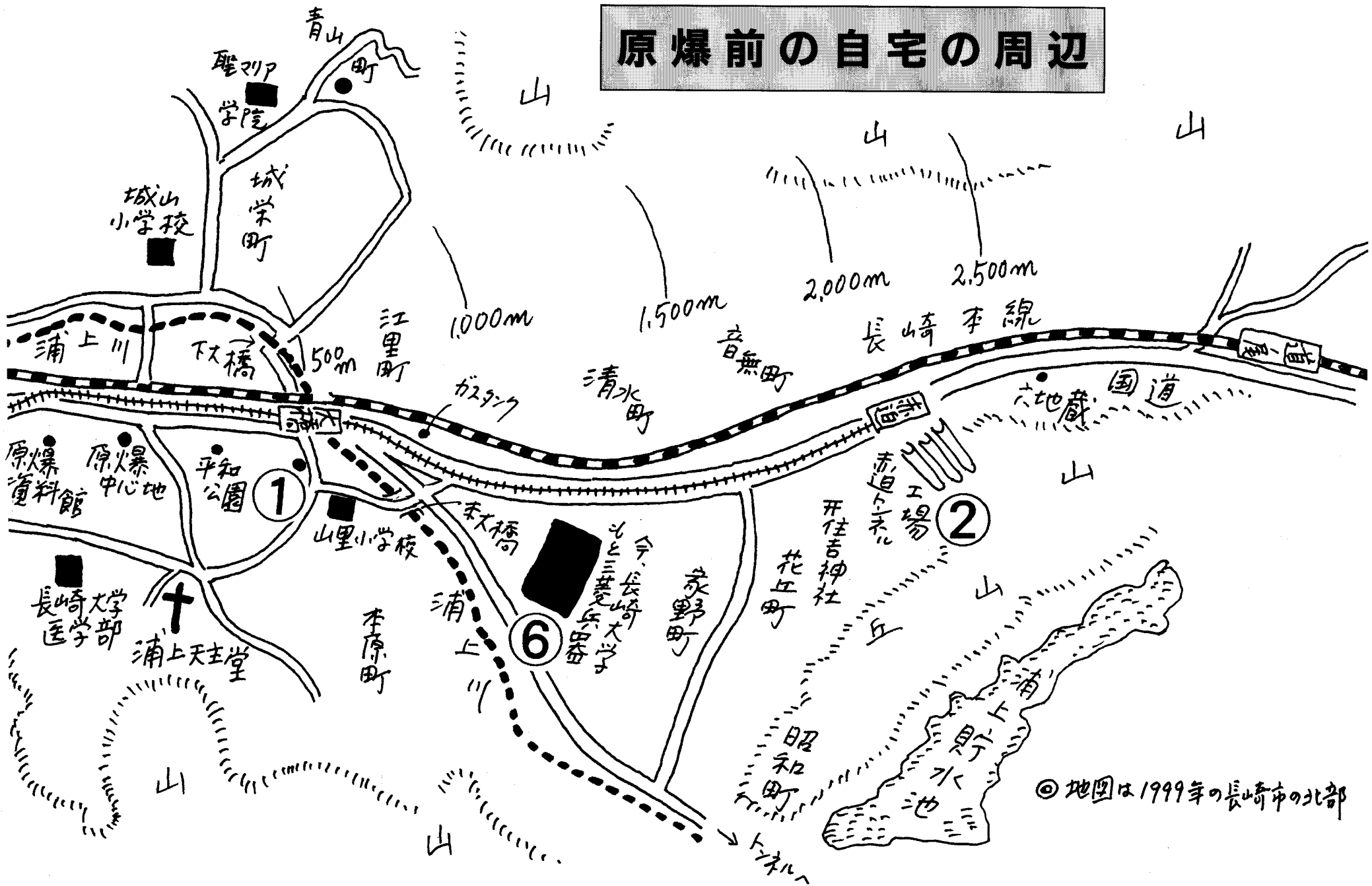
鎌倉

長崎市の全面的協力を得て、鎌倉市大船の鎌倉芸術館で開催されている「戦争・原爆被災展」の一環として、長崎被爆体験の語り部でカトリック修道士の小崎登明(おきあき・とらめい)本名・田川幸一さん(せいの)が一日、鎌倉中央公民館と同芸術館の二カ所で「原爆を見た十七歳の夏」と題する講話を行った。両会場には家族連れも多数訪れ、五十四年前の八月九日に起きた原爆の証言者の話に聞き入った。

九四年夏から被爆体験の語り部を始めた。小崎さんは「長崎原爆資料館(同市平野町)で修学旅行生に繰り返し伝えていく。それは平和の原点は人間の痛みを分ける心を持つこと、だということです」と講話を結んだ。

長崎原爆資料館に保管された被災時の現物資料約百点を紹介した「戦争・原爆被災展」は「二日後五時ま

原爆前の自宅の周辺



自宅は、岡町十二番地（地図①）

【今は、サントス通り】

戦前、戦中は、浦上方面へ走る電車の終点は、『大橋』であった。

大橋は、長崎市へ入る交通の要所で、浦上川に掛かる大きな橋である。

現在、大橋から、浦上川添いに、山里小学校へ向かって上り、永井博士の如己堂を経て、浦上天主堂へ至る道路は、『サントス通り』と呼ばれている。これは、南米ブラジルの港町、サントス市と、長崎市が姉妹都市を結んだ謂われによる。

私の家は、大橋から向かうと、山里小学校の坂へ至る道の、少し手前、右手の側、一つ、道を入った所にあった。

当時の道路は、一本道であったか、曲がった道だったか、よく覚えていない。

【親戚の家を借りていた】

大きな道から小道を中へ入ると、石垣があつて、石段があつた。

家は石段を上がると、直ぐ右側にあり、木造、平屋の小さな建物である。

隣りは、大きな家で、山口與平さんのお宅であつた。山口家は、二階建ての立派な屋敷で、納屋もあり、牛も飼っていた。屋敷の前には、庭というか、畑があつた。

私の家は、山口さんの所有で、母が借りていた。

山口與平さんと母は親戚ということ、家賃は安く、確か、月、十円だったと思う。

詳しく言えば、私の母ワサの父親は、山口静五郎で、実家は、山里小学校の直ぐ下にあつた。静五郎の弟に、福松、サノ夫妻がいた。夫妻には、女の子、山口ミツがいた。

そのミツの所に、家野町から、養子にきたのが、與平さんであつた。

だから山口家は、山口與平、ミツ夫妻の家である。

夫妻には、秀市、光市、愛子、敏、栄治、勝巳の、六人の子供がいた。

【私の家の番地】

私の家の番地は、岡町『十番地』、と覚えていたが、本籍地、長崎県外海町役場の田川家の戸籍に届けられた、母、田川ワサの死亡通知には、『岡町十二番地で死亡』と記されている。

誰が、『十二』と届けたのか、私だったのか、当時、黒崎村と呼ばれ、今は外海町になっている集落の戸主、伯父の満次郎が届けたのか、今は思い出せない。

山口與平さん方が『十番地』で、私の家は『十二番地』だったかも知れない。

現在、山口與平さん宅は、長男、秀市は死亡し、彼の妻が引き継ぎ、住所は、『岡町一〇の一四』になっている。

ちなみに、私の母は、旧姓は山口である。母が生まれた家は、山里小学校の校舎の直ぐ下で、昔、塔の尾といった。しかし、その場所に、先祖の山口家は、もう無い。

【自宅の家の構造】

私の家に入ると、狭い玄関がある。(24ページの絵を参照)

部屋は、畳の間が、二間あった。入って左側に、炊事場があり、四畳半ぐらいの小部屋に接していた。ここで食事を、母と二人で、食べた。押入れが付いており、家庭祭壇があったように思う。母はここで寝た。この部屋の脇に、トイレがあった。

右側は、六畳の間。居間でもあり、私はここに寝起きしていた。壁に小さな机を置いていた。タンスや、衣類入れなどの家具は、無かった。

母は、何時も、着物を愛用していたので、鏡台は有ったかも知れない。覚えてはいない。とにかく母と私の、二人の生活は、誠に、質素だった。

それでも原爆前に、一人の若い女性が、私の家に下宿していたことがある。田舎から出てきて、何かの学校へ通っていたように思う。名前は確か、百田か、百枝か、『百』も』が付いていた。その女性は、県内の西彼杵郡亀岳の出身だったように思う。

私が、原爆後、自転車で、食料を貰いに、亀岳に行ったのは、彼女の家を訪ねてのことだったと思う。彼女はその時、家に居たのか、覚えていないし、その後も、どのようになつたかは、全く分からない。

【原爆前の、私の病歴】

私は小学一年生の時、父を病気で失った。一人っ子の私は、母と二人で、寂しい生活を送っていた。

小学四年生になった時、日本は、中国と戦争を始めている。

中学一年に入学して間もなく、私は、腰骨のカリエスを病んで、長崎大学病院へ入院し、ギブスの治療をおこなった。母は、非常に、心配する。

入院中に、カリエスは、腰から、背骨や、肋骨まで冒し、大変な病状になった。処置として、腐れた肋骨の一部を切除したり、足のスネの骨を、割り箸ほどの長さに切り取って、背中へ植える大手術などをした。手術は、痛かった。

また結核は、私の両肺の肋膜を蝕んだ。片方の肺には、水が溜まって、その水を大きな注射器で抜くのも、これも非常に、痛かった。

昭和十六年十二月、日本が、米、英、オランダと開戦したニュースは、ベットの上で聞いた。子供でもあり、また入院中であつたから、戦争の実感は湧かなかつた。

昭和十八年になると、私に明るい春が来た。

一年半の療養の末、やっと大学病院を退院した。しばらく体を馴らすため、大学病院・耳鼻科研究室の小使いをしながら、健康を回復させた。

しかし、そのまま、そこに、長く勤務していたら、原爆死するはずだった。同じ仲間の手伝い助手や、写真部員は、原爆死している。

昭和十九年、戦争はいよいよ激しくなつた。私は、もう学校に戻ることもなく、十月頃から、家の近所の、三菱兵器製作所で、少年工員として働き始めた。

三菱兵器工場は、航空機用の魚雷を作っており、私は精密機械に配属された。だが、ここに居たら、やはり私は、原爆死していたかも知れない。

当時、日本の各都市は、アメリカ軍の爆撃機による空襲を受け、次々に焼かれていった。長崎は時折、空襲を受けていたが、それほど被害はなかつた。

それでも工場側では、敵機の空襲に備えて、機械類を守るために、市内から離れた、山の手、赤迫の山に、トンネルを掘って、工場の一部を移すことになった。

幸い、精密機械の部門は、そのトンネルへ移転したのである。それで私は、助かった。

十七歳の私は、毎日、赤迫トンネル兵器工場へ通勤していた。月給は、八十円から、多い月は、百円貰っていた。

【昭和二十年八月九日の朝】

当時、母は家に居て、着物や単服の仕立物をしていた。

幸い私は、その週は、昼間の勤めだった。これが運命の別れ道となる。その日は、木曜日であったが、もし、週が代わっていて、夜勤だったら、自宅に寝ていたであろう。そうになると、母と共に、原爆死したのは、確かである。

朝、いつものように、母と食事を共にしたが、それが最後の食事となった。

戦争末期だから、恵まれた食材はなかった。僅かな配給の玄米を、一升瓶に入れて、棒で突いて、白米にしていた母の姿を、今も思い出す。大豆カスに混ぜて、主食にした。

母の姉が、家野町の農家だったので、野菜は分けて貰っていたようだ。食生活は、そんなに不便はしていなかったように思う。

その日、まさか、これで別れとなるうとは思わず、普段通りに出かけた。

三菱長崎兵器製作所（地図の⑥）

【資料によると——古い歴史を持つ民間の魚雷工場】

三菱長崎兵器製作所は、大正六年（一九一七年）三月、長崎市茂里町において、わが国唯一の民間（三菱）の魚雷工場として、作業の一部を開始した。

茂里町に、生産工場を置き、大村湾堂崎に、発射場を設置した。

大正七年（一九一八年）四月、兵器工場は、一応完成する。

工場の規模は、土地、九、五一八坪。建物、二、一〇六坪。機械設備、一三九台。

同年四月十七日、製作魚雷第一号の発射試験をおこなっている。

この三菱兵器工場は、帝国海軍に属していたので、その後は、海軍の指導と要望に基づいて、順次、工場を整備しながら、工場及び付帯設備の充実を図っていった。

大正十一年（一九二二年）、工場の規模は、土地、一一、一三三坪。建物、五、六二九坪。機械設備、五〇〇台となった。

大正十年～十一年（一九二一年～二二年）は、ワシントン軍縮会議が開かれ、日本海軍には、縮小の比率が決められた。

昭和五年（一九三〇年）、ロンドン海軍軍縮会議が開かれる。

こうして列国の、日本に対する圧力と、技術的にも、魚雷形式の転換時期などが重なって、しばらく不況が続いている。しかし昭和十年代に入ると、俄然、活気を取り戻した。

昭和十四年（一九三九年）、魚雷の形式が確定し、次第に、量産が多くなった。

中国との戦線は拡大し、にわかに、アジア・太平洋の戦雲は高まり、軍需工場の拡張が

望まれた。しかし、これまでの茂里町工場は、土地、一二、九〇〇坪に対して、建物、七、〇七八坪となり、すでに地域的に、拡張の限界に達していた。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、太平洋戦争が始まる。

【浦上に、大橋工場が出来る】

昭和十七年（一九四二年）四月、兵器工場を拡大するために、長崎市大橋町に、約六〇、〇〇〇坪の土地を買収し、一六、一〇六坪の、新しい工場を建設した。

昭和十九年（一九四四年）、茂里町と、大橋町の兵器工場を合わせての全規模は、土地、七五、四〇〇坪。建物、四一、七九四坪。機械設備、三、四三五台となった。

しかし、戦局は、益々激化し、ひんばんな本土空襲に備えるため、工場の機械及び資材類の安全を守るために、疎開を開始した。

昭和二十年（一九四五年）五月までに、近くのトンネルや、学校など、約二十箇所に、兵器工場は分散した。

（以上、『長崎県教職員組合編、ながさきの平和教育Ⅱ』より）

【八割の魚雷を生産した】

三菱長崎兵器製作所による生産の実態は、次の通りである。

九一式魚雷の当初からの製作総数は実に、七、三四三個の多きに達している。真珠湾攻撃や、マレー沖海戦などで、驚異的な戦果をおさめた。

一方、潜水艦用、九五式魚雷は、製作納入総数は、二、六九九個に及んだ。

今次大戦に於ける使用魚雷の八割は、三菱長崎兵器製作所の社製であった。

（以上、『三菱重工業株式会社史（一九五六年）』より）

【従業員は、一万七千人を数えた】

原爆当時、茂里町工場、大橋町工場など三菱長崎兵器製作所全体の従業員数は、女子挺身隊、学徒報国隊を含め、一万七、七九三人であった。

そのうち原爆による死亡者は、二、二七三人。負傷者は、五、六七九人である。

（以上、長崎大学文教キャンパスの正門、脇のパネルによる）（パネルは、旧・三菱長崎兵器製作所があった場所に、長崎市が一九九一年十月に設置した）

私の記憶による兵器大橋工場

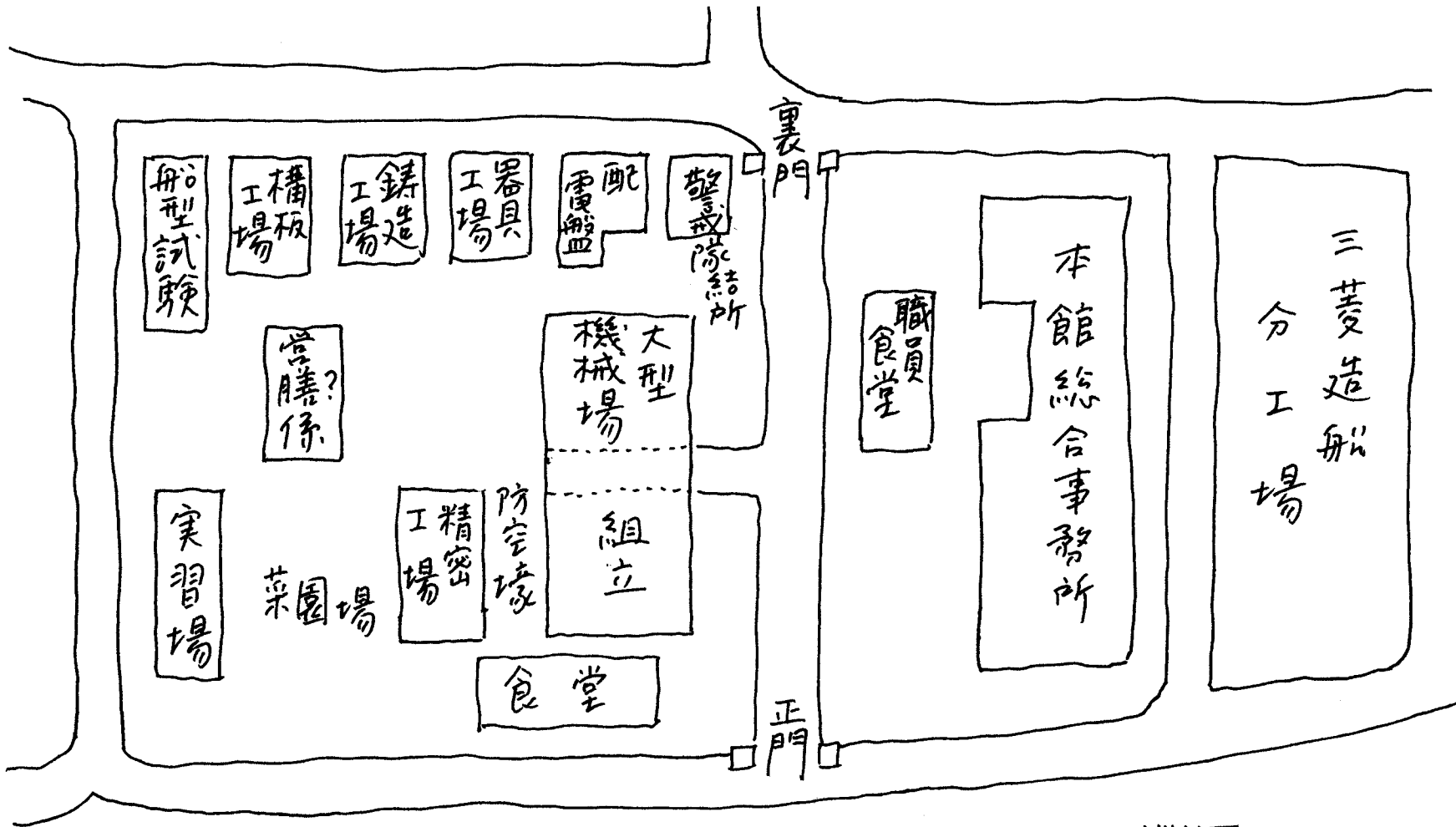
【通勤路】

岡町の自宅から工場まで、何処の道を通って行ったのか。今、記憶にあるのは、浦上川添いの道を通ったことは、覚えている。

多分、大橋へ出た場合もあっただろう。

正門は、国道側にあった。正門の近くに、精密工場はあった。だから大橋へ出る方が多かったかも知れない。

三菱兵器大橋工場の図 (勤務工員が描いた図を写した)



← 赤迫方面へ 現在の電車 大橋・松山方面へ

【精密工場】

工場内で、何処の辺りに精密機械部門があったのか、今は覚えていない。ただ、明るい室内に、小型（四尺旋盤）機械が並んでいたのは、薄く記憶がある。

【食堂】

食事の風景は、よく覚えている。工員たちが食券を手に、揃って食堂に詰めかけた。工員たちは、食べるのを楽しみにしていた。

主食に何を食べていたか、覚えていないが、おかずは、何時も、黒ずんだ野菜の煮物が毎回、出ていたのを、はっきり記憶している。あの、おかずは何んだったのか、今、試食してみたいと思う。

【B 29の銀翼】

アメリカ軍の爆撃機 B 29 が、空高く、編隊組んで銀翼連ねて、工場の上空を通過して行った。何処へ行くのか分からない。

工員たちは屋外に出て、ただ呆然と銀翼を見上げた。

【機械部門、仕上げ部門】

機械部門では、大きくて、横長の黒い機械が、円筒形の魚雷の胴体をバイトで削っていた。その作業を時々見に行った。大きな機械を、工員が一人で可動させていた。

また仕上げ部門では、ヤスリで磨いていた。そこには簡単な機械があった。それらを見るにつけ、自分は精密機械だ、という誇りを持っていた。

私は何故、精密に入ったのか、おそらく『気がきく少年』と、上長から思われたからではないか。

【ルーズベルト死す】

敵、アメリカの大統領のルーズベルトが突然、死んだ。

「ザマー、見ろ。天罰だ。バンザイ」と、工員たちが歓声を挙げたのを覚えている。

（ルーズベルトは、昭和二十年四月十二日に死亡している。その頃まで、まだ大橋工場に通っていたのだろうか）

【竹やり訓練】

「本土決戦が近づいた」と、竹やりを作り、人を刺す訓練をおこなった。

（これで敵の武装兵が殺せるのか？少年だった私には、真剣に疑問は湧かなかった）

【昼夜二交代】

作業は、昼間と、夜勤と、二交代だった。同じ機械を二人で使った。四尺旋盤の前に立って、小さな部品をバイトで削ったり、ネジを切ったり、さほど重労働ではなかった。

【道具が紛失する】

管理・所有する道具で、最も大切なのは『マイクロ・メーター』であった。百分の一まで計る、手のヒラに乗るほどの大きさの器具である。これが時々盗まれた。

盗まれると、補給がきかない。盗み返すのが習慣だった。尚かつ、盗まれないように気をつけた。

【赤マーク、青マーク】

襟に付けるマークに、二種類あった。三菱のマークが赤いのは、職員で、技師、技手、工師などで、青のマークは一般工員、伍長、組長、工長も入る。私はもちろん青マークだった。工場に働く者は、赤マークに憧れていた。

あかさこ
赤迫トンネル兵器工場（地図の②）

【私は最近、トンネルの調査と、テレビの取材で、四回、訪ねた】

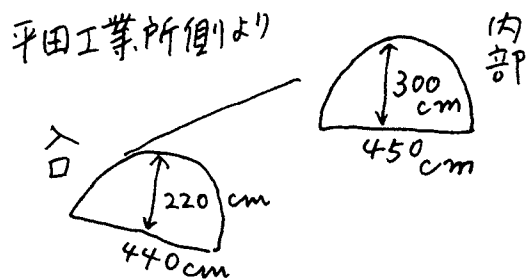
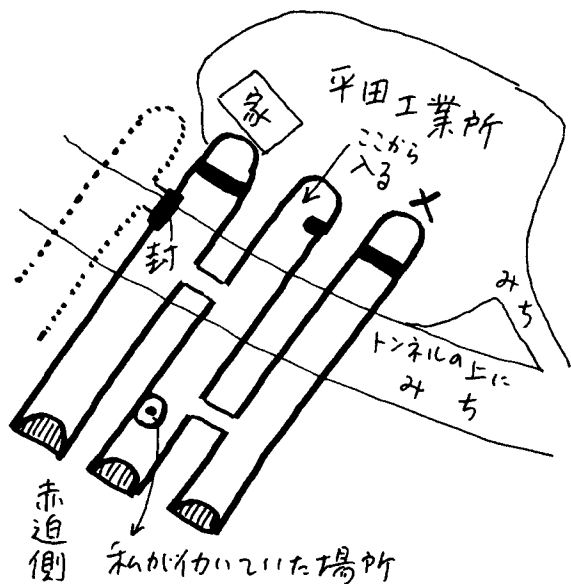
▼一回目、一九九四年九月五日。私と、竹下芙美さん（『市民運動ネットワーク長崎』のメンバー）、松尾芙美さんと三人で調査のために、平田工業所側より許可を得て入る。

トンネルに入って驚いたのは、穴の高さ、横幅の狭いことであった。こんな所で、隠れたように、しかも爆弾を作るために日夜、働いていたのかと思うと、五十年経った今では、全く不思議な気持ちが出た。

トンネルの入口は、高さ、二二〇センチメートル、横、四四〇センチメートル。内部に入ると、高さ、三〇〇センチメートル、横、四五〇センチメートルになる。

トンネルは三本あって、一箇所、お互いに、つながっていた。しかし、三本のうち二本は、平田工業所寄り、仕切られており、通行不可能の状態になっている。

私が働いていた場所は、二本目の、赤迫寄りの、入口に近い所であった。私は、精密機械の『森 清』組に属していた。



- ▼二回目、一九九四年九月二十八日。テレビNBC、関口達夫記者と、平田工業所側より、取材のために入る。私が、トンネルの中で証言する。夕方のニュースで放送された。
- ▼三回目、一九九四年十月二十一日。テレビKTN、徳川晃尚記者と、平田工業所側より、取材のために入る。私が、トンネルの中で証言する。夕方のニュースで放送された。
- ▼四回目、一九九七年八月十一日。テレビKTNが、私を主題にした一時間番組を製作のため、東島尚志記者と、赤迫電停前にある動物病院の許可を得て、赤迫側より入る。この時の取材は、一九九八年五月、テレビKTNの一時間番組『生かされて——ある修道士の半生』の中で放送された。

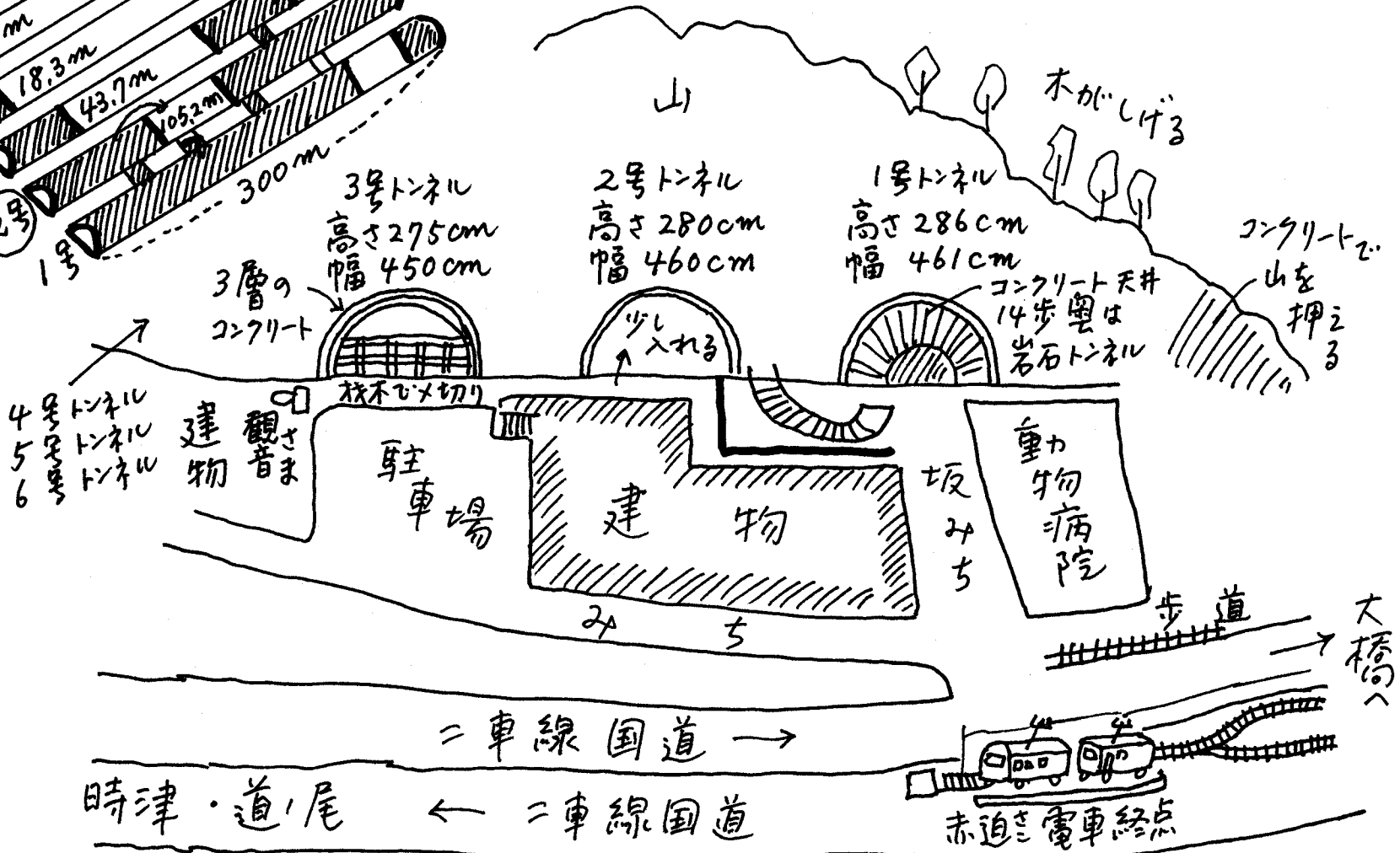
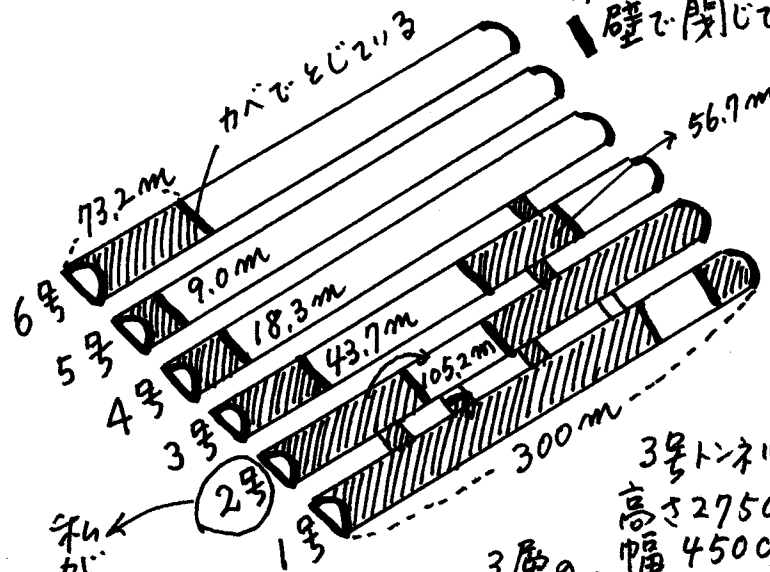
入った際に、感じたことは、もう入居出来る状態ではない。天井の土砂が落下し、床に山のように積もっている。危険な状態で、動物病院の医師も、入居禁止だと告げた。

旧・三菱トンネル兵器工場跡

(長崎市 赤迫 1999年8月現在)

|||||の中は入れるが(現在は入れない)
壁で閉じているので
白い部分は不明

1号2号3号は完通していたが
4号5号6号は6の部分まで通じていたが不明



あかさこ
赤迫トンネル工場の元・工員の証言

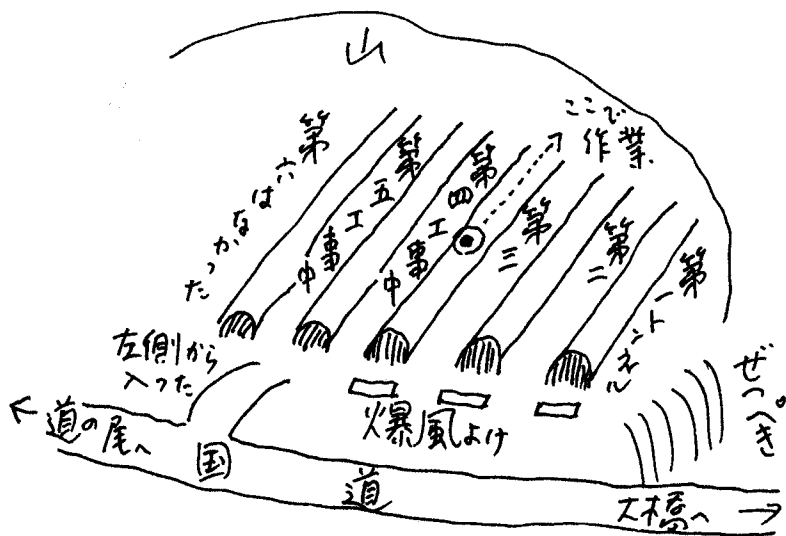
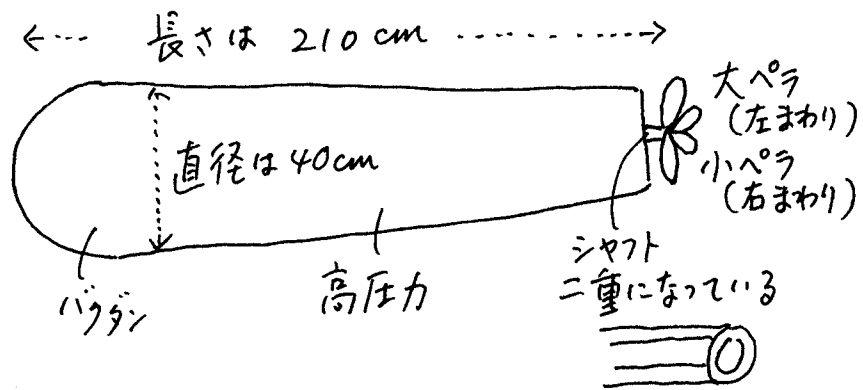
一九九八年十二月六日、井手美咲（みさき 男性）さんが、私を訪ねてきた。一九二三年・大正二年八月九日（原爆の日の生まれ）、八十五歳になるという。

当時の家は、家野町一〇の一八（現在も同じ）。兵隊に入ったが、体が悪く除隊した。昭和十七年一月頃から、大橋工場で、組立第二工場、森一次郎組長のもとで働いた。日給、一円二十銭。トンネルに代わった年月は覚えていない。

トンネル工場で被爆した。三十二歳であった。第三トンネルの中央部に仕事場があつて、自分は組には属していないで、単独で、機械の修繕を担当していた。自分が一人で、師範の学徒生が、五、六人、加勢をしていた。

「バーン！」という音がして、爆風が来て、電気が消えた。困ったな。水が、スタ、スタと、落ちる。岩肌、そのまま。ある所は天井にトタンを張っていた。それが落ちた。おかしいな。暗闇に、油に火をつけて、明かりを灯した。一時すると、怪我人が入ってきた。男の人が火傷をしている。「何したとか?」「爆弾が落ちた」「何処へ?」「何処か、わからん」。兵器工場の者が、ゾロ、ゾロ、入って来た。顔見知りの者も居た。「何処に爆弾が落ちたのか?」「わからん」。トンネル工場は、海軍の管轄だった。兵隊は鉄兜を被って、鉄砲を持って、タマを腰に巻いていた。畑を通して、家に帰った。家は燃えてはいなかったが、浮き上がって、押された恰好になって、瓦は飛んでいた。

井手美咲氏の証言で描いた図



沖縄で、現物の、魚雷を、見た

【戦跡国定公園に保存されていた】

一九九九年一月六日。私は初めて、沖縄の糸満市にある沖縄戦跡国定公園の『平和祈念公園』を訪ねた。

沖縄戦争で亡くなった人たちの、慰霊の碑が、黒く、折り重なるように並んで、広く、建っている場所である。私は、黙々として、歩いた。

左手、高台に、建設中の、大きな建物が工事されている。新しい戦争の資料館が出来るとの説明であった。

現在の戦争資料館の古びた建物に入ろうとした時、一瞬、私の目はある物体に止まった。それは、雨風にさらされて、赤くサビ付いた、細長い、二本の遺品である。

おそらく多くの人たちは、見過ごして、通り、館内へ入るだろう。

しかし、この遺品を見た瞬間、私は、背中に、熱い、閃光が走るのを覚えた。

まさしく、これこそ、私が少年の頃に、長崎の、あのトンネル兵器工場で作っていた『魚雷』ではないか。五十数年ぶりの、出会いである。

沖縄の地で、魚雷は痛ましい程に、野ざらしになって、置き去りにされている。哀れであった。

資料館正面の、横の魚雷は、長めである。ソーセージのような形をしている。『旧日本軍酸素魚雷』と大きく記されている。「総重量は、一、七二〇キログラム。全長、七・一五メートル」と表示されている。潜水艦用の魚雷であろう。胴周りは、一・九五メートルであった。

先端は、真っ直ぐ、切られていて、内部が、丸く、盛り上がっている。先端に、胴の周りに、小さな刻みが、付いていた。胴体は、一様に、同じ太さだが、後方の部分になると、細くなり、安定を計るのか、板状の鉄板が四枚、出していた。スクリューの部分は、二重になっている。細くなる手前の部分に、何の装置か知らないが、四角い刻みがある。

資料館の裏手に回ると、そこには、小さめの魚雷が、二本、並んで、展示されていた。こちらの方も、野ざらしである。

小さめの方は、サビは付いていないが、朱色に塗られていた。魚雷は黒い色とばかり思っていたので、色に不思議な感じがした。

こちらの方は、航空機用であろう。特攻機に積んだ魚雷ではないか。

先端は、やはり、ストーンと切れていて、中は、丸みを帯びて、出していた。全長、四・〇メートル。胴周りは、一・四三メートル。後部には、安定させるのか、小さな鉄状の板が出ている。スクリューは、やはり二本、付いていた。

私が作っていたのは、この種の魚雷であったろう。懐かしい思いがした。

実物と五十数年ぶりに対面して、感無量なものがあつた。

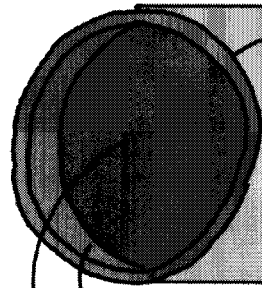
魚雷は、大も、小も、野ざらしなので、おそらく、あのままでは、長くは保存出来ないであろう。何とか、成らないものか、残念な思いにかられた。

沖縄の戦争資料館の
度王にある

航空機用魚雷か？

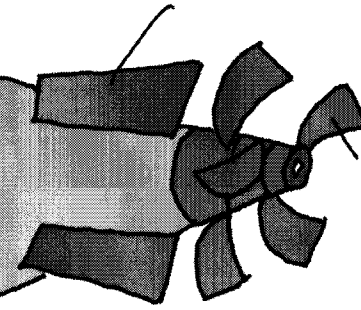
小さな鉄の板

2本
残る



ストーン切れている

朱色



スクリューは
2重に
なっている

10cmほど中に入っている

ふくらんでいる

全長 4.0m 胴まわり 1.43m

丸く出ている
おすべ

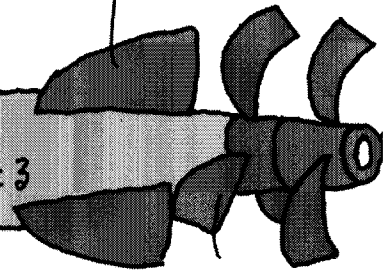
旧日本軍酸素魚雷 (2本展示)

板状の鉄

小さな
きざみがある

同じ太さ
サビいっぱい

細くなる



スクリューは
2重に
なっている

全長 7.15m 胴まわり 1.95m 総重量 1.720kg

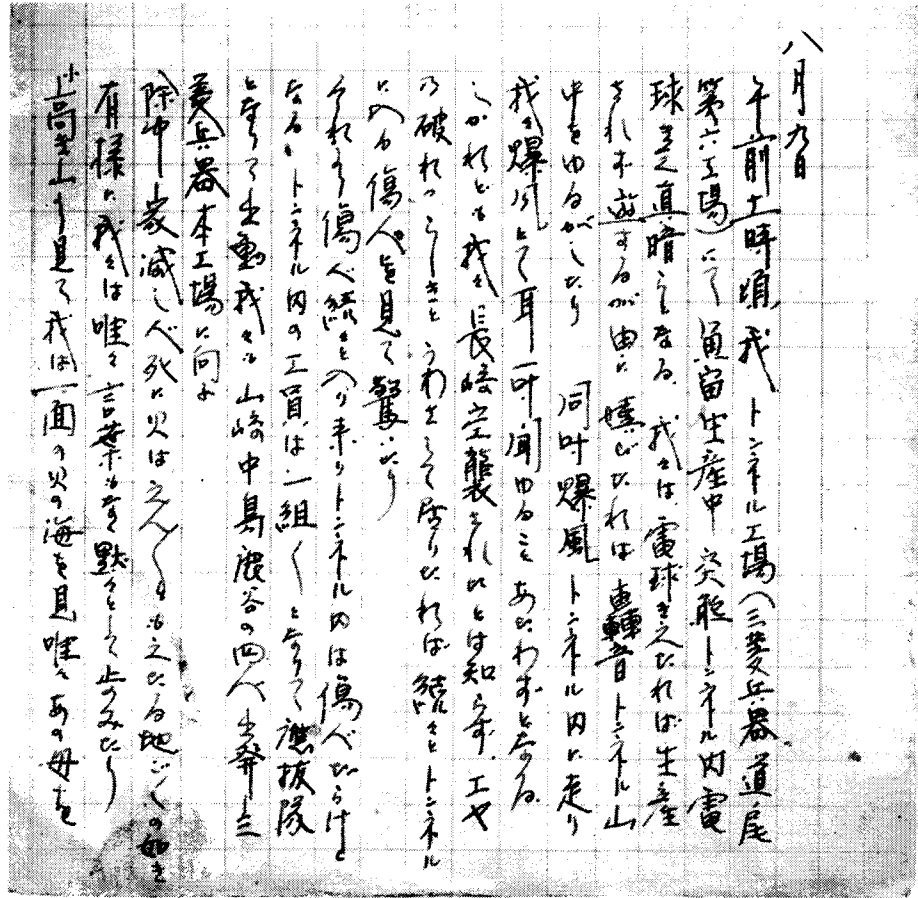
一九四五年（昭和二十年）八月の日誌

当時、十七歳の私は、原爆・被爆の日から、その年の十月八日まで、小さな手帳に、日誌を書いた。

次は、手帳の原寸で、全文、39ページとなっている。

しかし、原爆の日と、原爆の丘で生活した部分は、20ページで、後の19ページは、父親の故郷で、休養した記録である。

この手帳は、私の書き物の中で、最も古い、少年時代の思い出綴りとなった。



八月九日

午前十一時頃、我、トンネル工場（三菱兵器、道ノ尾第六工場）にて、魚雷生産中、突
然、トンネル内、電球きえ、真暗となる。

我々は、電球きえたれば、生産されず、遊するが由に嬉びたれば、轟音、トンネル山中

をゆるがしたり。同時、爆風、トンネル内に走り、我々、爆風にて、耳一時間こゆること、あたわずとなる。

しかれども我々、長崎空襲されたとは知らず、エヤの破れつらしきと、うわさして居りたれば、続々とトンネルに入る傷人を見て驚いたり。

それより傷人、続々と入り来り、トンネル内は傷人だらけとなる。

トンネル内の工員は一組、一組となりて、應援隊となりて、出勤。我々も山崎、中島、鹿谷の四人、出発し、三菱兵器本工場に向ふ。

途中、家滅し、人死に、火はえんえんともえたる地ごくの如き有様に、我々は唯々言葉もなく、黙々として歩みたり。

小高き山より見て、我は一面の火の海を見、唯々あの母をあんじる。

我々四人、本工場に突入、全滅して居る工場内にて、人間の、したじきになって居る人をそうさし、一人、女の者を見つけ、一時間にわたり、ほじくり助け出し、たんかに乗せて、汽車にて病院にはこぶ為、線路までつれ出す。

しかし途中にて、又敵機来襲、急いで、たんかを線路にねせて、山中に待避す。山中にも、傷人のうべき声高く、低く聞え、全くものすごき様なり。

待避する事、一時間餘、山中う（し？）下りて、意を決し、我が家に向ふ。

途中、傷人を見らば母をあんじ、死人を見らば唯母をあんじる。

橋に至りしが、橋切断されて居り、我は川をこえ、死人を横に見、傷人の叫びを聞き、小高き山にのぼり、家を見る。

ああ、何とかなしきことぞ。

我が家、全くなし。唯、えんえんと火の海なり。もえてゐるなり。

まなこを轉ずれば、見はたすかぎり火の海、煙の山で、全く身の毛の立つをおぼゆ。

我は唯、我が家の母を思ひうかべ、付近、さがせしど、その傷人も死人も見つけ出すこと出来ず、火の海につつまれるを恐れ、早や、もう心に決して、母の死を決し、これに折り、大橋へと出る。

けぶたか煙は身をつゝみ、全く戦の様を見る。

やうやうにして大橋に至り、そこで山崎、岡崎さんに會い、一たん線路づたいにトンネル工場にもどる。

傷人、その間、多くなり、頭部をやけどせる者、背中けがせるもの、つえつく者、いろいろにして、全く見るに見られぬ様である。

その間を、我が母を思ひつつ進む。途中、工場の女工に會ふ。彼（女か？）ら、家のないこと、つげると、悲しなき涙ながしぬ。

トンネルに入りしかば、松尾伍長、一寸来てくれといふので、洋服、作業服、身にもち、行き、同組の敵刈の者、平子をたんかにのせて、線路まで出す。

出すと同時に飛行機、来襲し、木のかげに待避す。所が、組長、伍長、急いでトンネルにげゆきたり。我々、かく様を見て笑ひ、その責任のないことを腹たちたり。その時、時にして午後六時頃なり。

しかしそこは汽車のとまらず、我々五名、心を決して、道ノ尾驛迄、平子をはこんできたり。そして平子を汽車で、佐世保方面へ送る。

我は道で會ひし大町なる中学生と、トンネルに引かへし、トンネルに入る。

五名の中、三名、平子について汽車に乗車せしが、行先不明だそうなるが故に下車して、トンネルに来る。

九日の夜、トンネル工場、道具室にて、四、五人、かたまりて寝る。夜中、我は母の夢を見る。

我はもう母の死を感じて、唯々さびしき心となりてゆく。

時、昭和二十年八月九日、午前十一時五分前。偉大なる我が母、長崎空襲にて戦災死す。

翌朝十日

工場のすべてに別れをつけ、一たん家にゆく。

ああ、昨朝迄、何ごとなかりしあの家、今見るかげも、全くなし。母はをらず、死体もわからず、不安にくれたが、隣家の山口秀市兄が我をよび、一所になる。

我は、山口家、秀市兄、與平伯父さん、榮治、勝美、久美子、ルミ子、以上七人、一先ず山口家、親類の池田ヒデ方に避難する。

彼女の方は、城山の山中にて、空襲には好い所と思へしかど、家もたほれ、人も傷して居れば、山の中とて町同様にして、唯、山の中といふにすぎず。

それより山口秀市の傷を看護して後、元家の所に居る榮治、勝美をつれにゆく。

所が、戦災の為、すてられてありし自轉車をひろい、それに日用品をつんで、城山、山中へかへる。

その間、榮治、傷の為、くたばり、一度、道ばたに休せしめて、勝美をつれゆき、又二度、つれにくる。

そして七人全部、城山、山中に安着。休養をとる。己は何もかも一人でやるものであるから、くたくたとなる。夕方、疊をとりよせ、小さき小屋を造る。

いそがしき一日も西に日はかたむき、早や夜となり、早めに祈りをして、寝につく。

明けて十一日

我は、森内音吉方を訪し、にぎりめしもらひ、城山、山中にかへる。

十二日 日曜日

家野町、久保ワカ、伯母方、訪し、かへる。久保伯母、足、傷し、以下、芳子、頭部、傷。智美子、少しの傷で、一家、よかりしが、ミサ子、全身傷の為、戦災后、三日目に死せりとこの事。悲しく思う。

八月十三日

山口久美子、死す。

(我、こゝにいたりて、マリア山口久美子、六才の為に祈らん)

翌十四日

山口久美子、墓にうめ、朝十時頃より、西彼杵郡亀岳村、本田近六方に向つて、自轉車で出発。三時着し、四時半、発す。

用件は、病人、傷人の為の食料及び栄養品もらひであり、かへりは西海より、道まちが

へして、三重に出たるにより、黒崎へ進む。して、一日、宿し、翌日十五日、晝よりかへる。

我がルス中、山口ルミ子、死亡す。

(我、ここにいたりて、マリア山口ルミ子、三才の為、祈らん)

八月十五日 聖母の御祝日

勝美、生命、あやふし。今晚一夜、もてぬ様子。

勝美死す。榮治と與平さん、城山の濠にて宿す。

山中には、己と秀市兄と池田一家とねる。

(ここにいたりて、ヨゼフ勝美、十三才の為、祈らん)

八月十六日

朝より、ルミ子、埋す。途中、帰りに本田近六さんと會ふ。

山口榮治、死す。

(ここにいたりて、榮治の為に祈らん)

翌十七日

次々と死にゆくあたり、我と秀市兄二人、最後の一人、與平さんを助けねばならぬとあせり、自轉車で三菱製綱所まではこび、所より荷車で新興善國民學校の佐世保海軍病院派遣隊までつれてゆき、そこに入院させる。

大東亞戦も早や集結した。

ああ、日本よ、とうとう負けたるか。

我々、唯々、過去、思ひ、残念に考す。

八月十八日 土曜日

十五時二十分、山口與平、五十八にて死亡せり。

残念ながら、色々の看護の甲斐もなく、とうとう帰天してしまった。しかし與平さんは偉大なる死をして、しんで行つた。彼は熱心なる信者だった。毎日、ミサにもあずかり、聖体もうけてゐた。

我はこの死を見て、彼の死後は必ずよい所だと思考し、己もかく死にたいと思つた。

同日、夜は、同國民學校に宿す。

八月十九日

七人の人間も五人死に、二人となり、あきらめもつかぬも、次々の仕事で、全く我々は馬鹿となつてしまふ。

朝、國民學校、出て、秀市の嫁の父、山田方に行き、八人分の墓をほり、埋める。即ち、

マリア 山口 ミツ 五十三才

マリア チヨ 三十二才 (秀市嫁)

マリア 愛子 二十才

ミカエル 敏 十八才

マリア 冷子 八才(秀市長女)
ヨゼフ 勝巳 十三才

榮治 十四才
與平 五十八才

山口與平といふ人は、我が母と親類で、秀市兄と自分は二従兄弟にあたるそうである。埋めて、山口の畠、視さつて行く。途中、組長、森清さんと會ふ。森さんはちようどその時、病氣にて休んでゐたが、その日にかぎつてトンネル工場に來り、色々森組の整理をつけておりし為、命びろいした訳で、命にえんがあつたらしい。命にえんがないものは愛子だ。

彼女は毎日、川南に行つてゐたのに、その日にかぎつて休んで、死んでゆつてしまった。その日、何ごともなく出勤して居れば、川南はどうもなつてゐないから、助つて居りしものを……。えんのないのであつたのだらうよ。

山口家の畠にゆき、その夜は山口秀市の友人の家でねる。近頃はあつち行き、こつちで寝、全く貧者同様である。

同日、森組員、江口と會ふ。

十九日も暮れ、八月二十日(月曜日)となる。

朝から城山國民學校に配給ものとりに行くが、多くしてかへり工場を訪し、金三百円給せらる。

工場内で、山本、石井、田淵君等と會ふ。

友達と別して数十日、なつかしき時刻であつた。

晝より晝ねをして、体を休息せしめる。秀市兄は川南に愛子の整理及製綱所に與平さん、敏のせいりに行く。夕方は家野町、秀市の従兄森内音吉方にて宿す。

二十一日

朝、畠行く途中、田川吉松氏と會ふ。

城山校にて、米の配給とる。二十四Kg。淵に行く(城山の山中の事)。製綱所よりトタニヤネ、十枚餘とりゆく。淵にて宿す。

二十二日

製綱所行く。種アブラニカンとる。一カン秀兄の友人がもつてゆく。夕方、御堂の赤いシヤリキかりて、トタンヤネ二十枚餘とりゆく。日暮らしする。淵に行く。ヒデ方に宿す。車力、松山の道ばたにおいて、一夜すごす。

二十三日

朝、早めに起き、めしを食つて、松山の車力をひっぱり、一應、岡にはこび、十枚丈、土中にかくして、のこり十枚、山田小父さん方にはこぶ。車力、昨日かへさず、山田小父さんおこる。

家づくり、晝すぎ、睡眠を二時間餘りとる。秀市兄、町行、日暮してかえる。野宿す。

嗚呼、自己はかく苦しまなければならぬのか。忘れもせぬ八月九日、あの日。長崎の、

この歴史ある地に一大悲苦痛なる大戦災がおこってしまった。
時、十一時五分前。

いずことなく、とび来る敵米機は、機数、かぞえる間もなく、空襲警報解除後二時間にして、上空より、初めて出来たる新型爆弾を唯一発、爆散してしまった。

あゝ、そのい力、あゝ、その姿。見よ、見はたすかぎりの大戦災後を。家、一里四方、全く家なし。

広き世界に唯一人しかなき、この世にて一番なぐさめなる、喜びなる母の姿も今はなし。
あゝ、何んといふ化学の力ぞ。あの唯一発、浦上の人々、否、長崎の人、数万を失す。

我、唯一人、数秒にして、母なし。家財なし、着のみきのままで、隣家の者と手をにぎり、今、唯、歩みつゝあるなり。

昨夜は十五夜であった。月がほんのりと出、高くのぼってしまふ迄、家たてる道具をはこんだ。

たいていにして、かへる時、家もなく、唯二人、さびしくかへる、かりの宿。

あゝ、たんたんと、てる月をながめては母を思ひ、目にあつきものを感じるのだった。

四十六有餘、若くして、自己をそだてる為、唯その道に万足してか……もう死んで行ってしまった偉大なる母。

己が三年間の闘病の時も、ひかんせず、光となり、あたゝかき、なぐさめとなりて看護してくれたる、あの母。

今にして、小さな一家、おくにすみ、我が働いて貧しながらも母を養って行っておりし近日。孝養つくす間もなく去ってしまほうとは。

母をなくしては何んのたのしみもなく、よろこびも全くない。我は今からいかにして、くらすやら、試練の火は来る。

我、決せん、たつて、これに、あたらん。

現在、何もかも、おちつく間なし。頭、ぼつーとして、何もわからず、唯、眼にえいずるものは、見はたすかぎりの家の焼あとと、死にひんせる病人だけなり。戦災日より十数日の今日、己は全く馬鹿となれり。八月二十三日記す。

二十四日

米つきをする。二十四Kg。秀市兄、町行、カンズメ、魚等配給あり。家、半分たてる。野宿する。

我が身体、全く疲労せり。

八月二十五日

城山の山中に、カンズメ、魚をもって行き、晝から家たてる。身体、全く疲労す。我はこの焼野原の中にあつて、修道院もしくは神學校に入る希望ありて、益々はげしく思う様になる。同夜、野宿す。

八月二十六日、日曜日

神學校にて、ミサ聖祭のある。之にあずかり、母の為、又浦上神父、信者の為祈る。下駄の配給とり行く内、田川吉松兄と會ひ、即時、山口秀市と別れて、吉松兄と行動を共に

する。村川元三方に宿す。

八月二十七日、月曜日

雲、六時半起床す。

三菱造船所運輸課に行き、田川吉松兄を訪ね、三菱兵器戦災者相談所に行き、話し、社倉で、洋服上下一着、タオル、石鹸二コ、下駄はなお、ハミガキブラシを給せられて帰る。晝前後、四時間ぐらい睡眠をとる。元三小父さん、佐世保よりかえる。村川元三方にて宿す。

母、この世に生せず。嗚呼、何んと我にとりて一大悲しき事ぞ。

二人たのしく日々おくりしあの月日。一瞬にして今我唯一人となる。

あゝ、何んと不幸なのか。今迄、何つれ、かにつれ、我が自由のきゝて居りし世も、本日をもって暗黒の世となる。あゝ、我、そのすべ知らず。

月、見て、今は、母、戀し。

水、見て、今は、母、戀し。

山、木、空、すべて、あらゆるもの見ても、母、戀し。

私の行末いかにすべきか。この世に無事たる事を悲しむなり。

あゝ、我も何故一緒に他界のもの、ならなかったのか。八月二十七日記す。

二十八日

朝、長崎警察署に、母の死亡証明書もらいに行つたけど、多くしてかへる。

八月二十九日

長崎警察署にて、母の死亡証明書もらい、黒崎・金七丸にて黒崎へかへる。

八月三十日

クララ田川ワサ、四十六歳。葬式す。

八月三十一日

長崎西彼杵郡黒崎村字高尾に我が母は永遠にねむる。

ミサ聖祭、クララ、ワサの為、上る。

◎

我、唯一人、行先わからず。暗黒の世間にさまよひつゝある。光いずこそ。光はどこなるか。あゝ、なくさめるもの全くなし。

自分は今、黒崎にて、暮してゐる。山口秀市兄とも別した。彼は金銭は多く、何万円ともつてゐたであらう。

しかし己は、彼と生を共にすべきではないと思ふのである。

自己は戦災翌日より共に苦しみ、共に悲しんだ山口秀市兄を別した。

秀市兄は己と一緒に生活しようと思つたが知らんけれども、我は私の父の家がある。他人と生活するよりは、その父の家にて生活した方がいいと思つてゐるから、ずっと生を共にしようとは思つてゐなかつた。

唯、自分は母の生す時、色々と與平家庭におせはになつてゐたからこそ、かく苦しみ、あせまみれとなり、看護もし、或は女となりて御飯をたき、せんたくをし、或は男となりて大きな荷をはこび、あせまみれとなり、朝早くより夕方、月の高くなるまで働き、家はなく、野宿して手傳つたのだ。

しかし今はもう秀市の手も全快したし、秀市とその嫁の父山田さんと共にたち上ろうといつてゐて、家をたてかけたので、別れた訳である。思へば実に馬鹿の如くになつてしまひ、黒崎にかへりて母を思つてなつかしかった。

自分はこれより、いかに生しゆくか、それは不明だ。唯、天主様の摂理にまかせてゆく。

九月六日

偉大なりし母。母は偉大なるものである。

我々は母より、いかに大なる恩を受けてゐることであらうか。母の恩は海よりも広く、空よりも深く、星よりも大である。

しかし子は、その恩を感じ、早くより孝養するものは少いと思ふ。なぜなら、あんまり母の恩大なるがゆえに、さとり知る事が出来ないのだ。

自分も母の死まで、孝養といふものを心よりつくしてゐなかつた。才もいゝだけとつて居りながら、わがまゝをいったり、あまえたりして、母を一方ならぬ苦と心配の中においてゐた。

あゝ、何んと我は馬鹿であつたらうか、と今、つくづくはじむ。小さい時より母に孝をつくす可しと、耳がいたくなる程、教せられてゐるけれども、それを心につけず、母を失せしことを深くなげいてゐる。

秀吉は母に孝行を盡した。母をなぐさめた。

それが、人間、子としての道であつたのだ。

秀吉は平凡であつた。自分が愚であつたのだ。

何故、母の居る時に孝を盡さなかつたのか。

我は今考える。孝養の為なら、貧を人に見せても、愚を人に見せても、盡さぬ愚よりも、よりまされりと。

あゝ、母、この世に生せず。

木、静かならんと、ほつすれども、風、やまず。孝、つくさんと、ほつすれども、母、おらず。

全く孝養こそ、子としての道であり、りつばなる人間の道である。

子らよ。盡せよ。唯、孝養をつくして、あげよ。一もない。二もない。母のゆことを聞け。唯、聞いてやるのだ。その苦しみも悲しみも犠牲にして、唯、聞いてあげよ。

さらば、その人、必ず後にて、喜びをえんことを信じてやまないのである。

【十七歳の原爆記録、ここで終わる。原文のままである】

原爆当日、爆心地へ向かって歩いた！

一九四五年（昭和二十年）八月九日

あかさこ 赤迫トンネル魚雷工場（地図の②）

（爆心地から、二・三キロメートル。午前十一時二分）

【被爆の時間と、瞬間】

原爆が落下した時間は、現在、公式には『午前十一時二分』となっている。

しかし私が当時、自分が書いた記録には、『午前十一時頃』と記してあったり、また『午前十一時五分前』とも記載されている。

当時、私は腕時計を持っていたか。戦争中でもあり、十七歳という年齢から、時計は持っていたか、分らない。高価な品であったのは、確かであろう。はつきりとは、覚えてはいない。だから私の時間は、正確ではないだろう。

私が働いていた赤迫トンネル魚雷工場は、『三菱兵器、道ノ尾第六工場』と、私の記録に記しているから、これは、そう呼ばれていたであろう。

精密工場で、私のトンネルは第二番目だった。（34ページの絵を参照）

赤迫側から入ると、入口の近く、左側に、一列に、四尺旋盤が並んでいた。

モーターの回転と共に、調整されたチャックが回り、それに取り付けられた魚雷・安定器の部品のイモノが、同じ方向に、一定速度で回転し、正転、逆転を操って、バイトを往復させ、ネジを切る。

作業中の私は、突然、大きな音と共に、吹き飛ばされてしまった。

しばらくして目を開いて、身を起こすと、トンネル内は真っ暗闇になっていた。

私の、『原爆体験日誌』によると、被爆の瞬間、『爆風、トンネル内に走り』とある。しかし、押し倒されたとは書いていない。ただ『爆風で、一時、耳が聞こえなくなった』と記している。

だから相当に強力な爆風がトンネル内を走ったのは確かである。

あち、ここで、工員が、騒いでいる。ドラ声のみが、聞こえる。何が、あったのか。皆目わからない。結局、トンネルの増設工事に使っていたダイナマイトが爆発したのだろうとの理由に落ちついた。

皆、文句を言っている。まさに、この一瞬間に、浦上全土が、灰になりつつあるとは露知らず、暗闇の中で、私は機械の傍に座って、黙って、電気が点くのを待った。

『日誌』に、働いていた仲間の工員の名前が記されている。

『山崎』『中島』『鹿谷』そして、私。

特に、覚えているのは鹿谷だけである。彼とは、仲がよかった。鹿谷が今、どのような生活をしているか、何処に居るのか、生存しているのか、全く不明である。出来れば、ぜひ会いたいと思う。

【最初に出会った女子学生】

しばらくすると入口から、女子報国隊の学生が、私の傍へ寄ってきた。私は、小さい石油ランプを女子学生に近づける。驚いたことに、彼女の髪の毛がジリジリに燃えていた。彼女は、トンネル外部の庭に居たという。しきりに泣いた。私は、そっと抱いてやった。女子学生の様子から、近くに、爆弾が、落ちたことだけは、わかった。

【負傷者の進入と、混乱】

すると、ものの半時間も経ったであろうか、日頃から、避難の訓練を受けていた大橋工場の工員たちが、血だらけになって入ってきた。トンネル内は、重症、軽傷の人たちで、混乱状態となった。

私は機械の傍から離れて、ランプを手に、情報を聞いて回った。「兵器工場が全滅だ」「浦上全部が、燃えている」「長崎は、全滅だぞ」「なんて！バカな」

怪我人は、重症者が多い。手が吹き飛ばされた男、腹ワタが出て、半死半生の女子工員、全身血だらけの工員、まる焼けになった人を見て、振るい上がった。(こりや、たまらぬ)と私は再び、トンネル内部の闇の中へもぐり込んだ。

【海軍警戒隊員の威嚇】

闇の中に、着剣した海軍警戒隊員が巡回してきた。兵隊は、私たち少年工員を威嚇する。私たちは恐ろしくなって、仲間の少年工員、二、三人と共に、トンネル工場を出た。

原爆の日から七、八年経った頃、書いた私の記録には、「おそらく、午後一時頃であったろう」と記している。

【爆風や圧力で、トンネルは、大丈夫だったか?】

トンネル内部は、掘ったばかりの恰好で、添え木も、コンクリートもしていなかった。土や岩石が剥き出しの状態だった。

しかしトンネルは、つぶれない。土が、パラ、パラと落ちた程度であった。

住吉の国道(地図の③④)

(爆心地から、二・一キロメートル。午後一時過ぎ)

【家は燃え、車は吹き飛ばす】

初めて屋外へ出て、景色がすっかり変わっているのに、驚く。家は燃えているのに、誰も消火に努める者が居ない。まるで夢の、『へんてこな国』に来たような感じがした。

一体、人間は、何処に、居るのだ。

タクシーが、道路から、二十メートル余り、吹き飛ばされ、ひっくり返っている。運転手は丸焼けになって、畑へうずくまっている。

畑の中には、自転車もろ共、吹き飛ばされた男性が、土にまみれて、あえいでいた。

吹き飛ばされるのは、爆風、つまり衝撃波だ。

原爆の高温の火の球が炸裂すると、一瞬のうちに、周りの空気が押し出される。その風

圧が秒速のうちに、伝わってくる。二キロメートルの地点まで強烈に伝わったということだ。何秒かかったのか。その時の温度は幾らか、わからない。

【道、家、人、山は、どうだったか？】

道は土煙りが上がる。国道は、浦上方面へは進めない。家は燃えている。二キロメートルの地点でありながら、高温なため、自然発火だ。人には出会わない。その辺に死体が有ったか、覚えていない。怪我人は居た。トンネルの山の状態は、今、覚えていない。火の手のために、道路を進めない。左に折れて、小高い丘へ、駆け登った。

家野町の丘（地図の⑤）

（爆心地から、一・七キロメートル。午後一時三十分）

【丘から、市内を凝視する】

丘の周辺に、家々は無かったように思う。この辺りは、家は遠くに、ポツン、ポツンと、点在している風景だった。

家野町には、母親の姉、つまり私の伯母さんの家があった。原爆前に時々遊びに行っていた。家の上がり口に、大きな竹が繁っていた。原爆の丘にたたずむ私には、伯母さんのことが頭に浮かんだか、わからない。

結局、後で、わかったことだが、伯母さんは足に怪我をして、従姉妹たちも、怪我をしたが、命に別状はなかった。ただ幼い女の子が、爆死している。

丘から見た市内は、炎々と燃え、煙が、空を、覆っていた。火の手が、激しく上がる。見ている、身ぶるいをして、寒けがした。

【特別、印象に残っている人】

原爆を、ナマで、見た、という実感だ。すべてが、一瞬のうちに破壊された。人も、動物も、死に絶えた。怪我人も、自ら変わり果てた皮膚に、恐怖を隠せない。一体、どうなるのか。生き延びることが、出来るのか。不安はつのる。

三菱兵器大橋工場（地図の⑥⑦）

（爆心地から、一・三キロメートル。午後二時前）

【工場の被爆の状況】

何故、私たちが、大橋工場へ行こうと思ったのか。それは、前に勤めていたし、兵器工場の親工場でもあったからだ。

工場の被爆の状況は、燃えてはいなかったが、爆風で、柱の鉄骨は折れ、屋根は吹き飛び、どの建物も完全に倒壊していた。

そして、私が一番不思議に思ったことは、元気で、立って歩いている人が、居ないことだ。人影、一つ、無かった。死体のみが、散乱していた。

自分がかつて働いていた場所にも行ってみたように思う。内部は、混乱していた。もう、その頃、仲間の少年工員は、一緒でなかったように思う。

私が、どうしていいのか、迷っていた時、初めて、三、四人の男性工員から、声をかけられた。「おーい、来てくれエ」。やっと、人間にめぐり合った感じであった。

走り寄ってみると、そこに、工場の材木の下敷きになった女子学生がいた。

大橋工場で、『女の者（女子学生）を見つけ』たことは、私の『原爆体験日誌』に記している。私と、同じ年頃の、学徒報国隊女性だった。

私も、彼女を助けた。そして、タンカに乗せて運んだ。私が、『一九五五年に書いた記録』には、「私は後方の、右側の棒を握って、歩き出した」とある。鉄道線路を目指す。

工場の外に出たが、道らしい道はない。家々は倒壊して、世の中、すべてがホコリの感じであった。

脇道の傍の屋敷（地図の⑧）

（爆心地から、一・二キロメートル。午後三時まえ頃）

【家は倒壊し、人は火傷】

立派な屋敷の前を通る。常日頃、工場へ出勤の途中で、この家の前を通り、お金持ちの家を羨ましく思っていた。

ところが、その家は燃えていなかったが、完全に倒壊していた。庭の植木が、埃だらけである。その家の主人であろうか、道から石段を上がった直ぐの庭に、男性が一人、顔も肌も火傷して、白シャツは殆ど破れて、皮膚が出て、足はパンツ一枚ほどの姿で、膝を立てて座り込んで、苦悶していた。見ている、何とも可哀相だった。

二、三日して、私がある場所を通ると、膝を立てて、座り込んだままの姿で、死んでいた。誰も遺体を収容する者もなく、遺体は夏の太陽に照らされ、腐乱していた。

【女子学生を置いて逃げる】

大橋工場で、女子学生をタンカに乗せて、運んではいたが、敵機が来襲したので、タンカを置いて、線路の方へ逃げた。タンカの女子学生は、そのまま残した。

飛行機が飛んで来たのは、何時頃だったのか。私の感じでは、二時半、前後ではなかったか。正確な時間は、不明である。

敵機の来襲を恐れて、四人は逃げた。

あの女子学生は、どうなったか。女子学生と、約十年後に、再会する。出会うには、ちょっとした、経緯があった。

私が、『ある人（聖母の騎士修道院の竹山栄神父だった）』に、「大橋兵器工場で、女子学生をタンカに乗せ、運んでいたが、途中で、逃げ出した」ことを話すと、それを聞いた『ある人』が、別の家庭で、全く同様の話を聞いた。それで、『ある人』が私の所へ来て、「タンカの女子学生が見つかった」と知らせ、会うことができた。

私が、『一九五五年に書いた記録』には、「彼女は、県庁に勤めていた。私は、県庁で会い、県庁を見物させてもらった」とある。

そして彼女は、当時のことを語ってくれた。

「助けられたが、飛行機が飛んできて、タンカを置かれ、地べたに、寝せられた。夕暮れになった。辺りが、暗くなってきた。たまたま、人が通りかかって、私を背中にからって、鉄道線路まで運んでくれた。

千綿のお寺に運ばれ、後で、川棚の病院へ変わった。八月から、翌年の四月まで、九カ月、治療をした。足の傷を、手術した。

髪の毛が抜けたり、歯ぐきから血が出たりすることは、無かった」

線路を越えて(地図の⑨⑩)

(爆心地から、一・一キロメートル。午後三時過ぎ)

【今の、清水町か、三芳町か】

私は単独で、逃げる。どの辺りの線路をこえたのか、定かではない。多分、三菱兵器(今の長崎大学)の西側の線路になる。当時の風景は、全く覚えていない。

線路を越えて入った場所は、山手の、林の中であった。森ではない。家は無かった。少し北へ行くと、人家があったように思う。

林の中には、二十人か、三十人か、かなりの負傷者たちが、避難していた。泣く者、叫ぶ者、苦悶し、呻く者、丸焼けの怪我人、血が出ている者、大変な有り様で、彼らは、成す、すべが無い、といった感じであった。

ここで私は、仇なる、同じ工場の員に出会う。彼は腹部に重症を受けていた。

彼を見捨てて、防空壕で、しばらく待機する。見知らぬ男性と、見知らぬ若い女性と、私と三人、無言のままに時間が経った。飛行機の爆音が聞こえなくなるまで、濠に居た。

濠を出て、しばらく立ち止まり、爆音が聞こえないのを確認してから、濠を去った。二度と、そこには、来なかった。

飛行機が飛んでいた時間は、わからない。「被爆後、三、四時間は経っていた」と、私が、「一九五五年に書いた記録」には、記されている。

ガスタンクの付近(地図の⑪)

(爆心地から、八〇〇メートル。午後四時まえ頃)

【人の死体、馬の死体、散乱する】

ガスタンクが、空き缶を叩いたように歪み、爆発していた。

印象に残っているのは、無造作に、多くの死体が、散乱していたことだ。馬の死体もあった。ますます被害状況は、甚大になる。

私の心は、もう何も感じなかった。心のショックは、自分でも、理解しがたい、言い知れない心境だった。

火の手が、上がる浦上、全土。倒れている人の数は知れない。その中で動くは、ただ私一人のみ、私は生きた人間に会っていないような気がした。

浦上川の辺り（地図の⑫）

（爆心地から、七五〇メートル。午後四時過ぎ）

【川に死体が浮かぶ】

下駄の音を響かせて、通い慣れた橋へ近づいた。『本大橋』は、手前の部分で、爆風のたれ、折れていた。渡られない。仕方なく、川の下へ、降りる。

川の流れば、埃だらけ。川に、死体が浮かんでいるのが目に入る。被爆者たちは、高熱を受けたため、体が焼けて、ノドが乾いた。「水を下さい」「水を飲ませて」と、水を求めた。川に至り、飲んだ人たちは、殆ど皆、死んだ。

当時、長崎市の水道は、どの辺りまで来ていたのだろうか。大橋から北部は、殆ど、田舎だった。しかし、元・水道局長は、「三菱兵器製作所が出来ていたから、大橋までは水道は来ていた」と言う。私は、トンネルを出て、ここまで来る間に、水を飲んだであろうか。おそらく飲んでいないと思う。飲んだ覚えはない。

この川下で、助けを求める少年と出会う。私は彼を、助けなかった。その後、少年はどうなったか、不明である。

ベアトス様の道（地図の⑬）

（爆心地から、六〇〇メートル。午後四時二十分頃）

【家々は燃えていない】

『ベアトス様の塔』に接した狭い道は、昔の『時津街道』といわれた。この辺りを、昔は『塔の尾』といった。山里国民学校の直ぐ下で、この『時津街道』添いの家で、私の母は生まれた。

私が、ここを通った時、『ベアトス様の塔』が、立っていたか、倒れていたか、全く、気がつかなかった。後日、塔の前の、西田さんの話によると、「塔の石は強烈なエネルギーで黒く焼け、塔自体が、数センチメートルずれた」という。

この辺りの家々は、まだ燃えていなかった。

しかし倒壊していた。道は、壊れた木々で埋まって、乗り越える形で、私は歩いた。

死体が泥人形のように、転がっている。それだけを覚えている。この『泥まみれ』が、原爆死体の特徴だった。皆、土色に汚れている。

ここで、小学低学年の女の子に出会う。泣いていた。

「お母さんが、家の下敷きになった」と、女の子はいう。家は、めっちゃ、くちゃに、壊れていた。屋根が、全体を押し被せている状態だった。

私は頭をかがめて、屋根の下、奥の方を見つめた。女の子の母親らしい黒影が、家の下敷きになっていて、暗い、奥の方に、微かに、髪の毛のようなものが、私には見えた。でも私は助けなかった。助けられなかったのだ。

岡町、壊滅（地図の⑭） 自宅は全焼

（爆心地から、五〇〇メートル。午後四時三十分頃）

【家々は全部、壊滅す】

家々の、壊れた材木を越えて、視野が開けた時、一つの丘は全壊し、既に一切は終わっている気持ちがあった。当たり前前に建っている家は一軒もなく、一人の人間も居ない。

【自宅の敷地は、高温。内部に入れず】

燃えていく家を見て、呆然となる。家は、国道から、一つ入った所にあつたが、内部へは入れない。燃えているし、高温で、敷地はオキになっているので、危険だと判断した。ただ眺めるだけである。その時の気持ちの体験は、二度と無い。

母の死体は、無かった。後日、隣りの少年、山口勝巳から、母は、「確かに、その時間、自宅に居た」と、聞いた。だから居たはずだ。しかし母の遺体は見当たらなかった。

母は、何処かへ、爆風で、飛ばされたのか。

家の傍に、どれ程の時間、居たのか。あまり長くは居なかった。諦めたのか、その場所を去った。

大橋の辺り（地図の⑮）

（爆心地から、五〇〇メートル。午後五時過ぎ）

【大橋は電車の終点】

大橋で、『山崎』と、『岡崎』に会ったと、私の『原爆体験日誌』に、名前を書いている。山崎も、岡崎も、中島も、同じトンネル工場の少年工員であった。

時間は、もう夕方だ。大橋は、壊れていなかった。辺りの家々は、燃えている。原爆の中心地である『松山方面』へは、家が燃えているため、国道は歩けない状態だと思った。

電車は見ただろうか。覚えていない。汽車は見えない気がする。線路の状況は、わからない。おそらく大橋迄は、汽車は進入出来なかったであろう。

国道は、北へ、岩屋橋に通じ、そこから二つに、別れていた。現在も、同じ道である。この国道は、歩けそうになかったため、私は鉄道線路を伝わって、赤迫トンネル工場へ帰ることにした。

あかさこ 赤迫トンネル工場（地図の⑯）

（爆心地から、二・三キロメートル。午後五時三十分）

【負傷者で溢れ、真に悲惨】

私の記憶では、トンネルに帰ってからのことは、殆ど覚えていない。しかし、私の『原

爆体験日誌』に、割と詳しく、私がどのような行動を取ったか、記している。

松尾伍長の名前は記されているが、組長の名前は、この日付けには書かれていない。後で、森清組長の名前が出てくる。九日の夕方、『飛行機が来襲し、組長、伍長が、急いで、トンネルに逃げたので、笑った』とある。『時にして、六時頃』とある。

『日誌』によると、『平子』という名前の女子工員を、タンカに乗せて、線路まで運び、また、汽車が来ないとわかると、道ノ尾駅まで運んでいる。だから、トンネルへ戻っても、かなりの活躍をしている。今は、『平子』のことは、全く記憶がない。

また、『道で会いし、大町なる中学生』と名前があるので、その大町なる者は、現在も生存していないかと、「大町は、居ないか」と当たってはみたが、不明であった。

私は、八月九日の夜は、トンネルの外で、長崎の町を眺めながら過ごした記憶を持っているが、『日誌』には、『トンネル工場の道具室にて、四、五人、かたまりて、寝る』と記しているから、最後はトンネルで寝たのであろう。

その夜、「母の夢を見る」と記している。母を思っていることだろう。母親の死骸を確認は出来なかったが、あっさりとして、母親の死は認めている。この辺、あまりにも薄情ではないのか。だが、母の夢を見たことは、やはり心の中で、憂い、心配し、不安に悩んでいたからであろう。母、田川ワサは、享年、四十五歳であった。

道ノ尾駅（地図の⑱）

（爆心地から、三・四キロメートル。午後六時三十分）

【女子工員を駅まで運ぶ】

私の『原爆体験日誌』に、「平子を、道ノ尾駅迄、運んだ」とあるから、その日の夕方、道ノ尾駅迄、行ったのであろう。記憶には、無い。おそらく駅は混乱状態であっただろう。負傷者は、群れをなして居たに違いない。続々と、避難して来た者も居たであろう。汽車は、道ノ尾駅までは、来たらしい。覚えてはいない。

長崎の、夏の、夕暮れは、遅い。

翌日、八月十日

再び、自宅へ（地図の①）

（爆心地から、五〇〇メートル）

【家に戻る】

翌、八月十日、朝早く、家に行ってみた。

すっかり家は燃え尽きていた。家、屋根はもちろん、家財道具など、何も残っていない。

家の敷地を見て、こんなに狭い家だったのかと、妙な気持ちがあったのを覚えている。これ
で思い出すべて燃え尽くした。母はどうなったのか。家にいたのか。

私は、朝、朝、もう一度、家の焼け跡に立ったとき、今朝は、言い知れぬ悲しみに襲われて、
くすぶる煙のなかに只一人、さめざめと泣いた。

家に、死体の一つあったが、明らかに母の死体では無かった。飛んで来たらしい。

空腹のため肩に力が入らない。昨日の朝から、何も食べていないのだ。これから先、何
処へ行けばよいのか。どうしたら温かい食事にあるのか、少年の脳裏には名案が何
も浮かばなかった。放心状態になり、家の敷地内から、しばらく動かなかった。

隣の山口家（地図の①と同じ）

（爆心地から、五〇〇メートル）

【山口家は、十一人家族】

隣り、山口家は、私の母の親戚だった。厳密に言えば、母の父、静五郎の、弟が福松。

福松の子供が、ミツ。そのミツ（女の子）に養子に來たのが、山口與平さんだった。與平
さんの家族は、十一人。広い土地と、田畑を所有していた。

與平さんは、市内幸町、三菱製鋼所で被爆し、夕方、自宅へ戻ってきた。

長男、秀市も、父親、與平さんと、同じ工場で働き、三菱製鋼所で被爆した。彼は、組
長だった。秀市は、強靱な体力で、直ぐさま家に戻ってきた。

家は無惨にも破壊され、既に火の手は上がっている。彼は必死になって、家族を探し、
助けた。最初に助け出されたのは、意識を失っていた弟の栄治、長崎工業学校の一年だっ
た。栄治は二階の座敷に居て、爆音がしたので、何事だろうと腰を上げた瞬間に被爆した。

次に救助されたのが、顔面に酷い火傷を受けた小学六年の勝巳だった。勝巳は、一階の
縁側に居て、爆音が聞こえたので、身を乗り出して空を見上げた瞬間に、被爆した。

秀市の三人の子供、四歳と、六歳、十歳の女の子も、救助される。

しかし、秀市の、妻や、母ミツ（つまり與平さんの妻）、弟（工場の少年工員）、妹（看
護婦）など、後の四人は死体さえもわからず、家は炎に包まれて焼け落ちた。

十一人の家族のうち、四人は行方不明。八月十日の時点では、秀市を除いて、まだ六人
が生きていた。しかし結局は、その六人も死んだ。それが恐ろしい原爆病（放射能）の影
響だった。最後は、秀市だけ、たった一人が生き残った。

【六人を助ける】

一時は、助かった小学六年の勝巳は、『私の母は、山口家の縁側に、午前十時半頃まで居
て、家族と話をしている、それから家に戻った』と証言した。だから私の母は、家には必
ず居たはずだ。だが、母の遺体は、燃え尽きたのか、飛んだのか、無かった。

私が呆然していると、隣りの、秀市が、私の傍に来て、「助けてくれないか」と、頼ん
できた。家を借りて、世話になっていたので、断ることも出来ない。

秀市の、幼い女の子たちは、さめざめと泣く。

見れば秀市も、家族を失った現実に、全く力がない。あたりは全て廃墟である。「助けて

くれ」と言われれば、加勢しない訳にもいかないと、私は思った。そこで私は、山口の兄、秀市の願いを受けて、生存者たち六人の面倒をみることになった。

下大橋のほつり(地図の⑬)

(爆心地から、五〇〇メートル)

【立って死んでいる黒コゲの人を見た】

信じ難いことだが、私が『一九六一年春に書いたノート』には、はっきり記している。

「原子エネルギーの強烈さを、実際にこの目で見たのである。全く一瞬にして、すべては破壊し、そして火の海、廃墟、人間は真っ黒焦げ。私は、立って死んでいる人を見た。その男の眼球は、双方とも飛び出し、舌は出来るだけ出し、一瞬にして、炭となって死んでいた」

その遺体のあつた場所も、はっきりと覚えている。下大橋の、城山寄りだった。

人間が、立ったまま死ぬなんて、本当だろうか。本当に、自分を見たのだろうか。何か後ろに寄り掛かる物があつて、立っていたのではないか。長い間、不信に思っていた。

最近になって、広島原爆資料館を見学した時、売店で、本を見てみると、広島・原爆写真集に、お母さんが、子供を抱いたまま、立って、死んでいる絵を見た。

その遺体も、真っ黒こげ。しかも、その母親は、何と、片足で立っていたのだ。

その絵をみた時、(ああ、私が見た、立って死んでいた人は、本当だったんだな)と、確信した。

原爆の丘で、野宿(地図の⑭)

(爆心地から、一・二キロメートル)

【丘の手へ避難する】

まずは岡町の被災地を離れて、秀市の親戚という、城山の山中に逃れることにした。

ここなら、原爆の丘ではあるが、山手であるし、安全な場所といえるだろう。

私が、一九五五年八月に、週刊『カトリック新聞』に掲載した『原爆記(五)』には、次のように記している。

「私が、焼け残った食器と毛布類をまとめて、かかえ上げた。秀市は、四歳の子を背中に、右手に十歳、左に六歳の子を引いた。化け物顔の少年勝巳は、よろよると、ついて来た。

栄治は、私の持ちきれない毛布類を前にして、腰を上げなかった。真っ黒に汚れた秀市の顔が振り向くと、気合の入った低い声を栄治に浴びせかけた。『さっさと、来んか』。秀市の目が異様に光っていた」

【栄治の受難】

弟の、工業学生、栄治は、日頃、怠慢な性格があつた。兄、秀市から嫌われていた。

それで彼は、よく私の家へ泊まりにきていた。私と栄治は大の仲良しで、私の家で、夜、

寝転びながら、雑談したり、笑ったり、楽しく過ごしていた。

栄治は確かに、何処にも、怪我はしていない。

しかし彼は、実際は、原爆症に罹っていたのだ。私たちは誰もが、それを知らなかった。そのため兄、秀市も、私も、栄治に辛く当たり、「もっと働け、荷物を運べ」と迫る。

「兄さん、ぼく、運びきれないのです。立てないのです。力が、入らないのです。ね、だから、許して下さい」

その願いは、何の理由にもならなかった。秀市は私に言った。「こいつは、前から、怠けグセが、あつたんだ。横着者めが！」。誰も同情し、理解する者はいない。この爆弾が特殊な、原子爆弾であり、放射能の影響だなんて、夢にも知らなかった。

秀市と幼い娘、それに私が、道もない廃墟の丘を歩いて、城山へ向かった。その後から、小学生の勝巳がついて来た。中学生の栄治は、泣きながら歯を食いしばって、自分の虚脱感と戦いつつ、毛布を抱えて、よろよろと歩いていた。途中、幾度も倒れた。しかし誰も同情する者はいない。

私は一足先に、城山に荷物を置くと、すぐ引き返した。秀市と出会い、更に行くと、勝巳と栄治に出会った。二人とも力尽きて、地面に倒れていた。

私は自転車を拾い、荷物を積んで、やっと城山の野宿する場所に着くと、秀市は栄治を叱り飛ばした。「怠けるな。もっと働かんと、いかんぞ。お前は、何処にも、傷を受けていないじゃないか」。だが、傷がなくても、一見、助かったように見えた者でも、みんな恐るべき放射能に侵されていたのだ。

栄治は泣いて不調を訴える。本当に、栄治は辛かったのだ。苦しんでいたのだ。それを私たちは、全く理解しなかった。せめて、母親でも居たならば、少年を庇ってやることも出来たろう。今はもう、秀市の光る目しか、彼の前には無かった。

それに反して、小学生の勝巳は、顔面を激しく火傷し、悲惨な状態に腫れ上っていたので、荷物運びは免除された。

原爆は、何でも破壊する。家族も、家も、人の心までも、破壊する。原爆の恐ろしさは、爆風による破壊、熱線による火傷、それに血も、骨も侵す放射能、わけのわからぬ虚脱感、そして肉親の心を引き裂く、無情にある。

私たちは、やっとの思いで、城山の丘に落ちついた。その場所に、毛布を敷き、棒を立てて、夜露がしのげるようにした。

私は、疲れて、倒れるように、眠った。

城山の、避難の場所（地図の⑱）

（現在は、『青山町一〇・一八』の住所になっている）

【あの場所は何処だったのか？】

私が当時、記した『原爆体験日誌』の、『翌朝十日』のところに、「一先ず山口家、親類の池田ヒデ方に避難する」と、はっきり書いている。

「彼女の方は、城山の山中にて、空襲には好い所と思へしかど、家もたほれ、人も傷して居れば、山の中とて町同様にして、唯、山の中といふにすぎず」とある。

救援列車は昭円寺まで来た

【元・機関車、運転手の証言】

一九九九年八月七日付けで『毎日新聞』に掲載された、元・国鉄の機関士、光武富士男(73)さん＝長崎市音無町＝は、次のように語っている。

肥前山口駅——一九四五年八月九日、午前八時。鳥栖発(佐賀県)の長崎行、三一一列車を引き継いだ。定刻より、十五分遅れて発車する。

長与駅——午前十一時二分。上り列車の待ち合わせ中、被爆する。「駅や客車の窓ガラスが割れて、駅員が右往左往し、普通の爆弾でないと思った」

間もなく「大きな爆弾で、長崎は全滅したらしい」という情報が入る。
線路点検の結果、道の尾駅までは行けることが判明する。

国鉄長崎管理部は、三一一列車を救援列車に仕立てて、行ける所まで行かせることを決めた。車両編成は、十三両から、七両に減らし、家族の安否を気づかう人や、乗員を乗せて、午後〇時半頃、出発した。

道の尾駅——到着し、乗客を降ろし、更に進む。

線路の周辺には、裸同然の大勢の負傷者が道の尾駅を目指し歩いており、まくら木もくすぶっておる。光武さんは汽笛を鳴らしながら、人が歩くようなスピードで慎重に運転した。しかし救援列車は、長崎市清水町の昭円寺近くまで進むのが限界だった。

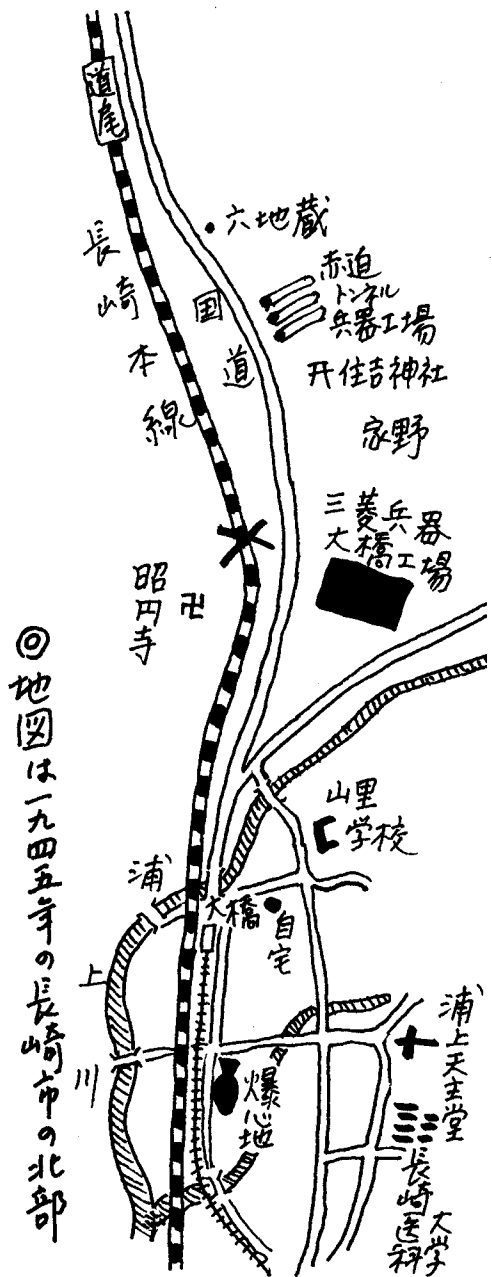
列車に集まってきた負傷者の光武さんは鮮明に覚えている。「力尽きて倒れた負傷者を踏み台に他の負傷者が列車に上ってきたり……。まるで生き地獄でした」

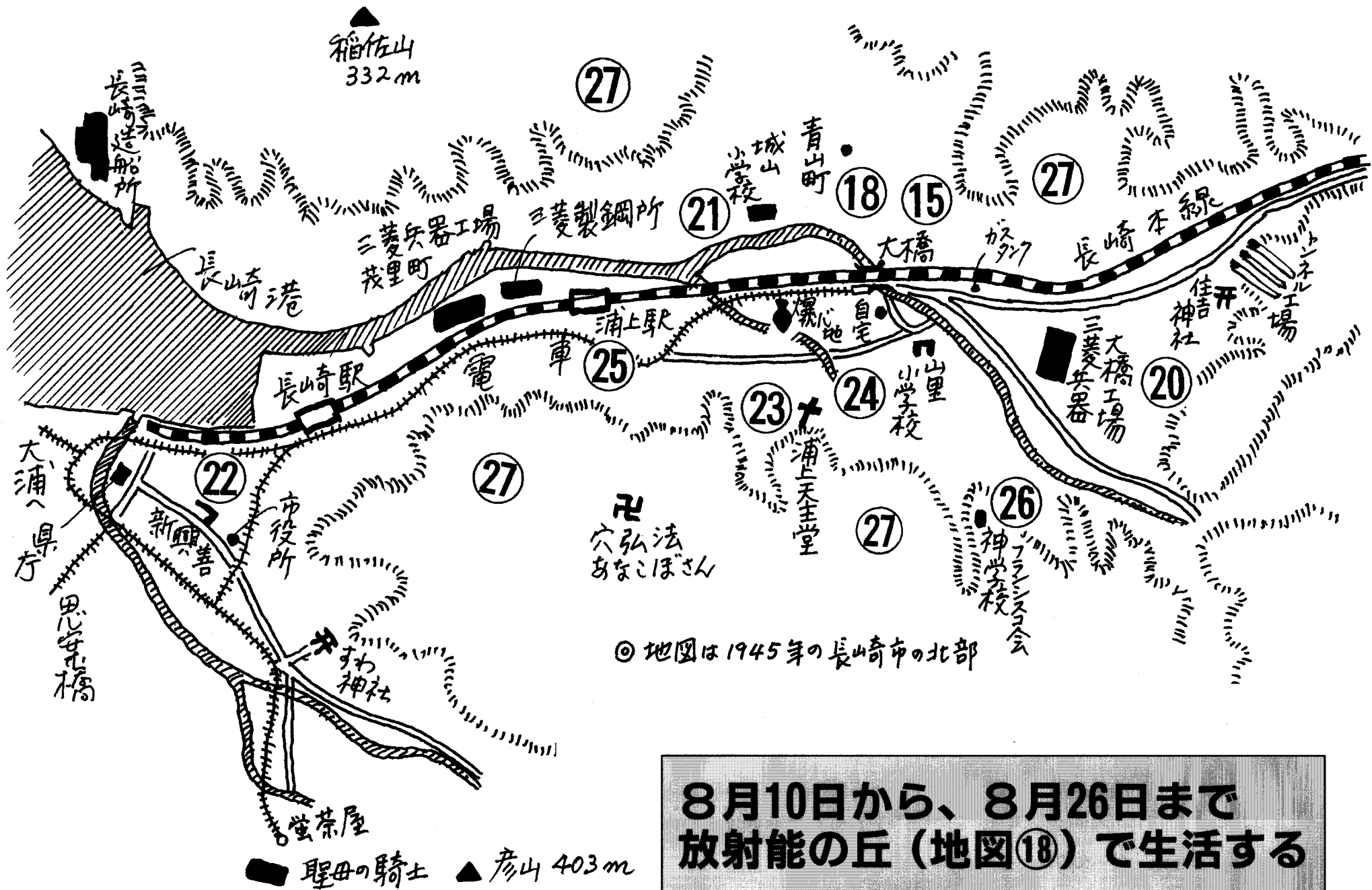
負傷者を乗せた救援列車は道の尾駅に引き返し、さらに駅に集まっていた負傷者も乗せて諫早、大村、川棚の各駅へ運んだ。

結局、光武さんは仮眠は取ったが、三日間ほど列車の運転に従事した。何往復したかは覚えていないという。

そもそも三一一列車は、定刻通りに運行していれば、浦上駅付近で被爆している。「私は十五分の遅れのために助かりました。助かったので多くの人に助かってほしいと頑張ったつもりです」

(以上、『毎日新聞』より)





◎ 地図は1945年の長崎市の北部

8月10日から、8月26日まで
放射能の丘 (地図⑱) で生活する

放射能の丘で、生活する

八月十日から、八月二十六日までの生活

城山で、野宿(地図の⑬)

(爆心地から、一・二キロメートル)

【野宿の丘で死す】

原爆の日の翌、十日には、岡町の被災地から、山口の家族と共に、城山の原子野へ移転した。その場所は山口秀市の、親戚の家『池田ヒデさん宅』があった所である。

私と、秀市は『ヒデ宅』の丘で、八月二十六日の日曜日まで、十七日間、過ごした。

今、考えてみれば、放射能の真っ只中で、生活したことになる。

食べたり、飲んだり、汗まみれになったり、看護したり、死体を焼いたり、真に多忙な毎日だった。私にとっては、過酷な労働の日々となった。

戦争とは、何と、混乱、多忙なのであろう。死と隣り合わせなのに、自分の死は考えない。私が、原爆症にならなかったのは、真に不思議である。

原爆のことを、私たちは、「ピカッ、ドン」爆弾と呼んだ。ピカッと光って、ドカンと来たからだ。「この爆弾は、七十年間は、草木も生えない」とさえ、噂され、知らぬままに、恐怖の放射能は、じよじよに、人も、動物も、蝕んでいた。

肝心の細かい、確実な情報は、個人には全く入らない。原子爆弾とわかったのは、ずっと後になってからであった。

現実には、無キズだった女の子たちが、四、五日たつうちに、髪の毛が抜け、皮膚に斑点があらわれ、下痢、発熱、食欲不振、虚脱感などの症状が出て、次々に死んでいった。

これは一体、どういうことだ?

私は、一九五五年八月に、週刊『カトリック新聞』に『原爆記(六)』を掲載したが、それには次のように書かれている。

「こうして不安な日々が経過した。小さな娘たちは、泣きながら、相次いで死んでいった。私は廢墟から、タンスの引出しを探してきて、三人の死体を収容した。そして私は、死体の横で、いっしょに寝た」

可愛い女の子が、一人死に、二人死ぬのを待ちながら、幼児の死体を、棺桶代わりの、タンスの引出しに入れて、重ねて置き、次ぎに、死ぬのを待った。三人死んだところで、原爆の丘で幼児の死体をまとめて、私一人で焼いた。

人間のからだは、そう簡単に、燃焼できるものではない。それを、廃材や畳、雑誌類を死体の下に重ねて、朝から夜まで、無心に燃やし続けて、やっと骨にした。

こんな悲しい出来事はなかった。私は、この年になるまで、人間をナマで焼却したのは、この時が初めてであり、最後だった。こんな思い出は、二度と体験したくない。

【勝巳の死】

続いて、小学生の勝巳が、下痢をはじめた。高熱を発して、力尽き、終戦の日、聖母マリアの被昇天の祝日に、勝巳は、兄、秀市に抱かれて、死んだ。

「神父さんをお迎えできないから、罪を悔やんで、清い心になるんだぞ。天国へ行ったら、みんなのため祈ってくれ。早く、戦争が終わるように、祈ってくれ」と、秀市は涙をこぼした。勝巳少年の最後は、平和な死であった。

死ぬ前に、彼は私に、「おばさん（私の母）は、被爆の前に、家（山口家）の縁側において、皆さんと話していた。家に戻った直後、爆弾が落ちた」と、証言した。

秀市は、勝巳を可愛がっていた。末の弟ということもあったが、勝巳は、栄治よりも素直で、善良な少年だった。その勝巳の死は、兄、秀市を落胆させた。

【栄治の死】

ところで、後に残った工業学生の栄治はどうなったか。

勝巳が死んで、秀市は、栄治に更に辛く当たるようになった。配給の品を取りに行かせたり、何かと用事を言いつけた。その結果、栄治は原子病が重くなり、激しい下痢症状を起こし、衰弱し、動く力も無くなった。下痢をしても、着替えの下着もない。私たち（私と、秀市）は、彼の下痢症状をみて、「チフス（伝染病）に罹った」と、判断した。

「これは大変だ。困った病気に違いない」

彼の下痢の症状から、てつきり赤痢のような悪性伝染病と誤解し、私たちは、恐れ、嫌った。原子野で野宿していた庶民には、原子爆弾の実情や被害、原子病など全く知らされていなかった。全くの無知だったのだ。

しかも私自身が、下痢におそわれ、ガク然となる。

「二度は助けた負傷者だったが、この分だと、我々が危ない」

私と秀市は、膝つき合わせて、ヒソヒソと相談し、下痢患者の栄治を、山手の防空壕に隔離した。防空壕といっても、ただ穴を掘っただけの簡単なもので、周りに、人気はなかった。そして、日に一、二度、握り飯を運ぶに、とどめた。

少年は、次々に抜けていく髪の毛、変色していく手足を見て、どれほど不安に思い、苦悶したことであろう。哀れ、栄治は、山の防空壕に放置されたまま、ムシロの上に横たわり、独りで、数夜を明かした後、孤独のうちに死んだ。栄治を、「捨てた」ことが、今となっては、悔やまれる。

私の原爆体験の恐怖は、兄、秀市が、弟、栄治を、原爆の丘で痛めつけた、その一点に尽きる。家族の離反というか、そこに愛は、全く無かった。

愛の無いところに、絶望がある。兄は、肉親の弟を捨てた現実が、私の心に、原爆の傷として、何時までも残った。

特に、その思い出は、原爆の日から十年ほど経って、私が結核に侵され、右腎臓を摘出し、その後で、左の腎臓も結核に苛まれ、激しい血尿や、高熱に唸されて、死の一步手前まで入った時、何故か思い出されたのが、孤独の悲しさに死んだ少年『栄治』であった。

戦争は、原爆は、家族の愛さえ、引き裂く。多くの人が、家を失い、孤独になった。助かった者も、山の防空壕に置き去りにされ、孤独のうちに死んだ。

今にして思えば、寂しかったろう、苦しかったろうと、心が痛む。

大橋（地図の⑮）

（爆心地から、五〇〇メートル）

【食料配給、情報交換の場所】

大橋は、原爆後、交通の要所となり、『にぎりめし』の分配や、家族の消息を伝える貴重な場所となった。橋の欄干に、色々な、家族の安否や住所を書いた紙が貼られ、多くの人々が、見て通った。翌日からは、急に人通りが、多くなった。だが、まだ川には、死体が散乱していた。遺体を葬る者は居なかった。

【死体を自転車で運ぶ人】

大橋で、男性が、自転車の荷台に、子供らしい死体を二体乗せて、ヒモでくくり付けて、無心に引いて行く、悲しい情景を忘れない。

【キリストの首を拾う】

大橋と、私の家の中間あたり、まだ材木などが道に散乱していた頃、私がそれらを乗り越えながら歩いていると、ご像の一部、キリストの首を拾って、不思議な気持ちになったのを覚えている。何処の家のご像だったのか。わからない。おそらく家庭祭壇のご像だったのであろう。さして大きな首ではなく、首は色が着いていたが、汚れ、痛ましかった。

家野町の伯母宅（地図の⑳）

（爆心地から、一・七キロメートル）（現在は、家野町一八・一六）

【心配になって親戚を訪ねる】

私を可愛がってくれた伯母さん（母の姉）が、『家野町三区』に住んでいた。

（その家は、その家族は、大丈夫だったのか）と心配して、私の『原爆体験日誌』によると、「八月十一日、日曜日」に、訪ねている。原爆後の、初めての日曜日だった。

原爆前の地図によると、家の周りには、かなりの家々が建っていた。

家への登り口には、左手に大きな竹林があった。よく覚えている。家族の話では、登り口の右手は、隣りの家の石垣だった。伯母の家は平屋で、玄関を入ると、左に、炊事場、井戸、風呂場があった。右が、座敷になっていた。六畳、四畳半、土間がある。

【家族の被爆の状況】

家族の話では、伯母さんは、縁側で裁縫をしていたが、突然、爆風で、奥へ吹き飛ばされた。両足に、ひどい怪我をした。従姉の一人、十九歳の女子工員は、夜勤明けで、眠っていた。体に薄い布団を掛けていたので、頭部にだけ負傷した。

他の従妹は、三菱兵器に出勤していたが、幸い、軽い怪我ですんだ。

一番上の従姉の女の子は、玄関で遊んでいて、爆風で吹き飛ばされ、重症を受けた。

伯母と、頭に怪我をした従姉は、女の子を抱いて、町内の防空壕へ避難した。女の子の母は、市外へ、買い出しに出かけていた。夕方、家に帰る。

女の子の火傷は重く、三日後に、死亡した。家族にとつて、大きな悲しみだった。家は、半壊していたが、夕方になって、隣りの家から火が燃え移り、全焼した。

伯母と、従姉妹たちは、伯母の怪我のため動くことが出来ず、十日間ぐらい、防空壕で生活したという。後で、佐世保の従兄が来て、長与の学校へ避難させた。

伯母は私に、こう言った。「何ンも彼ンも、壊れてしまつて、沢山の人が死んで、全く、この世の終わりが来たかと思つた」

城山国民学校 (地図の②1)

(爆心地から、五〇〇メートル)

【食料の配給を取りに行く】

私の『原爆体験日誌』には、「八月二十日、朝から、城山国民学校に、配給ものを取りに行く。しかし人が多くて、帰つた」とある。

城山学校は壊滅し、多くの死者を出したが、残骸の建物で、生きていくためには仕方ない。多くの人たちが、わいわいと、集まり、食料の配給がおこなわれた。

「二十一日、城山学校にて、米の配給をとる。二十四キログラム」とある。

新興善学校しんこうぜんの海軍治療所 (地図の②2)

【救護所内の悲惨な情景】

隣りの家、山口の家族は、十一人のうち、九人が被爆して死に、二人、つまり老いた父、與平さんと長男、秀市だけが残つた。「何としても、父親だけは助けよう」と、私と、秀市は、全力を尽くした。しかし與平さんは、日毎に衰弱していく。

『日誌』によると、新興善小学校に設置されていた海軍の救護所に、「八月十七日、父親、與平さんを入院させる。私が連れて行った」とある。秀市と二人で、多分、リヤカーに乗せて、運んだように思う。長崎駅前を通つて、行ったのであろう。

新興善国民学校の校門を入ると、運動場があり、建物の左側、端の入口から、階段を上がる。治療所といってもベットはなく、二階の教室の、床の上に被爆者たちは横たわり、安静にするだけの処置だった。薬はなく、赤チンを塗るだけだった。

次々に、傷を負った被爆者が悲痛な面持ちで、詰めかける。皮膚の焼けた者、髪の毛が抜けた女性、全身、火傷の者、医師も看護婦も、手の施しようがなかった。原爆症の薬はない。症状はひどい。

【遂に、與平さん、原爆死する】

私は二階で、與平さんの看護にあつたが、彼はじよじよに弱つていった。

突然、隣りに寝ていた若い被爆者が、全身の痛みと放射能の苦しみに耐えかねて、昼間、二階から、飛び下り自殺を計った。皆、驚いて、窓の方へ走る。窓から飛び下りた男は、何と、玄関の上の、コンクリートのヒサシの上に落ちて、怪我なく助かった。

しかし彼は、翌朝、私が起きてみると、カミソリで首を引っ掻いで、自殺していた。

よっぼど、苦しかったのであろう。私は、直ぐ隣りで、生きる希望のない被爆者の運命を間のあたりに見て、心に衝撃を受けた。

私の『原爆体験日誌』には「八月十八日、十五時二十分、山口與平、五十八才にて死亡せり。残念ながら、色々の、看護の甲斐もなく、とうとう帰天してしまった。彼は毎日、ミサにあずかり、聖体を受けていた。熱心なカトリック信者であった」と記している。

その夜は、新興善の学校に泊まっている。だから私は、被爆後、八日目ぐらいからの、新興善の治療所の実態も経験している。

崩壊した浦上天主堂（地図の②③）

（爆心地から、五〇〇メートル）

【食料倉庫だった天主堂】

私は與平さんと、浦上天主堂の毎朝のミサに通っていた。

東洋一といわれた、その巨大な赤レンガ造りの天主堂も、一瞬のうちに崩壊した。

思えば深い天主堂が、微塵にも、跡形もなく、壊れている。その凄まじさに、啞然となった。何という爆弾がこのように、成したのか。天主堂の前の部分と、横の部分が、僅かに残っている。

天主堂は、軍部が接收した『缶詰・米』などの食料倉庫であったから、それらの品々が、何日間も燃えつづけた。特に、祭壇の辺りに、火は何時までも残っていた。

【天主堂の廃墟に立つ】

被爆後、何日頃か、わからないが、崩壊した天主堂へ行ってみた。缶詰か、何か食べるものは無いか、探したが、皆、燃えてしまって、黒こげになっていた。

瓦礫の間に立った時、かつて私が祈っていた天主堂の、余りにも、哀れな姿に、呆然となった。二人の神父と、聖母の被昇天祭の準備のため、告白に来ていた数十人の信者たちが、犠牲となったと聞いた。その場所は、どの辺りか、探したが、骨らしき物は見当たらなかったように思う。犠牲となった信者たちが、哀れであった。

（こよひとちう）

如己堂辺り（地図の②④）

（爆心地から、五〇〇メートル）

【丘にたたずみ泣いた】

今の、如己堂辺りの丘から、毎夜、真っ暗な原子野に座り、火で揺らぐ天主堂を度々眺め続けては、泣いた。

ただ、夜空の星々だけは、美しく輝いていた。あの情景は忘れない。

【幻の『天主堂』墨絵】

永井隆博士は、如己堂辺りから浦上天主堂を墨絵でスケッチしたが、これは現在、永井図書館に保存されている。

永井先生は原爆の翌年、聖母の騎士中学の理科教師になった時、私たち中学三年はその生徒で、永井先生は、特別に、私に、そのスケッチを貸して下さった。私はそれを模写した。絵の出来ばえは、原画にそっくりだったと思っている。

その後、私が模写した『崩壊した浦上天主堂』の墨絵は、自分の手元に残していたが、進駐軍が入り、戦争資料を厳しく糾弾していると知って、その絵も、手に持って写した写真も、証拠を残さぬように、自分で燃やしてしまった。今になっては、惜しまれる。

浦上駅付近 (地図の②5)

(爆心地から、一キロメートル)

【浦上駅辺りに死体が散乱】

何故、浦上駅辺りへ行ったのか。多分、秀市が、三菱製鋼所に勤めていたので、何かの物資の調達に行ったのであろう。浦上駅は壊滅し、駅周辺に、死体が散乱しているのを、はつきりと覚えている。死体は、何日も、放置されたままであった。

汽車が、何日頃、何処まで進入してきたのか、私に記憶はない。

『原爆体験日誌』には、「二十二日、製鋼所に行く。種アブラニカンとる」とある。

浦上神学校 (地図の②6)

(爆心地から、一・四キロメートル)

【日曜日のミサ】

八月二十六日は日曜日、廃墟となった原爆の丘を無心に歩いて、天主堂の残骸を眺めながら、本原へ上り、浦上神学校（フランシスコ会修道院）で、ミサに与かりに行く。

ミサには、幾十人が集まっていたであろうか。まばらに、膝まづいて、祈っている写真が残されている。フランシスコ会の修道服を着た神父が、写っている。

私は、亡き母のため、また浦上の神父のため、信者のために祈った。

【建物の被害状況】

建物の窓ガラスは吹き飛ばされた。強烈な熱線を受けたが、建物自体は残っていた。

被爆した大勢の負傷者が、悲惨にも、横たわり、苦悶している。ムシロを敷いて、寝ていた。あの痛ましい光景は忘れない。自分の無事を感謝した。

日曜日のミサの後で、原爆の翌日より行動を共にしていた山口秀市と別れている。

長崎の山々(地図の②7)

(爆心地から、一〜二キロメートル)

【山々は燃え、木は枯れた】

稲佐山や、大学病院裏山の穴弘法山(あなこぼさん)、岩屋山など、市内に面した山々は、草も、木も、全部燃えて、枯れ木が、ニヨキ、ニヨキと、曲がった形で立っていた。枯れた、茶色の山肌が、長い月日、続いていた。一発の原爆は、一瞬にして、広大な緑の景色までも、奪い去った。これが長崎の被爆風景だった。

この爆弾は『七十年は、草木も生えない』と噂されていた。

父の故郷、外海・黒崎村で、静養する

【原子野を去って、黒崎へ帰る】

私の『原爆体験日誌』によれば、「八月二十九日、長崎警察署で、母親の死亡証明書を貰い、舟にて、父親の里、黒崎村へ帰った」とある。

【黒崎村(伯父宅・父の生まれた家)に帰った私は、如何なる思いだったか】

(私の記録の中で、戦後の状況を示す記事のみ、ここに記載する)

九月十六日、日曜日、曇雨

昨日、小舟から長崎迄出て来たのであるけれども、聯合国の進駐軍が本日上陸するらしいので、従兄吉松氏もあぶないから今日かへたらよからうと、本日朝十時頃、水ノ浦発、黒崎へ徒歩で向った。

水ノ浦には米国艦隊が十七八来て居り、浦上は早やき日と何んら変ることなく一面のやけ野原となって、いやな、にほひが鼻をつく。

浦上を出て道ノ尾に至る途中、雨にあひ雨ごいし小降りなるを幸ひ進む。汽車道を歩行して行ったら踏切で鉄道員よりしかられる。道ノ尾より横道に到り、為石峠にくる。そこで晝めしを食って下る。敏刈、京泊に來り、三重に入る。

途中、山又山で、唯一人歩み、雨にあひ、風に吹かれてやっと三重に來て安心する。時に三時半。それより元氣出して黒崎に向ふ。

九月十七日、月曜日、曇雨後大風

自分も色々と将来について考えてゐる。何もかも側(?)米国兵の上陸し、おちつくま



ではどうにもならない。

九月十八日、火曜日、晴

昨日の大風も今日はからりと晴れて好い天気となる。朝から日光をあび、草刈に行く。晝から草刈りに行ったが、遊んで、歌でもうたって、遊んですごした。田舎はいい。しかし百姓はきつい。

九月十九日、水曜日、晴

今日は昨日に続いてよい天気であった。朝から草刈どもいって一寸ばかり家の横の畠に馬鈴薯を植えた。百姓もいゝもんだなあ。

九月二十日、木曜日、晴

天気良好。朝から万次郎伯父の小屋を修理するのに手傳つてすごしてしまふ。自己も佐世保の叔父の所に一度行つて見たいと思つてゐるのであるけれど、船の通行禁止で行く事が出来ず残念だ。

九月二十二日、土曜日、雨

一時好い天気となつたけど、又雨となる。一日中、家の中に遊し、くらししてしまふ。午後、一寸雨の止んだのにまかせて、カテイシのみをひろひに行く。

アメリカ軍隊も二十六日頃上陸するといふので、びくびくしておそろしい。どんなにされるか知らないけど、どうせ日本人はもう駄目になつてしまふ。世界一等國となりたる、去る年の大日本。今は見るかげも全くなし。

日本は強かった。しかし弱かった。魂はやっぱり野ばんだ。日本人はヤンキーなのである。あゝ、我々日本人はいかにすべきか。全く不明だ。

九月二十四日、月曜日

朝より三重にゆく。用件は己の手の出来ものを見てもらひに医者にゆく為だ。葉をもらつてかへつて来た。三重村の山中より海を見ると、ものすごいアメリカの艦船。アメリカは物量國だ。戦は物がなくてはいかん。

日本は何故負けたるか。物なかりし為と思ふ。あはれなる日本、小さき日本。世界一等國より、とうとう昔のジパンにかへつてしまった。いまから、いかなるかは、天にまかすより、しかたがない。どうなりとは、なろうよ。

九月二十五日、火曜日、晴

朝から、はだしになって、家の者と二人、たきものひろいに行く。全部で五、六か、いになったら、少しかたが、いたかつた。百姓もなれぬうちは、やオいかんぞ。しかし働いたる嬉しさは働くものにか、わからない。これからも働こうと思つてゐる。

九月二十六日、水曜日、曇

手に小さい小粒のふき出ものが出て困つてゐる。早くなほしたいと思つてゐるのである

けれども、仲々なほらず皆から、きはられて、おうジョウしてゐるのだ。明日又、出津の医者にでも行って見よかとも思つてゐる。

丸小屋の若者が歸つて来た。陸軍軍人で、軍曹とかいつて居て、鹿児島にゐたそうである。無事かへつて来て何より、よいことはない。

九月二十七日、木曜日、曇雨

出津の医者に行く。出津の医者の中に入ったら、耳鼻科婦長檉山玉乃さんが来て、ぐう然の面會をする。色々小時間話した。

話し中、あの去る年、五島君との二人のいたずらを思ひ出してはなつかしく思った。婦長さんは戦災の時、耳鼻科二号室廊下にゐたそうで、突然、光を見、穴コボ山に逃げて、十八日、出津へ来たそうである。

耳鼻科部長、医博、長谷川高敏先生初め江上医博等、傷して、それぞれの親類の田舎へおちのびたそうである。又、寫眞屋の北岡さんが傷して（後日、亡くなり）、玉屋さんが即死、他看護婦も大半死んだそうである。

（注・私は、昭和十八年春、カリエスの病気が快癒し、大学病院を退院した後、身体を馴らすために、同じ大学病院の耳鼻科の研究室に勤めた。それは、博士号を取得する医局・医師たちの手伝いをしていたのである。婦長さんとは、その時の知り合いだった。おそらく私は、そこへ長年、勤めていたら、原爆死していたであろう。幸い私は、間もなく三菱兵器製作所に勤務するようになったから、助かった）

ほんとうに聞いても聞ききらぬ話だ。

九月二十九日、土曜日

朝早、ミサ聖祭、拝聴して、かへりよつたら、元焼医者の中で、前病院入院時代の看護婦、今里さんに、ぼっかり會つてしまひ、非常になつかしかつた。今里さんは今から瀬戸（約五里ある）迄、歩いて行くといつてゐた。看護婦姿をしてゐないので、一寸見わすれる様に思へたけど、矢張り、頭はかはつてゐない。

色々も、ずい分、自分も、母も、お世話になつたものだ。道々歩んで話したので、十分語る事が出来なかつたけど、思ひ出してなつかしく、又母が非常にこひしかつた。母が死んだと言うと、びっくりしたらしく、ほんとうに、ほんとうに、おしかつたと、くやみ申してくれた。

十月一日、月曜日、雨

一日中、雨の降つてゐたので、家の中でくらししてしまつた。村川元三のキャ小母は今日小舟からかへる。ずい分、雨にぬれたる事であろう。今日から十月に入る。早いものだったなア。実際、年月矢の如しだ。五島君に便りかく。（注・五島君は爆死していた）

十月二日、火曜日、曇雨風

嗚呼、自分は何如にすべきす可きや。

自分は長崎にて母を失ひ、家を失ひ、財を失つて今、黒崎の伯父の家で考へてゐる。

行先を思つてゐるけど自己は全く今氣のくしゃくしゃとなつてしまつて居る。即ち自己

は伯父の家にて、やっかいになって居り、去る年二年前も約半年養生で世話になったこともあった。その時を思ふ。

自己は三ヶ年の病まの為、身も心もくたくたとなりて、浦上の伯母方に半年、黒崎伯父方に半年、約一年間の後養生をした。その時、その一年間の後養生ないとしたら、今の健康を保つ事は出来なかつたかも知れない。幸ひにして今健全だ。あの黒崎にて、ぶらぶら半年遊したのも、むざむざ無駄ではなかつたと思つてゐる。

あゝ、我、どこかえゆきたい。唯一人さびしく暮したい。母もなき我、あゝ、いかにすべきぞ。我が母よ、いづくにさまよひつゝあるや。

十月三日、水曜日、曇雨

今から三年前、自分は長崎大學病院調外科に、白きベットの中にて養生してゐ、又今日はその中で一番くるしき脊髄手術をした日である。手術したる時は午前九時頃であつた。

當日は、ずい分苦しんだ。思ひおこせば実に書ききらぬ、書きつらぬることの出来ぬ思ひがある。話しかわして……

あゝ自分は一人となつてしまつた。やさしき母も生せず、あさはかなる過去も去つてしまひ、今迄のわがまゝ夢ときえてしまつた。

して今自己は親戚の家に居る。

十月四日、木曜日、曇

隣家の者で長崎に働きに行つてゐる婦女子の者が夕食後、我が家の縁先に来て、長崎の米國兵について語つた。

その語る所によると非常によく米國兵はそんな、ざんぎやく、なる事はせず、子供もアメリカの伯父ちゃんといつて、ついて、さるく位だそうで、一寸ばかり安心する。何しろ黒崎の者はとても、こちよう、しやすく、びくびくしてゐただけ、そんななら大丈夫だと思つた。

十月六日

自己は今からいかにすべきか。意を決して佐世保へゆかんとし、永田の濱まで出る。しかし大正丸は佐世保へはゆかず崎戸迄と聞いてかへる。

しかし突然その大正丸で従兄(長崎在住)の来る。しかし日返りだそうで晝めしても食つて大正丸からかへる。

長崎の工場は止むそうである。しかしあんまり、はつきりは不明だ。

十月七日、日曜日、晴

日曜日だ。家族の者は三重田の濱に、神父様達と一諸に遠足をした。己は一日中、晝寝する。正太郎も遊び来た。朝鮮の武助の伯父さんが来る。

十月八日

聖母の騎士へ入学する。

(以上で日記は終わる)

アウシュビッツと原爆の違い

【聖母の騎士へ入り、アウシュビッツを知った】

当時、私が書いた『原爆体験日誌』は、『昭和二十年十月八日』まで続いているが、原子野に居たのは、八月二十六日までで、その後は、十月八日まで、父親の生まれた故郷、外海の黒崎村で休養している。

そして『昭和二十年十月八日』、秋雨の日の午後、私は、長崎市・聖母の騎士修道院の門を叩いた。私にとって新しい門出であった。

聖母の騎士へ入って、そこで聖母の騎士修道院を創設したマキシミアン・コルベ神父を知る。彼は東欧ポーランドの宣教師で、一九三〇年四月に長崎へ来て、六年間、主に雑誌を通して、宣教活動に専念した。

その後、ポーランドへ帰国し、やがて大戦に巻き込まれ、アウシュビッツ強制収容所へ送られて、収容所で死刑に当てられた一人の男性の身代わりとなって、餓死の地下室で殺害された。

コルベ神父の愛を知った私は、神父の生き方に引かれ、七度にわたって東欧ポーランドを訪ね、毎回、アウシュビッツを訪問した。

アウシュビッツでは、百万人が、ガス室、銃殺、餓死、人体実験で、殺害されたといわれている。今世紀最大の大量虐殺の場所となった。しかし、如何に多くの人が殺害されても、アウシュビッツと原爆の意義は、全く違っている。

原子爆弾は、核兵器なのだ。核兵器は、地球をも壊滅させる威力を持っている。まさに二十世紀最大の出来事の筆頭は、核兵器の製造、爆発であった。

核兵器は、人類をも滅亡させる。『核兵器廃絶』の念願は、そこにある。

世界の各国が、こぞって、核兵器を完全に『廃絶』しなければ、地球に平和は来ない。核兵器は、普通のバクダンでは無いのだ。放射能が持つ恐怖は、体験した者でなければ分からない。このバクダンで、沢山の人が、親が、子が、愛する人が殺されたのだ。

このバクダンを二度と、繰り返させないためには、『ダメだ、ダメだ』と言い続ける。核廃絶を叫び続ける。

『二度と使いません、核爆弾は、もう捨てます』と確証を得るまでは、被爆者は死ぬことは出来ない。それは生き残った者の、悲願でもある。

原爆の地獄を生き延びた私たちは、核兵器の無い平和を確認してから、死にたい。

もう二度と、あのような体験をしてはならない。

被爆した時は、十七歳であったが、既に、七十一歳の老人になってしまった。被爆者の平均年齢は、六十九歳だという。後、数年も経てば、被爆者は居なくなるであろう。

現在でも地球の何処かで、民族間で、宗教の対立で、絶えず戦争が繰り返されている。何時になったら世界の人が、兄弟として、手を結べるのか。

戦争と、核兵器の無い世界を願ひ、祈っている。

赤迫トンネル兵器工場の証言

あかさこ

【私が属していた精密機械・森組長の話】

森清氏は、私が働いていたトンネル工場の組長である。

一九九四年九月二十二日。『長崎市西北町一四の二七』の自宅で、およそ五十年ぶりに再会した。

森清氏は、一九二一年、大正十年生まれ。旧制・海星中学卒業で、当時、二十三歳。家は、橋口町（如己堂の下）にあった。

三菱兵器トンネル工場は、九一式航空機魚雷部門で、海軍の警戒隊が守っていた。警戒隊は、戦闘帽をかぶっていた。憲兵も時々来た。精密工場に、森組、伊藤組（小型ペンチレス機械）、萩原組、菅組（ボール盤）などの組があった。

組員は、工員が、十九人。二十五、六歳から十七歳の年頃だった。他に、女学生の学徒報国隊、八人。徴用の挺身隊、三人。合わせて、三十人だった。唐津や、沖繩、鹿児島から来た者もいた。報国隊は、モンペに、国防色の上衣だった。

森組長の下に、伍長の松尾義勝氏がいた。（現在、諫早市に健在）。工場長は、平巽（たいら・たつみ）氏。森組長の給料は、百七十円だった。

三菱兵器大橋工場から、何時、トンネル工場に移転したのか、昭和十九年の何月だったのか、覚えていない。

最初、四本のトンネルを掘って、後で、二本、追加した。六本となる。

赤迫側より見て、右から二番目と三番目のトンネルが、精密部門だった。機械は一行に配置し、勤務は、二交代。赤迫側の入口に、トイレがあった。弁当は、大橋工場から、トラックで運ぶ。トイレの傍で、弁当を受け取った。弁当は、機械の傍で食べた。食事は、大豆めし、ヒジキ、カボチャだった。

三番目のトンネル出口の裏に、鍛冶屋があった。フライゴで、ノミを叩いていた。掘削用である。

裏手の泉公園の上に池があつて、池の傍に、朝鮮人の集落があった。

住吉神社の前に、小学校があつたが、移転して、学校は三菱の寮となった。

長与のバス停、堂崎に、魚雷発射場があつた。

森清組長は、被爆後、原子病に罹り、終戦の年、三カ月、九大病院に入院した。髪の毛が抜ける。歯グキから、血が出る。下痢をする、などの症状で苦しんだ。彼は、酒を飲んだから助かったと言つて笑つた。桜の皮を煎じて飲んだ。

【赤迫トンネル工場の生存者たちに聞く】

一九九五年一月十五日。場所は、長崎市西北町、熊ヶ倉公民館において、赤迫トンネル工場に勤めていた生存者、四人が集まってもらい、午前十時から十二時まで、約二時間、当時の話を聞いた。

世話人は、私で、主催は、赤迫トンネル工場跡・保存の市民グループ会員、竹下芙美、松尾芙美子、平野伸人の各氏であった。

【体験者】三菱兵器製作所・赤迫トンネル工場・精密機械工場勤務者

名前	とし	生年月日	入社	職種
伊藤 文也	七十四歳	大正一〇・一・二	昭和一二・二月	昭和一六・組長
森 清	七十三歳	大正一〇・五・三	昭和二三・二月	昭和一七・組長
帯田 博	七十四歳	大正九・一・三	昭和一二・二月	昭和一八・組長
藤井 英枝	六十四歳	昭和五・三・一	昭和一八・	学徒報国隊・伊藤組
小崎 登明	六十六歳	昭和三・三・一	昭和一九・九月	工員・森組

《当時の住所》伊藤(稲佐)、森(橋口町)、帯田(長与)、藤井(桜馬場)

【大橋工場から住吉トンネルへ何時、移転したか？】

残念ながら五人とも、何年何月であったのか、はっきりとは覚えていない。

大橋兵器工場が、茂里町の兵器工場から分かれて出来たのは昭和十六年だった。そのとき伊藤さんは組長となって、大橋工場へ移ったという。

その伊藤組長の話によると、「自分は昭和十九年九月に、二十四歳で結婚した。その時はまだ大橋工場のようなことから、おそらくその後、その年の十月ごろ以降でなかったかと思う」と言っている。

小崎工員は昭和十九年九月ごろ、大橋工場に就職したが、二、三カ月はこの工場に通ったといっている。工場の上を、銀色に光らせてB29が編隊を組んで、飛んで行ったのを数回、記憶している。

移転にあたって、五人は機械を運んでいなし、当時の状況はよく覚えていない。おそらく機械を運んだ人たちも、もう亡くなっているだろう。

このように個人の記憶では、移転した年月日は、はっきりしていない。昭和十九年の終わりごろか、あるいは昭和二十年の初めだったか、トンネル工場の期間はおそらく半年か、七、八カ月位ではなかったか。

移転した時の様子の思い出として伊藤組長は、岩のごつごつした状態を見て「わーっ、これ、危ないな」と思った。

【現在トンネルは六本残っているが、移転の当時は何本使っていたか？】

トンネルは、電車側を『表側』と呼び、平田工業所側を『裏側』といっていた。

従って、大橋寄りから、一号、二号、三号トンネルと呼ばれていた。道の尾側から一号、二号と数える人もいるが、それは違う。

移転の時は、すでに一号、二号、三号が完成していた。四号は完成していたのか、五人

はよく覚えていない。五号、六号は工事中だった。半分ぐらいは掘られていたのだろうか。しかし機械は入っていないかった。

伊藤組は、一号と二号の配置。その間に通路があつて、藤井学徒隊員はその通路に机があつたという。森組は、二号トンネルと三号に機械をすえた。二号と三号の間にも、通路があつた。森組の机は二号にあつた。森組だった小崎工員は、二号トンネルの入口付近で、四尺旋盤の機械を操作していた。帯田組は、一号トンネルに職場があつた。

トンネルの長さは、一本が約三百メートル。そこに組が何組あつたか、全体として、わからぬ。

精密機械工場だけでいえば、伊藤組、森組、帯田組、萩原組、国友組の五つがあつた。それだけは確かである。森組長の話によると、器具工場も入っていた。ここではヤスリを使う。だが、仕上げの組は、入っていないかった。

【各組の構成と人数はどれ位だったか？】

トンネル工場全体の責任者として、工場長の平（たいら）さんがいた。

その下に黒川さん。その配下に各組があつた。

伊藤組は、組長、伍長、工員、学徒報国隊員（男女）から構成されていた。人数は二十四、五人だった。年齢は若く、皆、二十代、十代であつた。組長自体が二十代の若者だった。こうした若い人たちの腕に軍需生産は任せられていた。五十代や年配者の人はいなかったように思う。

工員たちの出身地は、長崎市内の外、沖縄、鹿児島、佐賀あたりから来ていた。

森組も二十四、五人。帯田組も同じ人数だった。

若い人たちに徴兵はなかったのか。伊藤組長は二度、大村へ入隊したが、兵器製作ということで返された。

伊藤組に、学徒報国隊の藤井さんがいた。報国隊と挺身隊はどう違うか。

報国隊は学徒。旧制・中学生や女学生、小学校の高等科の生徒もいた。挺身隊は一般社会人で、徴用になつて県外から来る。

学徒隊は、精密工場全部で、十四、五人いた、と森組長。森組長が学徒隊の担当だった。実習場に連れていって、練習をさせた。活水短大と瓊浦（けいほ）中学、長崎師範の学生が精密にはいた。二十歳の人がいたから、短大（専門学校か）は、当時もあつたと思うと森組長はいう。

藤井学徒隊員（瓊浦女学校）も実習をしたのを覚えている。大橋工場で、一カ月ぐらい実習した。工場内の中ほどに高くなつた部分があつて、そこに組長たちがいた。だから学徒隊員は、組長たちに面識がある。トンネルへ行ってからは、面識はなかった。女子学徒隊員たちは、雑用と、工員の成績を付ける作業をしていた。

【トンネルの中はどれほどの工員が働いていたか？】

ある記録によると、トンネルには一、八〇〇人が働き、うち八〇〇人は朝鮮人だったと記載されているが、一、〇〇〇人なんて絶対に、そんなには多くは居なかった。

二十四、五人の各組が、十組あつても二百四、五十人になる。しかも昼夜、連続操業の二交代だから、多く見積もつても二百人ぐらいではないか。明確な数は分からない。

トンネル工場には精密機械のほかに、第一機械も入っていた。長さ三〇メートルのトンネルにどれほどの機械が詰まっていたのか。

一つの機械に一人ずつ付いている。機械はあちこちに分散していた。トンネル一杯ではない。隙間がないと、怪我をするだろう。空間もあった。

また、トンネル掘削工事にあたっていた朝鮮人たちの人数も全く分からない。朝鮮人たちを見たことはあるが、話する機会はなかった。接触はなかった。情報交換はない。軍事上、機密を守る必要もあった。

【トンネル工場で何を生産していたのか？】

最初、茂里町の兵器工場では潜水艦用発射魚雷が多かったが、大橋に工場ができると、ここでは主に航空機用が作られるようになった。

「長崎兵器製作所の資料によると、大橋工場は、第一工作部で、九一式航空機魚雷部門。第一倉庫などがあった。茂里町工場は、第二工作部で、九五式酸素魚雷部門。第二倉庫などがあった」

トンネル工場の精密部門では、航空機用魚雷の生命となるべき推進の部分、縦舵器、横舵器、安定器を作っていた。魚雷の胴体は大きいのが、圧縮空気が入っている。空気によって、回し、走る。爆破栓は前にある。

精密工場が使用していた機械は四尺旋盤、六尺旋盤、中型機械、ターレット、ボール盤、ミールリング、ペンチレス（八千から一万回まわして、削っていた）などで、手のヒラに乗る小型のマイクロメーターで、一センチの一〇〇分の一まで精密に計って製品を仕上げた。マイクロメーターを失うと、盗み合いもあった。

機械はアメリカ製だったという話もあるが、アメリカじゃないだろう。伊藤組長は戦後、払い下げを受けた時、チェコ製はあったという。ほとんど国内の『イケガイ』製作所だったと森組長。外国製があったとすると、ドイツ製ではなかったか。

小崎工員は、四尺旋盤で安定器の部品を作っていた。

伊藤組長によると、航空機用の魚雷は月産、八十本ぐらい。飛行機には二本づつ搭載した。南方戦線で、戦争の成績があがると「長崎の魚雷が一番」と、発表があった。

赤迫トンネル工場のほか、道路の戸町トンネルや日見トンネルにも、工場の機械が片面入って操業していた。

【トンネルの一日の生活はどうだったか？】

工員や組長、工長はヒラの工員で、マークは三菱の『青』マークだった。工師、技手（ぎてい）、技師などが職員の『赤』マークだった。

就業時間は、昼勤務は朝七時から夜の七時まで。夜勤は夜の七時から朝の七時まで。組の二十四、五人を二組に分ける。

女子報国隊の場合は、そんなに早くからの出勤ではなかった。

当時は、電車は大橋が終点で、そこから下駄で、赤迫（住吉）のトンネルまで歩いた。途中、大橋本工場には寄らない。まっすぐに出勤した。

電車側（表）から入る。出勤すると、木札を返す。大橋工場ではやってしたが、トンネルで名札があったか、覚えていない。現場では組長が出勤簿をつける。朝礼もあり、組長

に敬礼をやった。全体の朝礼も時々あった。トンネルでは、朝礼はなかった。

伊藤組長は、大橋工場と両方を受け持っていたという。魚雷の縦舵器の粗削りをトンネルでやって、仕上げは大橋工場で完成させた。商業学校（油木）にも疎開工場があった。そこへも行っていたから、トンネルだけには居なかった。

仕事をズル休みする者、さぼる者は制裁をうけた。組長が叩いたり、工員一人一人に叩かせたり、あるときは海軍の警戒隊が叩いたりした。

個人の成績は、女子学徒隊係が記載する。個人にはノルマが課せられた。例えば一部品を一時間で作るよう課せられる。それを四十分で仕上げると、成績があがるわけだ。報奨金がでた。昼まで作業。時々停電していた。すると機械が回らない。皆、よろこんでいた。原爆の時も停電した。トイレは電車側、一号トンネルの入口付近にあった。

昼食は大橋工場から弁当を運んできた。弁当は木の器だった。メニューはカンコロ、大豆、大豆カス、黒ずんだ野菜などであった。休憩時間は何もすることがない。寝たり、山に遊びに行ったりしていた。朝鮮人集落が六号トンネルの先の方であった。

当時の給料だが、伊藤組長は、昭和十二年二月、入社した時は九十銭だったという。養成工をすぎると、給料はあがった。小崎工員は昭和二十年頃、七十円、原爆の頃は、残業をして九十円から百円、貰っていたように思う。

住吉神社の隣りに西浦上小学校があったが、学校は休校になっていて、三菱の寮になっていた。

【海軍の管理体制はどうだったか？】

三菱兵器製作所は、帝国海軍の管理体制にあった。海軍の詰所は大橋工場内部の裏門のあたりにあった。森組長は、連れて行かれたことがあるので、よく覚えているという。

トンネル工場には海軍警戒隊は常住はしていなかった。

しかし、原爆が落ちたあと、小崎工員はトンネルの中で、武装した幾人かの海軍警戒隊を見ている。彼らが命令を下したのを聞いている。

【原爆が落ちた時、トンネルはどうだったか？】

伊藤組長——男子学徒隊員と商業学校の工場へ行く途中、松山町あたりで被爆した。

森組長——トンネル工場の裏側の、外にいた。森組長は、萩原組長と黒川と松尾伍長といた。爆風は感じなかった。爆音が聞こえて「敵機じゃないか」と空を見上げた時、光った。トンネルへは入らず、山へ逃げた。後で下って来て見ると、家が倒れていた。すごかったんだな、と思った。その夜はトンネルに泊まった。

帯田組長——一号トンネルのなかで、入口から五〇メートルぐらいの所にいた。帽子が吹っ飛んだ。倒れはしなかった。爆風はどちらから来たか？自分は入口から来たと思った。夜は長与の自宅へ帰った。

藤井——一号トンネルの電車側にトイレがあった。トイレを出て、トンネルへ入った時に被爆した。爆風が電車側から来たか、裏側から来たか、わからない。裏から傷ついた被爆者が入って来た。自宅は桜馬場。原爆の日は帰れない。その夜はトンネルへ泊まった。

小崎——二号トンネルの、自分の四尺旋盤機械の所で被爆。最初に会ったのが、入口からトンネルに入ってきた女子学徒だった。彼女の髪の毛が焼けていた。昼の弁当を取りに外

へ出ていたら、ピカツとした。こんなに焼けてしまったと言って、泣いた。その後、けが人が次々に入ってきたので、海軍警戒隊が「元気な者は外に出ろ」と命令し、三、四人（名前前は、山崎、中島、鹿谷、岡崎など）の工員とトンネル外に出た。（松尾伍長は、私と、鹿谷を覚えていたと言った）

小崎工員は、大橋工場を経て、爆心地から五〇〇メートルの自宅まで接近、母は行方不明、家は焼失していた。仕方なくトンネルへもどり、トンネルの外で一晩を明かした。

トンネル内にいた人たちは怪我をしていない。怪我人は外から入ってきた。

トンネルの前まで、汽車が入ってきた。トンネルの前から、怪我人を乗せた。その先、浦上方面は燃えていて汽車は行けなかった。

【トンネル保存についてどう思うか】

森組長——一度見に行ったが、また見たいとは思わない。保存については、長い歴史があるところではない。外国人が掘った。今は個人の財産になっているらしいから、その人のことも考えてやる必要もあろう。緑を保存する意味で、賛成だ。

伊藤組長——行って見たいと思う。

藤井——一度電車側から訪ねて、覗いて見たことがあった。

【トンネル工場・精密機械の生存者の会】

伊藤組長——大橋工場の大型機械の人たちと、年一回、集会を持っている。しかしトンネル工場の話は何も出ないので、あの人たちはトンネルに移転していないのだろう。

トンネルに居た精密機械部門では、生存者たちが、年一回、集まっている。

一九九四年十月二十六日、長崎市八幡町の山川荘に、生存者たちが、十人、集まった。

私も初めて参加した。

参加者は、伊藤文也（組長）、帯田博（組長）、森清（組長）、川下正（伊藤組）、佐藤哲夫（伊藤組・伍長。後、神父となる）、松尾義勝（森組・伍長）、藤井英枝（伊藤組）、沼鈴（森組）、山口勇（伊藤組）、小崎登明（森組）、以上である。

【元・学徒報国隊の女性の証言】

トンネル生存者の会に入っているが、欠席した中村貴志子氏（長崎市）は、電話で私（小崎）に、次のように語った。

「学徒報国隊として、トンネル工場で、帯田組に属していた。昼前、工員さんたちの弁当を取りに、赤迫の方へ出ていた。時間があつたので、トイレに行こうと近寄ったら、トイレに誰か入っていたので、待っていたら、ピカツ！とした。

急いで、伏せた。周りは、白いゴミ、けむり、見えない。しばらくして、トンネルの穴が見えたので、直ぐ前のトンネルに飛び込んだ。髪は焦げたか、わからない。衣類や、皮膚は、何ともなかった。

一晩、トンネルで過ごして、翌日、大橋から、人の後に付いて、桜馬場、瓊浦（けいほ）の寮に帰った」

その後の放射能障害・原爆症は？

【疲労感と、下痢に苦しむ】

私は原爆当日、爆心地から五〇〇メートルの自宅まで帰った。今、考えてみると、原子爆弾などは、全く知らずに、放射能の真っ只中を歩いたわけだ。

そして翌十日から二十六日まで、十七日間、爆心地から八〇〇メートルの地点で、野宿し、汗を流し、水を飲み、煮たきし、生活している。

放射能は、山ほど、浴びている。その私に、放射能の障害は、無かったのだろうか。次のような話を、当時は、度々聞いた。

「被爆後、二、三日して、或いは数日して、原子野に入り、家族や知人を探し廻り、数日、滞在した後、長崎市を出て、他の都市、町村に帰った人たちが、次々に髪の毛が抜けて、歯ぐきから血が出て、高熱に侵されて、死んでいった」

「こんな奇妙な、バクダンは無い。恐ろしい爆弾だ。一旦、助かっても、油断が出来ない爆弾だ。放射能がコワイ」

それに比べて、私は、不思議にも、髪の毛も抜けなかったし、歯ぐきから血も出なかった。ただ虚脱感と、血便、下痢だけは、半年ほど続いていた。

下痢の症状は確かにあった。これは原爆病の症状だったのであろう。しかし症状は有っても、薬はないのだから、そのまま放置していたが、次第に症状は納まった。

疲労感が激しく、度々、昼寝をしていたのを、覚えている。

原爆症には罹らなかったが、四年後、腎臓結核や、背骨のカリエスが再発して、死の一步手前まで、落ち込んだ。

脇腹から、膿が出て、苦しむ。血尿、高熱で、右腎臓を摘出した。大学病院は、まだ復興していないので、町の小さな医院で、一人の外科医師だけで、手術をおこなった。

その後、また左の腎臓が結核に侵され、血尿と高熱、激しい腰の痛みに苦悶し、もう、お終いかと観念した時、幸運にも、結核の新薬が手に入って、今まで全く薬を飲まなかったためか、ときめんに効果が現れ、瞬く間に、快癒した。

昭和四十八年・一九七三年四月七日に、長崎・原爆病院で、最初の『原爆検診』を受けている。その時の記録が手元にある。

しかし原爆手帳の交付は、昭和四十九年三月七日になっている。以来、年に数回、原爆検診を受けている。これまで異常はなかった。

平成十一年・一九九九年五月十七日の原爆検診で、『多発性骨髄腫』の血液検査に少々の異変が見られた。

五月二十六日に、血液の再検査をおこなう。七月六日に、細密な血液検査の報告が届いた。専門的なことは分からないが、「I g Mが、六八で、L。I g Aが、四七三で、H」の数値で、「軽度のM蛋白血症があるが、現在は心配ない」とのことであった。

これから先、如何なる状態になるのか、不安である。

平和の願いを次の世代に託す

【感想文が送られてくる】

私の原爆体験を聞いた後、学校によっては、さまざまな取り組みがおこなわれている。福岡市西高宮小学校では、修学旅行から帰った六年生（百四十五人）が全員で、学校平和集会に利用した。体育館で、全校児童が集まって、『平和な世界をつくろう』と、六年生全員が演台の前に立って、「小崎さんは……」と、途中で、私から聞いた話を入れながら、一つの長い作文をつくり、発表した。その有り様をビデオに撮影して、私に送ってくれた。また、ある小学校では、授業参観日に、六年生が発表したと、便りがあった。

小学六年生の、ある女の子の手紙は、心に残っている。

「小崎さんの話を聞いて、女子学生を助けなくて逃げたので、イヤな人だと思いました。家に帰っておばあさんに、その事を話しました。すると、おばあさんは、『人間は、ドタン場になったら、誰もが自分の事を考え、弱くなるものだよ。小崎さんは逃げたかも知れないけど、材木の下敷きになっていた女子学生を助け出し、途中まで運んであげた。だから、あのおじいさんが通りかかって、線路まで運ぶことが出来たのだよ。もし、あのまま材木の下敷きだったら、女子学生は死んだかも知れないよ。小崎さんのお陰だよ』と言いました。それを聞いて、ああ、小崎さんは、やっぱり良かったんだなアと思いました。小崎さん、ごめんさい」

私にとっては、小学生の方が、話やすい。小学生は、興味がある話なら、熱心に聞いてくれる。その反応は、はっきりしている。最近では、絵を使って話を進めているが、絵を使わずに出してから、手紙が沢山、来るようになった。それだけ、インパクトが強いのかも知れない。小学生の殆どが、話の細かい部分まで良く覚えて、手紙の文章に書いている。

「最初、原爆資料館へ着いた時、余り見る気がしなかったが、小崎さんの話を聞いて、熱心に見ました」というのも有ったし、「一度見て、小崎さんの話を聞いて、また見に行きました」という感動もの、の児童も居た。

それだけに、若い子供たちに、私の体験を聞かせることは、生き甲斐になっている。話が終わった後で、色々な質問も出るが、手紙の中で、「なぜ、死体を焼いたのですか」という質問が書かれていた。そう言えば、（普通は土葬だったのに、なぜ、あの時、原爆で死んだ人たちを、皆、焼いたのだろうか）と更めて思い直した。死んだ人たちは、下痢などの症状があつて、（伝染病と思ったから焼いたのか、或いは、余りにも多くの死体だったので、軽くするために骨にしたのか）、その理由はわからない。しかし燃やしたのは事実である。土葬した思い出は、私には無い。

「小崎さんの話は、ビデオより、すごく、かんどろ、しました。とくに、三人を、やくところ、一ばん、ここに、のこりました。この話を元に、せんそうを、おこさない心をもって、いきたいと思います」（福岡県直方市、上頓野小学校、西貴久くん）

平和への思いを、次の世代に託す、それが、せめてもの願いである。

【あとがき】

私が『原爆語り部』になって、満五年が経った。

一九九九年・平成十一年の原爆の日、八月九日。この日、私は、長崎市・浦上の、山里小学校の体育館に於いて、児童、先生、父兄など、合わせて七〇〇人余りの前で、原爆の体験を語った。

私の自宅は、当時、山里小学校（国民学校）の直ぐ前であった。

原爆の日、私は、学校の石垣の下を通り、数々の思い出を持っている。

その実話を、ぜひ、山里小学校の皆さんに聞いて欲しい、それが私の、前々からの願いであった。それが今年、実現して、嬉しかった。

この日の語りは、一〇一回目を数える。

話の後で、新聞記者が寄って来て、「最近では、子供たちは、原爆体験を素直に受け止めてくれますか」というような質問した。私は、ためらわずに、答えた。

「もちろん、子供たちは何時も真剣に聞いてくれますよ」

幸いに私は、体験を語った後で、イヤな思いや、後悔をしたことは一度も無かった。

【小崎 登明（おざき とつめい）】 本名、田川幸一。

昭和三年・一九二八年三月一日生まれ。カトリック修道士。

長崎・原爆の後、二カ月して、長崎市・聖母の騎士修道院へ入る。

終戦の翌年、一九四六年四月、聖母の騎士中学の三年となり、中学の勉強をやり直す。

中学三年の理科の教師は、長崎医科大学教授の永井隆博士であった。四月から、十二月頃まで、永井先生に、週に一回、理科（人体）を学んだ。

永井博士は、人体の不思議な仕組みを教えると共に、平和の大切さをも力説した。

長年、宗教雑誌の編集者や、私立・小学校、中学校の校長を六年間勤め、現在は、長崎市・聖コルベ記念館で案内係を勤めている。

著書に『長崎オラシヨの旅』『西九州キリシタンの旅』『長崎のコルベ神父』『十七歳の夏』『春いつまでも』などがある。

また、一九九七年十二月から、一年四カ月にわたって、『テレビ長崎』が、私の生き方を主題にした作品、『生かされて・ある修道士の半生』（一時間番組）を製作し、一九九八年五月に、全国二十七局のテレビで、放送された。その中に、私の原爆・語り部の場面も収録している。

住所／〒850-0012

長崎市本河内町一九六 聖コルベ記念館

小崎 登明

電話／〇九五・八二四・二〇七九

FAX／〇九五・八二五・二〇七五

発行日／一九九九年八月九日 第一版 一、〇〇〇部出版

発行所 聖母の騎士社

〒 850-0012

長崎市本河内町一九六

電話 〇九五―八二四―二〇八〇

FAX 〇九五―八二三―五三四〇